

# 『後漢書』郭太列傳の構成過程

—人物批評家としての郭泰像の成立—

安部 聡一郎

はじめに

後漢末期の政治・社会の状況は續く魏晉南北朝時代における貴族制との關係から注目を集めてきたが、特に戦後日本の當該時代史研究において重要視されてきたものの一つに當時の輿論がある。

周知のように、宇都宮清吉氏の指摘を引き繼ぎつつ、宦官という強力な敵對者の存在と、それに對抗する原動力としての輿論を重視して貴族制の成立過程を論じたのは川勝義雄氏であつた<sup>1</sup>。氏によれば、この輿論を清議として巻き起こしていく原動力となつたのは太學生らであり、そしてその太學生の清議の首領が郭泰（郭太、郭林宗）であつた。もっとも氏は郭泰を清議の首領、「浮華交會の花形」としてのみ見ていたのではなく、特に増淵氏の批判を受けてからは、清流の代表的士人でありながら慎重に處士としてふるまい續けた、あるいは浮華交會の花形から「逸民的人士」へと轉向した人物と理解するようになっており、その意味で清流勢力が雑多な要素を含みながら一つの政治運動・抵抗運動としてまとまっていることを象徴する人物と位置付けているのである。

このようにみれば、氏のいう廣汎な輿論、あるいは清流の含みも多様性というものに迫るにあたって、郭泰は一つの手掛かりとなる存在であると言えよう。さらに川勝氏の議論を批判する渡邊義浩氏においては、

しばしば「郭泰の規制力」という言葉が使われていることにも示されているように、郭泰は全國的なレベルの名聲の場の主事者と位置づけられている。勿論氏の本意としてはこうした活動を行う「人物批評家」の典型、代表者として彼の名を擧げているのであろうが、郭泰が各地をめぐる人物評價を行ったことで本來各郡國で散在的・分裂的であつた人物評價にある程度のまとまりが生まれたのであり、後漢末における人物評價尊重の風潮形成に決定的な役割を果たしたというのである。

かつて筆者は袁宏『後漢紀』・范曄『後漢書』と『東觀漢記』及び諸家『後漢書』・『後漢紀』等の佚文を比較し、袁宏『後漢紀』や范曄『後漢書』の記事は魏晉期の影響を受けて成立したものであることを論じた<sup>2</sup>。さらに同じ視點から後漢末期の黨錮の禁（西暦一六六・一六九年）の頃存在したという「天下名士」の「番付」についてその史料の形成過程を検討し、これが三國末・西晉以降形成された理解である可能性を指摘した。以上は史料のもつ歴史的性格を視野に入れて後漢時代史・貴族制形成史を論じ直そうとする試みであつたが、こうした關心から、貴族制形成期の研究において一つの焦點となつてきた名聲と輿論の問題にアプローチする手段としては、清流の多様性を代表する存在、あるいは人物批評家の典型、全國的なレベルの名聲の場の主事者と位置づけられる郭泰について検討することには意義があるであろう。

本論では、以上のような観点から、郭泰に關する史料をその成立年代に留意しつつ比較検討し、人物批評家としての郭泰像の成立過程の検証を試みる。まずは従來の郭泰理解の根底にあると思われる、范曄『後漢書』に記された郭泰の人物像の検証から始めよう。

## 第一章 范曄『後漢書』列傳五八にみえる郭泰の評價と先行する史料について

従來郭泰に關する基礎史料としてまず参照されてきたのは范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳であろう。従つて以下の行論においても、さしあたり范書本傳を基軸として、史料の整理及び検討を進めることとする。

實際の検討に入るにあたり、まず范曄『後漢書』本傳の内容を確認しておこう。范書本傳は〔史料1〕（後掲、以下〔史料1〕）〔史料8〕まで全て同じ）に示した。范書本傳は、郭泰その人の生涯を記した前半部と、彼による人物批評を集めた後半部に大別できる。さらに各部分は、その中心となる論題によつて幾つかの場面に分けることができる。通常、范書に先行する諸家『後漢書』・『後漢紀』や別傳等の佚文はこうした場面ごとに残っているもので、これらの史料と范書本傳の記述を比較検討する際の便宜を考え、ここでは場面ごとに區切り、中心となる論題を標題として掲げ、番號を附した。

以上のように整理してみると、一見して認められるのは、范書本傳は後半部、すなわち人物批評の實例を列舉した部分がより大きな比重を占めており、郭泰自身の生涯はそれに比べれば簡略な形でしか語られていないということである（〔史料1〕中では番號の種類を分けて示した）。このこと自體は表面的な記述量の多寡に過ぎない。しかし本傳末に記さ

れた「論曰」の内容は、事實范曄が郭太列傳をまとめるにあたって彼の人物評價の精確さに焦點を合わせていたことを物語っている。

論曰、莊周有言、人情險於山川、以其動靜可識、而沈阻難徵。故深厚之性、詭於情貌。則哲之鑒、惟帝所難。而林宗雅俗無所失、將其明性特有主乎。然而遜言危行、終亨時晦、恂恂善導、使士慕成名、雖墨・孟之徒、不能絶也。

范曄の論『莊子』には次のような言葉がある。「人の心は山川よりも險しく、理解しがたい。」〔『莊子』列禦寇篇〕日頃の舉動から理解することができるというものの、しかしそれはとても奥深くて明らかにし難いものなのだ。だから深く隠され厚く装われている人の性質は、心の動きや見かけとは違っているのである。人となりを識別するという賢明さは、堯や舜でさえ困難であるとするものであった〔『尚書』皋陶謨〕。しかし林宗は高雅な人であれ卑俗な人であれ間違つた評價を下すことがなかった。それは人の性質を明らかにするにあたって格別に根本となるものを持っていたからであろうか。しかし言葉を抑えめにし行動を慎重にして、ついに時勢に従つて隱遁することを滞りなく達し得た。順序よく巧みに人を教え導き〔『論語』子罕〕、士人たちに名聲をあげることをあこがれさせた。墨子や孟子のたぐいであっても、（彼を）超越することはできない（といえる）。

范曄の引く『莊子』列禦寇篇の文言は孔子によつて語られている言葉であり、『尚書』皋陶謨を踏まえて人物識鑒が堯・舜にとつても困難であつたと述べていることを併せ考えれば、范曄は郭泰の人物識鑒能力を聖人にも匹敵する並はずれたものと位置づけていることになる。續く後半の内容から見ても、范曄は郭泰が並はずれた人物識鑒能力を持ちながら慎重にふるまうことによつて身を全うし、さらに人々を教導して成果を残したことを評價しているのであつて、隱遁について觸れられているもののそれはあくまでその人物識鑒能力を前提としてであり、范曄の郭

\*譯文中の「角カツ」は典據を示す、以下同じ

泰評價が人物識鑒能力の高さを中核に据えていることは明らかであろう。文末で「雖墨・孟之徒不能絶也」と述べていることは、前半で堯・舜・孔子を引き合いに出して郭泰を稱賛していることを考えれば、言外にこれらの聖人と比肩しうる存在であると指摘しているに等しい。つまり范曄の論は①郭泰の人物識鑒能力の精確さに注目し、②これを彼の中核的価値にとらえた上でその生き方を孔子などの聖人に近いものと稱賛する、という構成になっていると考えることができる。この點で郭泰は聖人という最高位の存在によってその人物識鑒能力を權威付けられているのであり、著者范曄から後漢末の人物評論を代表する存在と位置付けられていることになる。<sup>7)</sup>ここから考えれば、人物識鑒能力の精確さという論旨を實證する必要から、本傳では後半部に重きが置かれる構成になったと見ることができよう。

この范曄『後漢書』に示された郭泰像が「はじめに」で觸れた従来の郭泰理解の背景にあることは明らかであろうが、それでは、このような郭泰評價、及びそれを證し立てるものとしての傳記はどのようにして成立したのであろうか。そもそも後漢末當初から、所謂「人物批評家」として郭泰を高く評價する向きがあったのだろうか。この問題の検討は、先にも觸れたように、郭泰が従来の貴族制成立期の研究において清流派の領袖と見なされる一方で「逸民的人士」とも近い位置にあると指摘され、清流派の性格の多様性を語る一つの論據とされてきたこと、あるいは名聲を基盤に構築される「名士」社會を相互に結び、調整する存在として位置づけられてきたことを考えれば、輿論、清流、逸民的人士など、従来の貴族制形成史研究において用いられてきた諸概念をその歴史的性格からとらえ直す試みとして意味をもつてであろう。

郭泰に關する史料は、まず范曄『後漢書』が下敷きとしたと見られる

史料群として、謝承『後漢書』佚文を始めとする諸家『後漢書』・『後漢紀』佚文、袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條が存在する。しかし郭泰についてはそれ以外に別傳（「郭太別傳」「郭林宗別傳」などと稱される）佚文をはじめ、蔡邕の手になる碑文や葛洪『抱朴子』外篇正郭篇など、子部・集部に屬する書物の中にもその評價を語り、それに關連して彼の傳記に觸れる文章が存在する。

これらの中で特に注目すべきは、ほぼ完全な形で伝えられている文章の存在である。管見の限りでは、以下の五點がこれに該當する。

① 蔡邕「郭有道碑文」

② 皇甫謐『高士傳』郭泰條

③ 葛洪『抱朴子』外篇・正郭

④ 袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

⑤ 范曄『後漢書』本傳

これらは、執筆者の立論をほぼその意圖通りに追うことが可能だという點で論旨の方向性や記述のあり方を検討する材料を與えてくれるものといえる。<sup>8)</sup>つまり前述したような范曄の理解がそれ以前の理解とどのような關係にあるのかを、評價の論理構成及びそれを證據立てるものとしての傳記の兩面から檢證することを可能としているということであり、この點が概ね一場面だけしか語らず省略があるのかさえない不明な佚文を取り扱う場合との大きな違いである。郭泰と同じように各地をめぐって士人を評價したとされる人物批評家は、同じく范曄『後漢書』列傳五八に列せられている符融や許劭など、他にも多く存在すると考えられるのであるが<sup>9)</sup>、しかし許劭は『三國志』等で度々言及されているもののほぼ全てが斷片的な記述にとどまり、さらにそれ以外の人物については史料もごく限られ、管見の限りでは郭泰以外にこれほど整った史料

が残されている人物はいない。郭泰を取り上げることの長所は、ほぼ完全な形を留める史料が複数残していることにあり、かつそれが郭泰の死後それほど経過していない後漢末からそれぞれ五十〜百年程度の間隔を空けて成立したものであること、そしてどれも相應の分量をもっている点にあると言っても過言ではない。類例があるのに郭泰だけを取り上げて意味がないという批判もあり得るが、評價の論理と傳記の両面から検討が可能な人物は彼をおいて他に認められない以上、郭泰の検討を一つの突破口とすることには妥當性が認められるであらう。

従って、以下ではまずほぼ完形を留める上述五點の史料を對象とし、その郭泰評價の論理構成と、それに關係して記される彼の事績を范書本傳と比較しつつ検討する。五點中①「郭有道碑文」と③『抱朴子』正郭篇では特に執筆者の郭泰評價が明瞭に示されており、検討の中心となる。次にこれを土台として諸家『後漢書』・『後漢紀』佚文及び別傳佚文を比較し、郭泰像がどのようにして形成されたのか、その過程を考えることとしたい。なお検討に当たっては本文が冗長になるのを避けるため、引用は論旨展開上重要なものだけとし、史料とその解釋は〔史料1〕・〔史料8〕の形で別にまとめ、必要に応じて番號等を附し參照を求める形としたことをお許し頂きたい。

## 第二章 蔡邕「郭有道碑文」

郭泰の生涯とその評價に言及した最初の文獻として挙げられるのは、『蔡中郎集』卷下及び『文選』卷五八碑文上所收の蔡邕「郭有道碑文」である。周知のように蔡邕は漢魏六朝期の文學史上極めて重要な位置を占める人物であり、在世中から文章の大家として尊重され、魏晉期にお

いては創作上の一つの模範となり、南朝齊・梁に至つてもなおその碑銘は高い評價を與えられていた<sup>11</sup>。この「郭有道碑文」はその中でも稱賛されていたものの一つである<sup>12</sup>。なお、『蔡中郎集』は傳來の過程に問題があるため<sup>13</sup>、以下の検討はより信頼のおける『文選』所收のテキストにより、その題名に従つて「郭有道碑文」と呼ぶこととする。

ところで、墓碑は本來の目的が故人の顯彰であり、そこに記された内容は必ずしも實際に即しておらず、しばしば類型化されていると指摘されている<sup>14</sup>。特に福井佳夫氏は「郭有道碑文」を取り上げて、常套的・抽象的な表現に終始しており、范書本傳と比べるとその個性を的確に表現しているとは言えないとする<sup>15</sup>。福井氏はこの點を、碑文の「序」、即ち故人の業績を述べた部分が表面的には傳記と類似するものの内容的には相違すると考える根據にしているのであつて、そこから見れば碑文は史書の傳ほどの史料的價值を持たないと考えているように受け取れるのだが、氏の關心は形式的性格をもつ碑文の文學的價值、文學史上の位置付けに向けられているのであつて、「常套的」等という言葉も主として碑文群の中で「郭有道碑文」を見た際の文學的な評價として用いられていると考へ得る。以下で明らかにしていくように、「郭有道碑文」とその後の史料との間には一定の繼承關係が確認でき、また魏晉期の郭泰評價には「郭有道碑文」を意識していると思われるものが存在するのであるから、福井氏の指摘をもつてしても「郭有道碑文」が史料的に検討に値しないということにはならない。

具體的な検討に入る前にこの碑文の執筆時期を検討しておく。これは後述するように蔡邕の郭泰評價のあり方自體に關わる問題である。丹羽兌子氏は蔡邕の生涯を詳細に論じ<sup>16</sup>、三九歳（靈帝の建寧三年、西暦一七〇）までの在野の時期、三九から四八歳までの第一次仕官時代、四八か



ら五八歳までの亡命生活、五八から初平三年（西暦一九二）に六一歳で刑死するまでの第二次仕官時代の四つの段階があることを指摘した。郭泰の歿年には建寧二年正月（西暦一六九）と建寧四年正月（西暦一七一）の二説がありちようど蔡邕の最初の仕官年を挟む形となっている<sup>17</sup>。従って蔡邕が碑文を書くのであれば、黨人と距離を置いていたという二十八歳（延熹二年、西暦一五九）以降の隱遁生活の最後の二年か、第一次仕官時代、または第二次仕官時代ということになる。丹羽氏は、「郭有道碑文」を蔡邕が若年から清流士大夫層と深い繋がりを持っていたことを示す事例として行論上その隱遁生活を論ずる前に取り上げているため、その執筆時期は明確に示されていない<sup>18</sup>。しかし郭泰の死に直接掛ける形でこの件を擧げており、またかつて詳論したような丹羽氏の清流士大夫理解からすれば、隱遁生活中に「清議の中心人物」の郭泰の碑文を書いてもおかしくはないので、蔡邕が碑文を作ったのは郭泰の死後まもなく、隱遁生活の最後の二年のうちと考えているように受け取れる。諸家『後漢書』『後漢紀』史料及び范曄『後漢書』等の記述からは、碑文は熹平二年（西暦一七三）まで、遅くとも熹平六年頃（西暦一七七、蔡邕四六歳）までには完成していたと判断できる<sup>20</sup>。前述のように郭泰の歿年が建寧四年である可能性を考慮すれば、蔡邕による碑文の執筆は隱遁生活の最後の二年から第一次仕官時代の最初の頃、すなわち建寧二年から熹平二年（西暦一六九〜一七三）頃、と考えるべきであろう。

碑文は「史料2」として示した。一般に碑文は序と銘に分かれるが、「郭有道碑文」の序はさらに郭泰の傳記に當たる部分と立碑の経緯を説いた部分に分けられる。「序」という呼び方にも示されているとおり、墓碑碑文の本體は銘であるが、福井氏も述べるように四字句の格調高い韻文の形をとる銘の内容は具體的には序の要約である<sup>21</sup>。従って序も含め

た墓碑全體の本旨は銘により鮮明に現れていると考えるべきだろう。ここではまず銘の内容をみ、それを踏まえて序の内容を検討する。

銘の内容を見た時注目されるのは、まず范書本傳の前半部、郭泰の生涯を記した部分と共通する事績が複数確認できることである。「史料2」中では、「史料1」范書本傳に示した論題と同じ内容が文面に明らかなものは實傍線で、明文ではないが關連が窺えるものは破傍線を引いて示し、傍線の冒頭部にそれぞれ對應する論題の番號を附した。冒頭の姓名出身と孝（「史料1」<sup>16</sup>）と關連、以下右カッコ數字は「史料1」の番號を指す）の部分を除いて順に擧げれば①學問（「史料1」5）と關連、②士大夫から尊崇を受けたこと（7）8）と關連、③閉門教授（19）、關連すると思われる表現が①の後にもある、④辟不應（9）、⑤早卒（21）及び⑥立碑（22）の各點がみられ、特に④⑤については銘の中でも明言されているといつてよい。これらの諸點は①學問と③閉門教授に關連すると思われる一句を除き後半に集中しており、對して前半は郭泰の優れた人格を稱賛する内容で固められている。

序は銘と同じ構成を取っており、①から⑥の要素の出現順も銘と同一であるが、新たに出身（1）と周遊（13）が①の前後に加わり、各要素もより詳しく述べられている。この點からみて、「郭有道碑文」の段階の郭泰の傳記は、學問を身につけ中國を巡り歩いて士大夫からの尊崇を集めたが、隱士として人々を教化し、辟召には應ぜず、若くして死去した、という組立てで理解されていたと考えられる。これは9）辟不應の位置、また李膺の知遇を得て名聲を高めたことなどを除けば、范書本傳前半部で語られる郭泰の生涯と基本的には同じ構成といつてよい。

しかしここで問題としたいのは、郭泰の生涯について、その基本的構成が「郭有道碑文」の段階で成立していると思われるにもかかわらず、

ここでは郭泰の人物識鑒能力が全く語られていないことである<sup>22</sup>。この點で注目すべきは范書本傳の記載とは重ならない部分、即ち銘の前半にまとめられていた郭泰の人格への稱贊である。この部分は序でも前半に集中しているが、内容は先に觸れた孝について述べる一句を除いて范書本傳とは全くといって良いほど關係がみられず、むしろ

若乃砥節厲行、直道正辭、貞固足以幹事、隱括足以矯時。

節義をみがき、品行を修め、正しい道にのっとり言葉をきちんとただす、ということでは、その正しい道を守って揺らがなことは物事をつかさどり成し遂げるのに充分であり、まがつているものをただすその規範として、時流をただすに充分であつた。

と述べられていることは、26)論曰に示された范曄の郭泰評價中でも重要な位置を占める、17)不爲危言に指摘される郭泰の慎重な身の處し方とは齟齬するようにさえ感じられる。福井氏も指摘したとおり、「郭有道碑文」は郭泰の徳の廣大さや高尚さ、聰明さは強調するが、その人物識鑒能力に關しては全く語ることがないのである。このことは、范書本傳が人物識鑒能力に注目して語る一方で、その他の郭泰の人格については先述の16)の孝と17)の慎重さ以外、15)で范滂にその隱逸としての一面を語らせているに止まることとは對照的といえる。

この問題は、「郭有道碑文」における郭泰の評價に直接に關わる問題と考えられる。先述したように、范書の評價は郭泰の人物識鑒能力の精確さに注目し、これを中核としてその生き方を聖人に匹敵するものと稱贊する構造をとっていた。これに對し「郭有道碑文」が郭泰の徳の廣大さと高尚さ、聰明さを強調し、隱士として人々を教化したことを踏まえて引き比べる對象は、「史料2」の波線部に

將蹈鴻涯之遐迹、紹巢許之絕軌、翔區外以舒翼、超天衢以高峙、：

(以下略)：

まさに、古の仙人である鴻涯(洪涯)の足跡を踏んでゆき、巢父・許由の生き方を引き継ぎ、域外を翔けてそれによって羽を大きく伸ばし、みやこに代表される官界)を超越してそれによって高く抜きんでようとしていたが、…(以下略)：とあることに明らかのように、傳説的な隱逸である洪涯・巢父・許由である<sup>23</sup>。つまりこの碑文は、郭泰を人物識鑒者として評價する代わりに、その高い徳と聰明さ、隱士として人々を教化したという行動に注目し、それによって古の隱逸にも匹敵する人物と評價していることになる<sup>24</sup>。この碑文に込められた蔡邕の評價の中心が隱逸としての郭泰にあることは、『水經注』や『藝文類聚』における「郭有道碑文」の引用のあり方をみても明らかといえる<sup>25</sup>。

以上からみれば、蔡邕の郭泰評價は、その優れた徳と、仕官を斷り人々を教化したことに注目して隱逸として評價するものであり、後に強調される人物批評家としての評價はおろか、それに繋がる事柄さえ全く記録されていないということができる。これは范書とは方向性を異にする理解であり、その立場を正統と見なす觀點からすれば史料としての價値の低さを示すものであろうが、そのように斷じてしまう前に、何故このような形で評價がなされたのか、また後代の評價と如何なる關わりをもつかを考えてみる必要がある。蔡邕が郭泰を隱逸として稱贊した理由としては、先に論じた碑文の成立時期が中平元年(西暦一八四)の黨人大赦以前であると考えられることに鑑みれば、黨錮を憚つての廻護である等の可能性も十分考えられる。この可能性は特に上述した史料の價値の高低を左右する問題である點で重要といえ、以下郭泰に對する評價を追っていく中で検討課題としておく必要がある。

### 第三章 皇甫謐『高士傳』

次に論すべきは皇甫謐『高士傳』である。皇甫謐は後漢建安二〇年（西暦二一五）に生まれたと考えられ、歴史・文學・醫學など多くの分野に著作を残して西晋太康三年（西暦二八二）に死去した<sup>26</sup>。彼の生涯はほぼ完全に三國時代と重なっているが、學問以外で特に知られているのは魏末西晋の事績、すなわち武帝・司馬炎から重んじられ、繰返し徴されながらも應じず隱逸として生涯を終えたことといつてよく、實際、皇甫謐は六朝から唐代にかけては代表的な隱逸と見なされてきた<sup>27</sup>。

隱逸論でも皇甫謐は「守玄論」「釋勸論」等の文章を残しており、ここに示された隱逸觀を具體化したものが『高士傳』とされる<sup>28</sup>。皇甫謐の隱逸觀の特徴として挙げられるのは、隱逸を独自の價值を持つ行爲と位置づけこれに出仕と對等の地位を與えたことであり、さらにこのような位置づけが、これを實踐する隱逸を君主が招き、拒絶されてもそれを許容する、という尚賢の禮を通して隱逸を體制内の存在として組みこむ道を開くことになった点である<sup>29</sup>。この點で皇甫謐は、魏晉期の「明哲保身」のための隱逸論から六朝期の出仕と隱逸の二者擇一を超越しどちらにも與せぬ「朝隱」論へと變化していく、魏晉南北朝時代の隱逸論の中での

#### 皇甫謐『高士傳』 郭泰條の構成

- 1) 出身
- 16) 孝 容貌②
- 2) 貧 筭之役
- 3) 斗 伯彦學
- 4) 屈 問
- 5) 學 問
- 11) 知人①
- 14) 林宗巾
- (刺盈車)
- 25) 六十人成名
- 23) 知人②
- 16) 母憂
- (生芻一束)
- 9) 辟不應

重要な轉軸點としての役割を果たしたとされる<sup>30</sup>。かつて拙論で觸れたように皇甫謐の隱逸觀は隱逸論史とし

ただでなく清流士大夫のあり方に關連する問題としても議論されてきたのであるが<sup>31</sup>、ここでは『高士傳』に關わる點にとどめて話を進める。『高士傳』の成立は西晋初頭とみられる<sup>32</sup>。皇甫謐はその序の中で、從來の逸民の傳記が逸民とはいえない者を含んでいることを批判し、ここに取り上げる人物について、

謐采古今八代之士、身不屈於王公、名不耗於終始、…（以下略）…

わたくし謐は、古から今まで八代にわたる世の士人から、その身は王公に従わず、その名聲は始めから終わりまで損なわれなかつた者を採録し、…（以下略）…

と定め、伯夷・叔齊や前漢末王莽に従わなかつた龔勝・龔舍は含まないとしている。この「身不屈於王公」は權勢に與しないという意味で用いられているようだが<sup>33</sup>、このようにはつきりと基準を設けて列傳する者の選別を行ったことが皇甫謐『高士傳』の特徴とされている<sup>34</sup>。實際に洪涯、許由や巢父らが列せられる一方、伯夷・叔齊らは立傳されていないのだが、これは政治社會に對する抗議のための隱逸は政治から獨立した價值を持つ存在とは見なせないからと解釋される<sup>35</sup>。現行本『高士傳』は傳來の過程に問題があり、その序も信賴性に若干疑問が残るのであるが<sup>36</sup>、佐竹保子氏も指摘するように范曄『後漢書』注・『三國志』注・『太平御覽』等所引の「高士傳」からも同様の視角が讀み取れることを考えれば<sup>37</sup>、上述した皇甫謐の隱逸觀は『高士傳』の主柱となつていとみて問題ない。

『高士傳』郭泰條は「史料3」として示した。「史料2」と同じく「史料1」范書本傳の論題と通ずるものには傍線と番號を附した。その論題名のみを抽出して構成を圖示すると上圖のようになる（なお范書にない論題はカッコ付きで記した）。ここで最も注目すべき點は、人物識鑒に關わる表現が出現することであろう。出身（1）、孝（6）、學問（45）、士大夫からの尊崇（14）、辟不應（9）という構成は蔡邕「郭有道碑文」

と同一であるが、この士大夫からの尊崇に關係する部分に、知人①(11)―六十人成名(25)―知人②(23)に關係する表現が組みこまれてきているのである。特に范書本傳とほぼ同じ「六十餘人」という具體的な數が出てくることは傳記の繼承という點では注目される。この他にも貧(23)に關わる表現が出る一方、閉門教授に關わる表現がみえず、『太平御覽』所引テキストでは歿年に關する記載もないなどの特徴があるが、後者は傳來の過程で脱落したに過ぎぬかも知れない。

このテキストは、郭泰が人間の性格について知り盡くしていたことが名聲をあげる要因となったとしており、一見したところ彼を人物識鑒者として評價しているように讀める。『高士傳』には本來各傳に皇甫謐の論贊が附されていたようであるが現在では失われているため<sup>38</sup>、皇甫謐がこの傳から郭泰個人の評價をどのように引き出していたのかは明確ではない。しかし前述したように『高士傳』は皇甫謐の隱逸觀を具體化した著作と考えられるのであり、皇甫謐の觀點からは第一義的には隱逸として評價されるからこそここに列せられているということは見落とせぬ事實であろう。郭泰は、出仕せずに隱逸獨自の價值を體現した存在として、同じく『高士傳』に列せられた巢父や許由らと同類とされていたのである。その意味で人物識鑒者としての名聲はあくまで副次的な位置付けを與えられているに過ぎない。先に引いた『高士傳』序の採録の基準に「名不耗於終始」とあったように、皇甫謐は隱逸が名聲をもつことを否定しない。實際『高士傳』の郭泰以外の記述をみても、姜肱や姜岐など高い名聲を持ち多くの弟子を抱えていると記されている者がおり<sup>39</sup>、行論から見るとこれらは兩者とも學識の高さを證し立てるものとして言及されていると考えられる。郭泰の場合も學識の高さに續けて人物識鑒能力とそれによる名聲が述べられていることを考えれば、皇甫謐は在野のま

ま人物識鑒者として優れた人物の舉用に盡くしたという郭泰の行爲が蔡邕のいう教化の内容にあたり、隱逸としての獨自の價值であると考えられている(引き換えに閉門教授の事績が脱落している)可能性が高い。從つて『高士傳』は巢父・許由と比して隱逸と位置づけていた蔡邕「郭有道碑文」の評價を基本的に繼承する立場にあると考えられ、人物識鑒者としての面が副次的には出現してくるもののそれは隱逸としての獨自の價值に該當するものとして取り上げられているに過ぎないのであつて、その能力に焦點を合わせ孔子などの聖人に比す范書本傳の理解とは未だ懸隔があると見なければならぬ。

前述したように皇甫謐の隱逸觀は六朝期にかけて主流となつていくものであり、かつ『高士傳』を編むにあつて從來逸民と見なされていた者からさらに選別を行っていることも考え併せれば、『高士傳』編纂にあたり踏まえられたものの一つとみられる先行の嵇康『聖賢高士傳』(既佚)の佚文中には郭泰の條が確認できないとはいへ<sup>40</sup>、郭泰が隱逸として評價されたのは自身隱逸であつた皇甫謐の牽強付會によるものと切り捨てるわけにはいかない。むしろ當時においては特異な考え方ではなく、讀み手から一定の同意を得られた可能性が高いことは、次章で検討する葛洪『抱朴子』正郭篇からも明らかである<sup>41</sup>。このことは、前章で検討した蔡邕の評價が少なくとも以後の時代において孤立したものではなく、西晉初頭には依然影響力を保っていたことを示唆していよう。

#### 第四章 葛洪『抱朴子』正郭篇

##### 第一節 葛洪『抱朴子』の性格と正郭篇の位置



以上見てきたように、西晉初頭まで郭泰は隱逸として評價されており、人物批評家としての評價は出現しないか、出ても副次的な位置にとどまっていた。ここから范曄『後漢書』にみえるような人物批評家として評價する方向への變化がいかんとして出現してくるのかを考える上で重要な鍵を握ると思われるのが、郭泰の評價を論ずる文章のうちおそらく最も長大にして細密な議論を行っている葛洪『抱朴子』外篇・正郭篇である。

葛洪の生涯とその著作『抱朴子』については大淵忍爾氏<sup>42</sup>及び吉川忠夫氏<sup>43</sup>の研究が詳しい。兩氏も指摘するように、『抱朴子』は内篇が神仙道の理論と技術を論ずる一方、外篇は儒家の立場から世俗批判のために書かれたものであり、政治や君臣關係、隱逸と社會・禮教の關係を論じたものが多數を占める。執筆は葛洪が石冰の亂の平定に参加した太安二年（西曆三〇三）、二一歳頃に始まり、司馬睿が晉王に即位した建武元年（西曆三一七）、三五歳には完成したと考えられ<sup>44</sup>、その内容も後漢代の著作、特に王充『論衡』や王符『潜夫論』から多く着想や論理構成を學びつつ、西晉最末期の社會狀況・思想狀況を論じたものとされる。

『抱朴子』は從來道敎史や科學史の觀點から主に内篇が注目されており、外篇も社會狀況に對する嚴しい批判を含むとは言え、歴史學の對象としては検討されることが少なかつた。これは『抱朴子』がそもそも歴史敘述の形式を取っていないからばかりではなく、大淵氏や吉川氏も指摘するように、時系列を混亂させたまま記述したり、形式の美しさや表面的な論理の精緻さが優先されるなど、葛洪の執筆姿勢に由來すると思われる近代歴史學的検討には不向きな不徹底さが目立つためでもあつたろう<sup>46</sup>。しかしその政治思想としては、強力な君主權と官僚機構の主張、それを支える絶對不變の價值としての禮敎の稱贊、これを實現し現實世界を救済するための刑罰の重視が特徴とされている<sup>47</sup>。強力な君主權と官

僚機構を主張することはその統治の外に私情の世界を認めないことに繋がっているが、葛洪は一方で、在野で徳を修めることによって敎化を廣めていく「王臣」として、仕官する者と同等以上の存在理由を隱逸に認めており、これにより絶對不變の價值である禮敎による世界が完成すると見なしていた<sup>48</sup>。皇帝による嚴格な支配の貫徹を主張する姿勢が一方で逸民の積極的な評價と一體となっていることは興味深いが、この點から見れば、葛洪の隱逸觀は王法の世界の中に出仕と隱逸を同等の價值を持つものとして位置づける皇甫謐の見方を繼承する位置にあると言える<sup>49</sup>。

正郭篇は嵇含と葛洪の二人が郭泰の評價について議論する對話形式を取る。嵇含は譙國銓の嵇氏であり、竹林の七賢の一人にして『聖賢高士傳』の著者・嵇康の從孫にあたる。兩者は光熙元年（西曆三〇六）襄陽で交流をもつたと考えられており、當時嵇含は四四歳で鎮南將軍劉弘の客、葛洪は二四歳で洛陽への遊學行が頓挫し引き返してきたところであつた。同年嵇含は廣州刺史となり、葛洪はその參軍に任ぜられて先發したが、たまたま劉弘が死去しその直後の混亂で嵇含も横死したため、この對話が現實に行われたとしたらそれはこの年以外に考えられない<sup>50</sup>。時期としては東海王司馬越が懷帝を擁立し八王の亂が終結する年に當たり、永嘉の亂で懷帝が捕らえられ西晉が崩壊する五年前である。正郭篇の内容について、吉川氏はこれを君主權の外に私情の世界を認めないという葛洪の考え方の本質を露わにしたものと理解し、郭泰個人に對する批判を通して魏晉貴族社會の成り立ちそのものを攻撃したものと見なしている。氏はこの背景に「魏晉貴族の理想を集中的に體現した典型的人物」としての郭泰に對する一般の深い傾倒を指摘しており、正郭篇の記述を通して當時の社會的風潮を見ようとした點で注目されるが、しかしながら氏の主たる關心は『抱朴子』に示された葛洪の思想全體に向けられて

いるためこれ以上正郭篇の論理構成に踏み込んではおらず、それだけに葛洪の郭泰評價を他者のそれと比して特異なものと見ているようにとれる。<sup>51</sup> 岡村繁氏はより明確に、正郭篇の郭泰評價は極論と見なしている。<sup>52</sup>

本文は「史料4」として示した。<sup>53</sup> 「史料4」もこれまでと同様の方式で「史料1」范書本傳の論題と通ずるものには傍線と番號を附し、また葛洪の反論は長文であるため段落に分けて丸數字番號も附した。對論であるこの史料は當然ながら論理展開にその主眼があるため、傳の形式を取る部分がなく、郭泰の事績も行論の必要から分散して取り上げられているに過ぎない。先にも觸れたように、本篇に示された葛洪の思想と當時の社會的風潮については既に吉川氏が論じているが、ここでは特にその郭泰評價の論理構成を明らかにすることを目的として、まず「史料4」の解釋に據りつつ前章までの検討を念頭に置いて考察を行い、ついで事績について整理することとする。

## 第二節 正郭篇の論理構成

對話の口火を切るのは拈含の論題提起である。拈含は郭泰を孔子に匹敵する存在として稱賛する。その構成は、辟召に應ぜず（9）辟不應）、博識であり（5）學問）、名聲が長く重んじられてきたことを前提とした上で、人物識鑒能力（11）知人①）に注目し、まずここから『尚書』皐陶模を典據に才知が聖人に次ぐ存在Ⅱ「亞聖」と評價し、さらに『論語』憲問を典據とし<sup>54</sup>、席を温める暇もなく動き回って世の亂れを正し道を行うことを目指したとして孔子に匹敵する存在にまで高めていくという形を取っている。一見して明らかのように、人物識鑒能力に焦點を合わせ『尚書』皐陶模を典據に郭泰を聖人に匹敵する存在と位置づける手法は

范曄と共通する。「知人則哲」の上に重ねて挙げられる根據が隱士としての教化ではなく各地をめぐる道を広めたことである點に違いが認められるが、各地をめぐる行ったことが基本的に人物との交際であることを考えると、范曄以上に人物識鑒能力に焦點を合わせて評價していると理解することができよう。

葛洪の反論は、その段落①が「亞聖」の否定、段落②が「眞隱」の否定で結ばれていることに示されるように、二つの方向から行われている。この、聖人に次ぐ存在でもなく、またまことの隱逸でもない、という二つの否定の内容を最も明確に示しているのは段落⑥（附波線）であろう。葛洪はここで、

林宗才非應期、器不絕倫、出不能安上治民、移風易俗、入不能揮毫屬筆、祖述六藝。

郭林宗の才能器量は（五百年の間に賢人が現れるという）期運に應じたものではなく、「比べようもないほど飛び抜けた」ものでもない。世に出てはお上を安んじ人々を治め、風俗を美しいものへと變えてゆくことができず、家の中では筆先がへつてなくなるほどに文章を書き、六經に示された先人の道を繼承し手本として發展させることもできなかった。

と難じている。「絶倫」が段落①に記された「亞聖」の條件のうちにみえていること、及び上引の内容がすぐ後文で「進」と「退」に掛けて繰り返されていることをみれば、前者が「亞聖」、さらには世を憂いて天下を巡り歩く孔子Ⅱ聖人に比すことの否定の、後者がまことの隱逸と見なすことの否定の具體的内容であることは明らかである。

こうした否定を下す根據となる郭泰の行動は、段落⑤や段落⑩冒頭に示されているように、自らの能力が世を救うには不足していることを知りながら、それを誇張して喧傳し、實を過ぎた名聲を手に入れるという

明らかな悪行を犯したととされている。これは段落⑩で「亞聖」の否定に結びつけられており、後文の論旨からは「亞聖」でさえない郭泰が聖人にとっても困難な人物識鑒を過たずにできたはずがない、という形で聖人に比肩し得ないと論證されているように理解できる。段落②や段落⑦で詳しく述べられている、悪行としての郭泰の名聲と交際のありさまは「浮華」なる行爲を彷彿とさせるものであるが<sup>55</sup>、既に段落②に記されていたように、この點は同時に「眞隱」を否定する根據の一つともなっているであり、葛洪の二つの批判の根底には郭泰が各地を周遊し交際を行ったことに注目しこれを浮華的なものと解釋することがあると見られる<sup>56</sup>。先述のように葛洪は出仕と隱逸に同等の價值を見出しており、その點から段落④⑤の行論は必ずしも世の亂れを正し人々を治めるという聖人に連なる行爲が隱逸に勝っていることを意味しないと取るべきであるが、しかし段落①において「亞聖」を稀な存在とし、また段落⑥上引文では期に應じて出現するととされていることからみて、「亞聖」と認めるには世の亂れを正すこと以上の特異性を必要としていることは明らかであり、従ってこの葛洪の論理構成上、聖人に直ぐ近接する位置にある「亞聖」の方が隱逸より高次であることは間違いない。つまり葛洪は、「亞聖」から孔子に比肩し得る者と評價を引き上げていく嵇含の論法に對し、「亞聖」どころか、まことの隱逸でさえない、と落としていく形を取っていることになる。

今回検討する後漢末から范曄『後漢書』成立に至る時期の文章でも郭泰にこのような評價を下している事例はなく、その點から見ればこれは指摘されているとおり異端の見解である可能性は高い。しかし今まで觸れた中からもある程度窺えるように、異端なのはその結論だけであって、結論を導き出すための議論の構成自體は實は他と共通する部分の多いこ

とを見逃してはならないだろう。葛洪は郭泰の學識と人物評價の見識が常人を凌ぐものであることを段落①・③の末尾で、また貢舉を拒んだことを段落⑩の末尾でそれぞれ認めているのであり、さらに段落②以降繰り返されるように、各地をめぐる中でその名聲が當代に強い影響力を持つようになり、歿後も廣まっていたことも認めている。従って、特に「亞聖」の否定に注目すれば、嵇含が孔子に比肩し得る根據とした人物識鑒能力の精確さと各地を巡り歩き交際を行ったことの二點について、その〈事實〉の存在自體は認めるが、それは「亞聖」と呼ぶに相應しいものではないと否定しているのであって、評價を引き出していく論理が裏になっているだけで實際には嵇含と議論の構成自體を共有していると見ることができる。段落⑩で、虚名であってもそれを利用して實際に世の安定に寄與することさえしなかったと疊み掛けて難じているのも、兩者の論理が重なっているが故であろう。

同様のことは「眞隱」の否定についても言える。最初に確認したように冒頭の嵇含の論題提起には「眞隱」にかかる論理は出てこないのであって、嵇含に對する反論としては「亞聖」の否定のみでよい筈である。しかし既にみたように、葛洪は段落②で「眞隱」の否定を打ち出しており、これを「亞聖」の否定と一組のものとして議論を進めている。段落⑥で「亞聖」の否定と「眞隱」の否定とが「進」と「退」に掛けて言い直されていたように、これは出仕と隱逸が一組の問題として取り扱われるのと對應する關係にあると言えようが、このような形で取り上げられること自體が、郭泰を隱逸と評價する方向が西晉末においても前提として存在していたことを示している。でなければ、篇末が「非全隱之高矣」という質問者の感嘆の言葉で締め括られることなどあり得ない筈である。前章にて觸れたように皇甫謐は隱逸の名聲を肯定しており、郭泰の人

物識鑒能力とそれによる名聲は隱逸としての独自の價值を證據立てるものと捉えられているように考えられた。葛洪の隱逸觀が皇甫謐を繼承するものであったことは先述したが、隱逸が王法のうちに屬し、出仕と同等の存在理由を與えられるための要件として葛洪が重視するのは著述であり、これは段落⑥でも明言されていた。しかしこれも先述したように、同時に郭泰の浮華的行爲も「眞隱」を否定する具體的根據として行論の中心となつていたのであり、ここからみると葛洪は皇甫謐の隱逸觀を繼承しつつも隱逸独自の價值としては別の要件を立て、その上で郭泰の人物識鑒能力と名聲が誇張の産物に過ぎず、その浮華を證し立てるものではないと指摘することで隱逸としての評價を覆したと讀むことができる。<sup>56</sup>このように考えれば、嵇含の二度目の問いに對する答えの中で「獨皇生褻過耳」と述べる意味がより明確となろう。

つまり葛洪は、嵇含の提起した「亞聖」と評價する方向性と、蔡邕―皇甫謐と引き繼がれてきた「隱逸」と評價する方向性の兩方について、その議論立てを襲用しつつ郭泰の行動がそう評價するに相應しいものではないと論證し、論理を裏にすることによって共に否定したことになる。このように理解して大過ないなら、實は葛洪の議論は今まで見てきた郭泰評價の文脈に見事に合致するものであり、その結論の特異さから異端と見なすべきではない。

葛洪は嵇含の二度目の問いを受け、さらにいずれも三國呉の人である諸葛恪・殷禮<sup>55</sup>・周昭の三人の見解を引き、自ら以外にも郭泰を非難した論者がいた實例としている。彼らの活動年代は殷禮が三國呉の前半期、黄武年間から赤烏年間半ば（西暦二二二―二四五頃）であり、諸葛恪が黄龍年間から建興二年（西暦二二九―二五三）、周昭は不明確であるが三國呉後半期の永安年間（西暦二五八―二六四）に執筆を行っていたこ

とは確實と考えられる。<sup>56</sup>これらの議論は抄録の可能性があるが、諸葛恪は特に名聲の誇張を、殷禮は議論の私的偏向を問題とし、周昭は交遊につとめたことを問題視して「憂道」という觀點からこれに合致しないと論難する點に特徴がみられる。特に周昭は「憂道」の適格者として孔子を挙げ、さらに論末でも孔子との比較に觸れており、既にこの段階で孔子に比す見方が出現していたことを示唆している點は重要である。前二者は隱逸としての評價の否定も明言しており、周昭も「守道」に關し言及することから見て（ともに「史料4」では波線を附した）、彼らの議論は隱逸としての評價の否定とその浮華的な性格の非難という點で前述した葛洪の立論と重なる部分をもつことが明らかである。

本篇はこうした葛洪の議論を承けて嵇含が「非全隱之高矣」と納得することで閉じられるが、冒頭の論題提起が孔子に比す見方で始められていたにもかかわらずこのような形で結ばれているのは、先述の通り郭泰を隱逸として評價する方向が西晉末においても依然前提として存在していたからに他ならぬであろう。このような篇全體の構成と、葛洪の議論が郭泰を「亞聖」でもなければ「眞隱」でさえないと落とす方向にあったことを考えれば、本來の基礎的な評價は隱逸としての評價であり、それはこの當時も依然認められていたが、皇甫謐によつて隱逸としての價値を構成する要素と位置づけられていた人物物識鑒者としての評價が既に重視されるようになっており、これが從來の評價の枠を食い破るうとしている状況がここには見て取れるように思われる。周昭の議論の存在は、少なくとも三國呉においてはこうした展開が永安年間に現れていたことをも疑わせる。このことは郭泰の評價の變化が何故起こったのかと關わる問題であり、詳しくは後論する。



『抱朴子』正郭篇にみえる郭泰の事績(論者別)

No.	論題	嵇含1	嵇含2	葛洪1	葛洪2	葛洪3	諸葛恪	殷禮1	殷禮2	周昭1	周昭2
5	學問	學無不涉		機辯	學涉		街談巷議以爲辯				
6	容貌①			吐聲則餘音見法							
7	見李膺			林宗名振於朝廷、敬於一時、三・九肉食、莫不欽重	邀集京邑、交關貴游	但疾疾京輩、招合賓客	時俗貴之歆然	入交將相	關毀譽於朝廷	爲之雄伯	其陳蕃・竇武之徒、雖鼎司牧伯、皆貴重林宗
8	神仙			遊步所經、則賢愚波蕩、謂龍鳳之集、奇瑞之出也			時俗貴之歆然			爲之雄伯	
9	辭不應	竟不恭三公之命		其距貢舉者	林宗名振於朝廷、敬於一時、三・九肉食、莫不欽重			關毀譽於朝廷			
10	吾觀天象			成勸之以出仕進者。林宗對曰、吾晝察人事、夜看乾象、天之所廢、不可支也。…							
11	知人①	以知人		知人	知人	能知人					
12	容貌②			風姿	故姿超特	符采外發					
13	周遊	棲棲惶惶、席不暇溫		影惶不定	而乃自西徂東、席不暇溫			出游方國		棲棲	
14	林宗巾	存爲一世之形式		遭雨巾壞、猶復見効	見推慕於亂世		時俗貴之歆然			爲之雄伯	
23	知人②			鑒識朗徹							
24	附益増張・提拔された士人			且好事者爲之羽翼、延其聲譽於四方	爲過聽不覈實者所推策	然則名稱重於當世、美談盛於既沒、故其所得者、則世共傳聞。而所失者、則莫之有識爾	後進慕聲者…				
25	六十人成名			頗甄無名之士於草萊、指未剖之璞於丘園							
26	論曰	知人則哲、蓋與仲尼亞聖之器也	與仲尼相似	知人之明、乃唐・虞之所難、尼父之所病	欲慕孔・墨棲棲之事						今林宗似仲尼而不得爲仲尼也

第三節 正郭篇にみえる郭泰の事績

以上前節では正郭篇の論理構成を検證したが、結論には特異さがあっても立論自体は前後の郭泰評價と関連性が確認できたものと思われる。それでは行論中で分散して取り上げられている個々の事績についてはどうであろうか。

この点について、「史料4」には他と同じく范書本傳記載の論題を基準として傍線を附したが、これを論者ごとに分け一覽にしたものが上表『抱朴子』正郭篇にみえる郭泰の事績である。ここには范書の論題番號ごとに對應すると思われる各論者の言及を記入しているが、このうち范書本傳の記載と同一の表現あるいは内容をもつと判断できるものには濃い網掛けを、部分的に同一の表現あるいは内容をもつものには薄い網掛けを施している。また同一項目に關係する複数の記載がある場合には列を分け、また複数の項目と關係すると考えられる記載は重複して記載している。

正郭篇は傳としての性格を持たないだけに、郭泰の傳記の構成という視点から他の文獻との共通性を見出すのは困難である。構成の面を措いて個々の事績についてみると、もっとも目を引くのは仕官を勧める者に對しその不可を説く10)の文章が范書よりも詳細な形で出現することであるが、これ以外にも、皇甫謐『高士傳』と同様19)閉門教授が缺落する一方、5)學問から14)林宗巾と、23)知人②から26)論曰に關係する内容は一通り登場している。勿論網掛けで示したとおり、李膺自身は登場しないが高官との交際が記されているので7)見李膺に配属したもの、また當該の説話自体は現れないが士人の尊崇の的になったということが語られているので8)神仙に分類したものなど、重なる内容を持つとは判断できる

が直接に共通する内容が出てこないものも多い。しかしながら、「史料1」の論題を改めて一覽すれば、上記の項目は郭泰の學識・交際と周遊・人物識鑒に關係する部分そのものであることが明らかであり、ここから葛洪が上記三點を中心に議論を組み立てようとしたことが読み取れるであろう。

ここで葛洪・嵇含による言及と殷禮・諸葛恪・周昭らのものを比較すると、嵇含・葛洪に共通してみられた「知人」という表現、つまり人物識鑒能力の高さに對する（一定の）承認が、後三者では共有されていない。「史料4」中の網掛け部分にみえるように、殷禮は郭泰の議論の私的偏向の證據としてその交際の仕方を通して現れる評價が不當であることを論じており、また周昭も郭泰の人物のなぞらえ方が不適切であることを主張している。諸葛恪には間接的ではあるが議論の偏向を指摘する含みがあり<sup>61</sup>、これらの議論は抄録の可能性を考慮せねばならないにせよ、いずれも郭泰の人物識鑒能力を認めているとはいえない。他の諸點を比較しても、特に殷禮と諸葛恪の議論には范書本傳に繋がるような事績の言及は乏しい。蔡邕「郭有道碑文」との關連という點では、諸葛恪の議論の末尾が「童蒙安能知」で締め括られていることには蔡邕の評價を意識しての批判であることが窺えるが<sup>62</sup>、それ以上に直接の繋がりを見出すことは困難と言わざるを得ない。

#### 第四節 正郭篇の論理構成とその背景

以上、葛洪『抱朴子』正郭篇の検討を行った。西晉最末期の思想・社會の状況を背景とした議論には、皇甫謐の隱逸觀の繼承がみられ、郭泰を隱逸として評價する理解が基礎的なものとして依然存在していると考

えられる一方、皇甫謐が隱逸としての独自の價值を構成するものと位置づけた人物識鑒能力がより重視され、隱逸としての評價という枠を食い破ろうとしている状況が窺えた。こうした傾向は、周昭の議論からは少なくとも三國吳においては永安年間（西曆二六〇年頃）には存在していた可能性があり、ここからみると西晉期に郭泰の評價は二つの方向の間で何らかの變動を起こしていたと考え得ることになる。皇甫謐は隱逸が名聲を持つことを否定していないことについては先述したが、東晉初頭の郭璞は出處について論ずる文學形式である「設論」に屬する作品「客傲」において出仕も隱逸も共に名聲を得てしまうことを問題とし、『莊子』の萬物齊同思想を下敷きに兩者を否定して徹底した無名を追究する方向へと向かったと指摘されている<sup>63</sup>。「客傲」は東晉成立後に書かれたものであり『抱朴子』正郭篇よりやや遅れる<sup>64</sup>。西晉期の隱逸論は決して皇甫謐から郭璞へと直線的に展開したわけではないが<sup>65</sup>、葛洪においても郭璞と同じく名聲が問題とされていたことを考えれば、葛洪による郭泰評價のうち隱逸の否定という側面は西晉から東晉への隱逸論の展開にほぼ沿う形になっていると言える。このことは、隱逸に關するとらえ方が變化していく過程で、郭泰の事績が隱逸としてのそれから逸脱するようになってしまい、結果としてその隱逸として評價し得る可能性が狭まりつつあることを示しているのではないかと考えられる。この果てに范曄の郭泰評價が現れるとすれば、後漢末の状況が後代の理解によって再編成されていくひとつの實相と言うことができるばかりでなく、「清流士大夫」や「逸民的人士」、あるいは「人物批評家」といった從來の分析概念自體が、西晉期の隱逸論の展開によって作り上げられた部分を現に有していることを疑わせるに足るものであり、本論にとっても極めて重要な意味を持つと言えよう。

## 第五章 袁宏『後漢紀』卷二三郭泰條

東晉孝武帝の太元年間初頭（西暦三七六～七頃）以前、概ね西暦三七〇年頃に成立したと思われる袁宏『後漢紀』には、その卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條の第二次黨錮事件の記述にかけける形で郭泰の傳がおさめられている。袁宏は『後漢紀』序で名教を明らかにすることを著述の目標と明言しており、西晉以來の玄學の潮流を踏まえ「性理」すなわち自然を根本に置くと同時に、社會における名教の役割を重視し、これによる教導が「性理」の正しい發現に必要だと考えている點に特色があった。たびたび指摘されているとおり、袁宏はこうした觀點から極端な行動は名教―自然から外れる行爲として評價しない傾向が強く、黨人の行動に

對しても批判的である<sup>90</sup>。

『後漢紀』には「袁宏曰」で始まる評語が四九條確認でき、上述の觀點もこれらから読み取れるのであるが、郭泰について直接附された評語は存在しない。従つて郭泰に對する評價は傳の記述そのものから汲み取るほかない。袁宏『後漢紀』の郭泰條は「史料5」に示した。本文は内容によつて（ア）～（ト）に區分し、さらにこれまでと同様の方式で（史料1）范書本傳の論題と通ずるものには傍線と番號を附した。この構成を論題によつて一覽にすると左上圖のようになる。なお范書にない論題はカッコを付けて補っている。

袁宏『後漢紀』は編年體斷代史の體例をとるが、この體例は紀傳體の帝紀部分に記述を收斂させる形で成立したものであり、袁宏『後漢紀』の場合、紀傳體の列傳にあたる部分は關係する年の記述に引つ掛けるようにして織り込まれている<sup>91</sup>。郭泰の場合も同様であり、三君八俊の死の記述の後に20)野哭の記事が現れ、それに續けて郭泰の傳が語られる。

上圖に破線を引いたように、この郭泰の傳は概ね四つの部分に分けることができる。まず學問を身につけるまで、次いで各地をめぐり人々と交際を行ったこと、そして出仕を斷つたこと、最後に容貌や平生のふるまいについて、である。この中で壓倒的といつても良い分量を占めるのは、圖を一見しても明らかとなっており、各地をめぐり人々と交際を行った部分である。この部分には、今までは直接出現していなかった李膺や符融との交際（7）が具體的に語られており、またA)左原B)茅容C)孟敏F)賈淑H)黄允の各人に關する記述も現れ

### 袁宏『後漢紀』 郭泰條の構成

- 20) 野 哭 ..... (ア)
- 1) 出身
- 3) 斗筭之役 ..... (イ)
- 4) 屈伯彦學
- 5) 學 問 ..... (ウ)
- (宋仲と郭泰)
- 13) 周遊 ..... (エ)
- (見符融)
- 7) 見李膺 ..... (オ)
- (見韓卓) ..... (カ)
- (見仇香) ..... (キ)
- B) 茅容 ..... (ク)
- (童子魏昭) ..... (ケ)
- C) 孟敏 ..... (コ)
- (袁奉高と黄叔度) ..... (サ)
- A) 左原 ..... (シ)
- H) 黄允 ..... (ス)
- 16) 母憂 ..... (セ)
- (生芻一束) ..... (ソ)
- F) 賈淑 ..... (タ)
- 25) 六十人成名 ..... (チ)
- (石雲考と宋子俊) ..... (ツ)
- 10) 吾觀乾象
- 9) 辟不應 ..... (テ)
- 12) 容貌②
- 5) 學問
- 6) 容貌① ..... (ト)

てきており、さらに例えば10)吾觀天象やH)黃允に顯著なように、范書よりも詳しく語られているものも含まれている。ここで特に注目されるのは、冒頭に當たる(エ)で各地をめぐり交際を行う意義が郭泰自身によって宣言されており、また末尾にあたる(ツ)では郭泰その人の評價について總括的な議論が行われている点である。こうした議論がここにだけ伴っている点からみて、この部分はまさに袁宏『後漢紀』における郭泰の傳の本體である可能性が高く、袁宏『後漢紀』における郭泰評價のあり方を考える上では(エ)と(ツ)の検討から始めるのがよいであろう。

(エ)は高い學識を備えるに至った郭泰が踐み行うべき道について述べた文章であり、その語りを承けて「周流華夏、採諸幽滯」と13)周遊の内容が出てくることからみて、こうした行動をする根據が述べられていることは間違いない。「蓋」で説き起こされる郭泰の發言の前半部は『論語』『孝經』に典據をもつ表現で固められており、公平な交際を通して仁徳を培うことが主張されている。これは續く「濟俗變教、隆化之道也」という結句を導き出すに當たつて一般則・前提となつていふと思われるが、ここからみれば、郭泰が各地をめぐつて人々と交わつたのは、公平な交際を通して仁徳を培い、それによって「濟俗變教」して風俗を厚くすることを目指すという經書に根據を持つ行動であり、それゆえに孔子や孟子に倣つたものであったということになる。

この「濟俗變教」という表現は、『後漢紀』ではこの場所以外に見られず、他書でも用例があまり見あたらないのであるが、時代は梁代まで下るものの「俗」と絡めて「變教」という言葉を用いている事例がある。

『藝文類聚』卷三七隱逸下條所引「梁沈約爲武帝與謝朓敕」に、

自居元首、臨對百司、雖復執文經武、各修厥職、羣才競爽、以致和

美、而鎮風靜俗、變教論道、自非箕穎<sup>68</sup>高人、莫膺茲寄。

(私が)皇帝の位につき全ての官僚たちに君臨して以來、さらに學問をおさめた者や武備を整え身につけた者がそれぞれその職分を整然と果たし、たくさん的人才ある者たちが互いに競いあつて調和とゆるわしさをもたらしているもの、しかし世の風俗を鎮め穩やかにし、教化を改め國を治める筋道について考えるという<sup>69</sup>ことでは、箕山や潁水の傍らで隱棲したという許由のような高潔な人物でなければ、誰もこういった思いを寄せるのに相應しくない。

とみえる。この敕の對象者である謝朓は陳郡陽夏の謝氏の出であり、『梁書』卷十五の本傳によれば、南宋末期に起家し南齊で中書令に至り、鬱林王の隆昌元年(西曆四九四)篡奪を謀る蕭鸞(明帝)を避けて征虜將軍・吳興太守として轉出、以後事實上政務を執らず、明帝の建武四年(西曆四九七)中書令への就官を固辭、退居していたという人物である。梁武帝は南齊和帝を擁して東昏侯を排除し建康を制壓して以來(中興元年、西曆五〇一)、謝朓と同様に退居していた何胤と併せ二人をたびたび徴しているが、上引の敕もその一つで禪讓後の天監元年(西曆五〇二)のものと考えられる。<sup>70</sup>東晉南朝の史書には隱逸の徵召を禪讓に先立つて記録していることがしばしばあるが<sup>71</sup>、この敕も今は下野している人物を舉用するためのものであり、引用中最後の二句に明示されているように、その構成も謝朓を許由に比してとらえる形になっている。「論道」という表現が政治の方策について慮るという意味を含むこと<sup>72</sup>、及び問題の部分(破線部)の前段が百官について述べており、後段でそうした状況のもとで許由のような人物が必要だと論じられていることと併せ考えれば、この「變教」は世を治めていくための教化について考え、正していくという政治的・社會的な意味合いを込めて用いられていると判斷すべきであり、破線部自體も隱逸としての基盤、屬性をもつ人物が果たし得る政



治的・社會的役割を言ったものと考えることができよう。上引の沈約の文章はいわゆる「朝隱」論が極點に達している時期のものであり<sup>72</sup>、出仕と隱逸の間の差異が徹底的に否認されていた時期の表現であることを考えれば、謝朓が「隱逸とされている」と一義的に理解してしまつては沈約の意圖から外れてしまうおそれがあるものの、しかし最低限ここから「濟俗變教」という言葉が、風俗をよい方向へ向け、世を治める教化について考え、正していくという意味を持つており、袁宏『後漢紀』でもこの意味で用いられていると理解しても大過はあるまい。

特に風俗と教化ということについて、袁宏は人格・節操を「流」、そしてそれにより廣まる感化を「風」と位置付け、聖人は人々の「流」を統べ理解し徳化を及ぼす（Ⅱ「風」）ことで民風・土風を形作り、聖人ほどでなくとも偉大な人物はその「流」に基づく独自の「風」によって人々を感化すると理解していたことが指摘されている<sup>73</sup>。このことを踏まえ改めて（エ）（ツ）を見てみると、實は袁宏『後漢紀』には皇甫謐『高士傳』や葛洪『抱朴子』、また范書には繰り返し現れる11)知人①23)知人②に關係する表現が全く存在しない。そのかわりに、（オ）符融と李膺、（カ）韓卓、また（ツ）宋子俊及び杜周甫（Ⅱ杜密）の郭泰評價は他書にない詳しい内容を有しており、特に郭泰の人格に注目して、學識の高さや高尚さ、そして調和がとれ篤實であることが稱賛されている點に特徴がある。（ツ）の宋子俊はこうした郭泰の人格を根據として彼を「三代士」に比しているのであり、これらの點からみれば、袁宏は郭泰の優れた人格が周囲を感化した結果として「濟俗變教」、即ち人々が正しい方向へ導かれ、教化が及ぼされて優れた人物へと成長していった、こうした彼のあり方は三代の士にも匹敵するものだという構成で郭泰を位置付けていると理解できよう。郭泰の各地での交際と教化について、

（ス）や（タ）の末尾で「其弘明善惡、皆此類也」「其善誘皆此類也」とまとめているのは、こうした評價の構成に呼應するものと考えられる。

袁宏はしばしば「堯・舜から三代まで」という括り方をしており、これと春秋時代以降を對比して述べていることから見て<sup>74</sup>、この場合も三代は夏殷周を指すものと考えて間違いない。袁宏は時代に應じた禮制の變化を認めるが、名教、特に君臣關係や長幼の序についてはその不變性を主張しており、先にも觸れたようにこの名教のありようを明らかにすることが『後漢紀』編纂の主要目的であつた<sup>75</sup>。そして「先王之教」であり古の聖人が立てたものである名教によつて實現されるべき正しい世のあり方の具體像として挙げられているのが三代の世と考えられる<sup>76</sup>。「三代士」という表現は『後漢紀』では郭泰以外に用いられていないが、こうした點から見れば、郭泰こそ袁宏の重んずる名教をその優れた人格によつて敷き廣めた偉大な人物であり、名教を敷き廣めたその行動は孔子や孟子になぞらえ得るものであつたと位置づけられていることになろう。

袁宏による郭泰の傳の本體と言うべき（エ）（ツ）の部分は以上のような構成を取つていたと考えられるが、ここでそれ以外の部分に目を轉じてみると、容貌や平生のふるまいについて述べた最後の部分（ト）は、特に學識や周囲の人々との調和が語られている點で（エ）（ツ）中に示された郭泰の人格への稱賛と重なる内容を持つており、主にそれを補足するエピソードとして取り上げられたものと考えられる。殘る學問を身につけるまで（イ）（ウ）と、出仕の拒絶の部分（テ）であるが、このうち後者にみえる10)吾觀乾象は葛洪『抱朴子』正郭篇に引かれていたものといくつかの語句の出入を除いてほぼ一致しており、范書本傳の記載を含め他書と比較しても、この二書の記述が特に近い關係にあることは明らかである。この二書の記述では郭泰の言葉の最後で『詩』小雅

采菽を典據に隱逸の志が語られており、これが范書など他書に見られない特徴となっているが、(ト)が(エ) (ツ)のエピソードとして性格を持っていたことからみれば、事實上袁宏による郭泰の傳は隱逸の志を述べた(テ)によって結ばれていることになる。これを踏まえて改めて(イ) (ウ)をみると、特に(ウ)には孔子が顔回を褒めていった言葉が典據に用いられており、顔回が皇甫謐『高士傳』卷上に採録され隱逸と見なされていることから考えれば、葛洪『抱朴子』と同様、袁宏も郭泰を隱逸として理解する方向性を有していたように取れる。「濟俗變教」という言葉が、隱逸としての屬性を持つものが果たし得る政治的・社會的役割、という含意を持ち得ることについては先に觸れたが、ここから考えれば隱逸としての屬性をもつ郭泰が、その優れた人格によって周邊に正しい教化を及ぼし、風俗をよいものにしていくという政治的・社會的役割を果たしたとして、その名教を重んずる立場から高く評價した可能性が出てくることになる。

しかしながら、「眞隱」の否定と「亞聖」の否定の二點を論の冒頭で打ち出し、併せて議論を進めていった葛洪と異なり、上述したように袁宏は各地での交際と教化については同時代人の評価をいくつも擧げて敘述し位置づけていくが、隱逸としての面についてはこうした評價や位置づけに結び付く議論を紹介していない。單なる記述量の多寡という問題以上に、その名教を著述の根幹におく姿勢からみても袁宏の力點は各地での交際と教化の面にあり、これに比べれば隱逸としての面はもはや重視されなくなっていると理解すべきであろう。

以上、袁宏『後漢紀』郭泰條について検討した。ここで郭泰は、編者袁宏の重んずる名教をその優れた人格によって敷き廣めた偉大なる人物であり、名教を敷き廣めたその行動は「三代の士」、孔子や孟子になぞ

らえ得るものとして位置づけられていた。袁宏自身による郭泰評が本文に附されていないことからみれば、こうした位置付け自体が袁宏の郭泰評價を表現していると考えられる。郭泰の人物識鑒能力に關する直接的表現を缺く代わりに、彼の人格を優れたものとして注目し、その交際を人物識鑒能力を證し立てるものとしてではなく教化を廣めたものとして評價するという手法は葛洪、范曄とは異なっており、むしろ今までの検討から考えれば、人格と教化に注目する點では蔡邕に近いとさえ言い得るし、人々との交際を教化として評價していく方向性は皇甫謐にも認められる可能性があった。しかしながら袁宏は人格に注目しながらも、そこから「隱逸」という評價を引き出すのではなく孔子になぞらえ得る存在という方向へ議論を組み立てているのであり、こうした立論のあり方に袁宏の獨自性をみることができると同時に、交際に注目して聖人に比すという葛洪『抱朴子』や范書本傳に現れる評價の枠組みがここでも基礎構造とされていることを特に指摘しておきたい。そして上述したように葛洪までと比べて隱逸としての評價はもはや重視されなくなっているのであり、ここからみれば評價の中軸は既に交際に注目して聖人に比すという方向性へ移行していると考えられるのである。

## 第六章 郭泰評價の方向性とその變化

以上、郭泰という人物の評価について、ほぼ完全な形で残る五點の文章を検討した。この要點を改めてまとめると次頁表のようになる。前述したように葛洪の郭泰評價は結論としては否定の形をとる特異なものではあるが、立論自体には他の論者と共通する構成が確認でき、論理として「裏」になっているだけと考えられるので、この内容も各項目に記入

【各論者における郭泰評價の要點】

	比定先		評價対象の事績	注目する 行動	評價の内容
	隱逸	聖人			
①蔡邕	○		優れた徳と、仕官を断り人々を教化したこと	仕官せず 教授	許由ら傳説の隱逸に比し得る行いとして評價
②皇甫謐	○		出仕せず在野のまま優れた人物の舉用に盡くす	周遊と 交際	隱逸としての独自の價値を體現しているとして評價
③葛洪	●	●	各地を巡って行ったことは「浮華」に過ぎず、自らの能力が不足していることを知りながらそれを誇張して喧傳するという悪行を犯した	周遊と 交際 (浮華として)	期運に應じ一際優れた能力を持つ「亞聖」でもなければ、著述を通して教化を廣めた「眞隱」でもない
④袁宏		○	先王の建てた名教を優れた人格によって敷き廣め、人々を教化	周遊と 交際 (による教化)	偉大な人物であり、「三代の士」、孔子・孟子に匹敵
⑤范曄		○	竝はずれた人物識鑒能力を持ちながら慎重に振る舞い、人々を教導して成果を残した	周遊と 交際	その人物識鑒能力は堯・舜・孔子などの聖人にも比し得る

した（比定先のみ區別のため黒丸とした）。  
 ここであらためて各論者の立論構成をふり返ってみると、評價の対象とする事績の取り上げ方や、そこからの評價の引き出し方といった面ではまさに各人各様といえ、例えば同じ人格の高尚さに注目しながら①蔡

邕と④袁宏では立論のあり方が異なっていたり、また隱逸に出仕と對等の独自の地位を與えることでは近い立場にある②皇甫謐と③葛洪であっても、隱逸としてなすべき事柄の理解は相違しており、郭泰に對する評價も逆轉するなど大きな違いが確認できる。これは各々の立場・思考からそれぞれの文章が書かれていることを考えれば當然のことであり、その故にこうした論説の類から窺える歴史理解・認識がその當時においても特異なものに過ぎなかったのではないかと疑問も拭えないであろう。これは、こうした論説の類、就中四部分類上の子部に屬する文獻を扱う際には必ず立ちはだかる問題といえよう。

しかしながらここで注目したいのは、郭泰の比定対象として取り上げられている人物である。今までの検討でも繰り返し觸れたごとく、これら五點の文章には必ず郭泰を先人に比定する表現がみられた。これはいづれも文章構成上結句・結論としての位置に置かれており、葛洪『抱朴子』正郭篇で「誠爲游俠之徒、未合逸隱之科也」と明言されていることを参考にすれば（『史料4』段落⑦末尾參照）、少なくとも葛洪においては郭泰が如何なる類別に屬する人物であるかを確定した部分といえ、その意味ではそれぞれの評價の意圖する方向性を集約したものと理解することができる。②皇甫謐『高士傳』のみ直接的な言及がないが、第三章でふれたように『高士傳』は皇甫謐の隱逸觀の具體化と考えられるのだから、郭泰の傳記が配列されたこと自體が彼を許由など古の傳説の隱逸たちと同じ系譜に屬すると述べているに等しい。この先人に比定する表現について、上の表では「評價の内容」欄にその具體的内容の要點をまとめ、比定される対象を「比定先」欄に示した。またこうした比定を行う際直接的な根據とされる郭泰の行動について、「注目する行動」欄に記した。このようにしてみると、③葛洪を分水嶺として、郭泰を隱逸に

比定する方向から聖人に比定する方向へと評價が移行していったことは歴然としており、かつ、今までの検討からみれば、范書本傳に典型的に見られたような、各地をめぐる交際を行い、優れた人物を見つけ出し、勵まし育てたことを根據に聖人に比すという方向性がちょうど同時期を境として郭泰評價の中心を占めるようになり、かわってそれまでみられた隱逸としての評價が弱まっていったことも明らかである。先にも觸れたが、例えば④袁宏が周遊と交際に注目しながらも、それを自身の名教を重んずる立場から教化の文脈でとらえることで「三代の士」や孔子・孟子に比すという方向へ引つ張っていったように、あるいは③葛洪が論理構成上は他者と共有する部分を多く持ちながらその論理を裏にすることによって否定の評價を導いたように、評價の具體的な構造・道具立ては各人各様であり、それぞれの立場から議論されているのは間違いないが、しかし彼らは、その議論から引き出される結論としての比定先、及びその直接的根據とされる郭泰の行動、という評價の基本的枠組みとしての類別を（肯定否定は別として）共有していたのであり、そしてこの基本的枠組みは上述したように隱逸に比す評價から聖人に比し得る存在としてのそれへ移行してゆくものとして一貫して追うことができるのである。先述したようにかつて吉川忠夫氏は葛洪『抱朴子』正郭篇の背後に當時の社會的風潮を讀もうとしたが、これを念頭に置くことすれば、このことは個別的なものとして存在する彼らの議論の背景に廣がる通念としての郭泰評價のあり方と、その轉變を傳えてくれていると理解することができるとはなからうか。

このように考えて大過ないのであれば、ここにみた郭泰評價の移行は五人の論者の個人的な見解という次元を越え、後漢末から魏晉期の士人層における郭泰評價の方向性を反映するものと理解することができるとなる。

ことになる。特に三國魏にルーツを持つ嵇含と三國呉の遺臣の子孫・葛洪の對論である③葛洪『抱朴子』正郭篇の存在は、再び吉川氏の指摘を擧げるまでもなく、こうした見方の妥當性を裏付けるものとしてとらえることが可能であろう。同時に、⑤范曄『後漢書』郭太列傳にみえる郭泰の位置付け方とその人物評價に重點を置いた記述の方法が、實はこうした郭泰評價の流れに乗るものであり、後漢末から魏晉にかけての評價の方向性を受け繼いで成立しているものであることも明らかである。范曄『後漢書』の記述を、その成立が後代であるが故に客觀的な記述が可能であつたとして、後世正史として重んじられたことをも遡及させつつ、その信賴性をいわば特權化することは決して妥當とは言えない。

以上、蔡邕から范曄まで五人の論者の文章を題材に、主にその郭泰評價の論理構成を検討した。ここまでの検討からは、郭泰の人物識鑒者としての要素は皇甫謐以降に確認でき、評價の中心を占めるようになるのは葛洪以降、即ち西晉末から東晉のことと考えられたが、では郭泰の人物批評をめぐる逸話はこの時期に急に出現したもののだろうか。實際はそう單純ではない。續けて、諸家『後漢書』・『後漢紀』、及び郭泰の別傳等の佚文にみえる郭泰の事績の検討に入ろう。

## 第七章 諸家『後漢書』・『後漢紀』等の佚文にみえる郭泰の事績

### 第一節 郭泰關連記事・佚文と范書本傳の關係

第一章で觸れたように、郭泰に關する記事は諸家『後漢書』・『後漢紀』ばかりでなく、「郭林宗別傳」「郭泰別傳」等と稱される別傳<sup>79</sup>の佚文を始め多數が存在する。こうした佚文を管見の限り集め、前章までで検討



した五種の文章と併せて論題毎に整理し、排列したのが〔史料6〕〔史料7〕〔史料8〕である。整理にあたってはここまでの検討の経緯をふまえ、まず范書本傳に通ずる内容をもつ記事・佚文を集め、〔史料1〕に示した論題毎に分類し、これを〔史料6〕とした。ついで范書本傳には無いが袁宏『後漢紀』には存在する記述を同様に整理し、これを〔史料7〕とした。さらにいずれにも属さない記述を〔史料8〕としてまとめた。〔史料7〕の論題の分類・符號は〔史料5〕に準據しており、〔史料8〕では新たにそれぞれの記事・佚文に特徴的な記述から論題を與え、ローマ數字の番號を附した。排列は、まず主として特定の他者の事績や彼らとの交際、その人物評價等にかかる内容のものとそれ以外とに分け、それぞれ論題の五十音順に番號を附した上で、後者―前者の順とした。なお整理の都合上〔史料6〕に載せる記事は范書本傳にみられるものに限ることとし、范書本傳には無い記述だが他の列傳に收録されている場合は一律に〔史料7〕〔史料8〕關連箇所配當した。いずれも各論題内での記事・佚文の配列は成立年代順となっているが、成立年代が確定しがたいもの、及び各論題を典據としたと思われる記述などの参考事例は一行空けて末尾に配置している。

この一覽は本章の検討の基礎となるものであるが、このままの状態では記事の分布状況、成立年代を把握しにくいいため、主としてこれらの一覽と全體状況の把握を目的とするインデックスとして次頁・次々頁表〔郭泰關連記事佚文對照一覽表（その1）（その2）〕を用意した。列に史料名をとり、行に各論題をとっている。史料の配列は基本的に成立順であるが、張璠『漢紀』や『陳留耆舊傳』・『海内先賢行狀』など正確な成立年代の定めがたいものは、その成立したと思われる時代の末尾に、他史料との關係を考慮しつつ配置した。凡例は表（その2）にも示したが、

内容の關連性の強弱は網掛けの濃淡で、また文言上の共通性の有無、相違については、共通性がないか限られているものを△、一定の共通性がみられるものを○、范曄『後漢書』との間で全般に文言が一致するものを◎、他書との間で全般に文言が一致するものを●、他書と構成・文言に共通性がみられるが明らかな矛盾を含むものを▼の各符號で表現している。なおここという共通性や一致は當該論題内での比較を基準としており、そのためあくまでも相対的な目安に過ぎないことを豫めお断りしておく。論題は番號・符號でのみ示したが、その指す内容については凡例に論題名だけを一覽として挙げたので、そちらをご参照いただきたい。

この一覽表を瞥見してまず明らかなことは、『東觀漢記』を始めとする諸家『後漢書』・『後漢紀』には郭泰の記述が意外なほど少ないことである。そもそもこれらのうち郭泰に關する佚文・記述が存在するのは『東觀漢記』、謝承『後漢書』、司馬彪『續漢書』、張璠『漢紀』、謝沈『後漢書』、袁宏『後漢紀』、袁山松『後漢書』、そして范曄『後漢書』の八種であり、薛瑩『後漢記』、華嶠『漢後書』の佚文は管見の限り確認できていない。また上記八種のうちでも、『東觀漢記』、張璠『漢紀』、謝沈『後漢書』、袁山松『後漢書』佚文はごく少數しか存在せず、それぞれ一項目一條、二項目二條、一項目一條、三項目五條しか確認することができない。かつこれらで郭泰を主人公として書かれたことが明白な記述は皆無といつてよい。これと比べれば謝承『後漢書』、司馬彪『續漢書』の二種はそれぞれ十三項目、九項目に關係する佚文が残っており比較的多いといえるが、しかしむしろ二五項目三二條の佚文が存在する『郭林宗別傳』の突出ぶりが際立っており、諸家『後漢書』・『後漢紀』よりもこちらの方が郭泰の傳記として参照されていたことを疑わせる。

こうした點から改めて文言の異同に注目し、これら佚文と范曄『後漢

[illegible]

郭泰関連記事佚文対照一覧表（その2）

	後漢末			三國			西晉			東晉			南北朝										
	蔡邕 郭有道碑文	東觀漢記	風俗通	謝承 後漢書	殷伯璠亦曰 (抱朴子引)	諸葛亮亦曰 (抱朴子引)	周恭遜亦曰 (抱朴子引)	汝南 先賢傳	陳留 耆舊傳	海內先賢 行狀	皇甫謐 高士傳	司馬彪 續漢書	郭林宗 別傳	張璠漢記	葛洪 抱朴子	謝承 後漢書	語林	袁宏 後漢記	袁山松 後漢書	世說 新語	范曄 後漢書	水經注	
史料6	(i)			○																			
	(ii)												○										
	(iii)				▼						●		○										
	(iv)												●										
	(v)												○										
	(vi)													◎								○	
	(vii)																					◎	
	(viii)																					○	
	(ix)																						○
	(x)													○									○
	(xi)			○																			○
	(xii)																						○
	(xiii)																						○
	(xiv)																						○
	(xv)																	▼					○
	(xvi)																						○
	(xvii)																						○
	(xviii)																						○
	(xix)				◎																		◎
	(xx)																						

## 凡例

史料6項目論題		
1) [出身]	21) [早卒]	
2) [義]	22) [蔡邕爲碑文]	
3) [斗筭之役]	23) [知人②]	
4) [屈伯珍事]	24) [附益書牒・要拔され た士人の實物]	
5) [學問]	25) [六十人成名]	
6) [琴操①]	26) [臈日]	
7) [臈菜譜]	A) [左原]	
8) [神仙]	B) [茅容]	
9) [辟不廉]	C) [孟敏]	
10) [吾觀蛇象]	D) [庾華]	
11) [知人①]	E) [宋果]	
12) [容鏡②]	F) [賈滌]	
13) [周遊]	G) [史叔寶]	
14) [林宗巾]	H) [魯介]	
15) [范滂の評傳]	I) [謝靈運]	
16) [母憂]	J) [字彙]	
17) [不爲危言]		
18) [黨事]		
19) [閉門教授]		
20) [野哭]		

史料7項目論題	
(工) [宋中と郭泰]	
(才)α [臯符融]	
(才)β [臯輔卓]	
(才)γ [臯衍香]	
(才)δ [童子魏昭]	
(才)ε [袁孝高と黃叔度]	
(才)ζ [生知一書]	
(才)η [石室考と宋子俊]	
(才)θ [平生のふるまい]	

史料8項目論題	
(i) [評・郭]	
(ii) [鄉人拜]	
(iii) [交友]	
(iv) [刺密車]	
(v) [刺密車]	
(vi) [苑廩]	
(vii) [王莽]	
(viii) [仲閭]	
(ix) [賈彪]	
(x) [宿仲瑗]	
(xi) [徐璜]	
(xii) [岑暕]	
(xiii) [盛仲明]	
(xiv) [議不羣]	
(xv) [陳元方／傳信 （其母以錦被蒙）]	
(xvi) [陳寔]	
(xvii) [田畝]	
(xviii) [范滂と陳蕃]	
(xix) [劉備]	
(xx) [八顧]	

	内容に關連が認められるもの
△	内容が一致すると考えられるもの
○	文意に共通性がみられないが、 あってもごく一部にかきられるもの
◎	文意に共通性が認められるもの
●	全貌にわたり文意の一致がみられ るもの〔范曄「後漢書」と比較〕
▼	全貌にわたり文意の一致が みられるもの〔他書と比較〕
▲	構成・文意等に共通性があるが 矛盾點のあるもの〔他書と比較〕

書』、袁宏『後漢紀』以下今まで検討した各文章の記事とを比較してみると、范書本傳の記述のうち先行する諸書にその直接の下敷きとなったと考えられる記事が存在するのは十二項目に過ぎず、「史料1」で范書本傳全文を三六項目に分けたことを考えれば全體の三分の一に止まる。

しかしながらこのうち『郭林宗別傳』と關係するとみられるものは七件を占める。他の蔡邕「郭有道碑文」、司馬彪『續漢書』などは一、二件程度であり、佚文の多寡を計算に入れても比率的には多いものと判断できる。この七件のうち、特に7)見李膺、8)神仙、10)吾觀乾象、B)茅容の各項は數箇所脱落・相違を除き文言としてもほぼ同一と言つてよい状況であり、少なくともこれらの部分においては『郭林宗別傳』が范曄『後漢書』の下敷きとなっている可能性が高い。范書本傳の記述ではないが、そうした意味では(サ)袁奉高と黄叔度の場合、黄叔度の度量を「萬頃」と表現する司馬彪『續漢書』—袁宏『後漢紀』—『世說新語』の系統に對し、謝承『後漢書』—『郭林宗別傳』—范曄『後漢書』の系統は「千頃」としており、ここでも『郭林宗別傳』と范曄『後漢書』の關係の近さを見ることが出来る。袁宏『後漢紀』の場合は『郭林宗別傳』と直接關わると思われる記事が四件に止まり、三件の關係記述がある司馬彪『續漢書』の方がむしろ比率の上では近い關係にあるといえることを考えれば、こうした范曄『後漢書』郭太列傳と『郭林宗別傳』の史料な關係はある程度有意性を持つものと考えられる。

しかし一方、22)蔡邕爲碑文は二重否定が肯定に直され、皇甫謐『高士傳』と『郭林宗別傳』をそれぞれ前半・後半として接合したように思われる14)林宗巾でも文言は書き換えられているなどの相違も存在する。文言に繋がりの見えないものも含めてみれば、特に2)4)6)の三項目では兩者の間にあからさまな差異があり、こうした部分で『郭林宗別傳』が范

書本傳の下敷きになったとは到底考えられない。清侯康が、24)で范曄の批判する「附益増張」を『郭林宗別傳』を指すと解しているのはこうした状況を念頭に置いてであろう<sup>80)</sup>。

以上及び現在の史料状況を踏まえて考えれば、范書本傳は基本的に先行諸書を参照しつつこれを簡要にまとめ直すという方針の下つくられたと考えざるを得ない。ただし第一章以來たびたび觸れたように、傳記の構成面では蔡邕「郭有道碑文」以來の形が基本的に踏襲されたのは疑いなく、そして實際の編集作業にあたっては『郭林宗別傳』が主要史料として参照された可能性が高い。范曄が24)でわざわざ郭泰關係史料の問題点を指摘したのはこうした編集の實態が背景にあったからであろう。

先にも觸れたように、諸家『後漢書』・『後漢紀』には郭泰關連の記述が意外なほど少なく、また范書本傳で先行史料と直接の關係があったと考え得る事例は全體の三分の一程度であった。こうした現在の史料状況は記述相互の關係から史料構成の過程を読み取ることを困難にしており、管見の限りでは後述する一例を除き、そうした過程を明らかにすることが出来る部分は存在していない<sup>81)</sup>。その一例の内容ともつ意味については後述することとして、ここでは視點を改め、前章までの検討で問題となつた、人物識鑒能力に注目し聖人に比していく、という形で郭泰評價と關連する記述について見ていこう。

## 第二節 人物評價をめぐる記事・佚文

第二・第三章にて論じたように、西晉初に成立した皇甫謐『高士傳』には郭泰の人物評價に關する具體的記述が出現していたが、最初に登場した蔡邕「郭有道碑文」には全く見られなかった。ではこの間、即ち後



漢末から三國時代にかけての記事・佚文についてはどうか。

碑文は郭泰の死後まもなく、概ね建寧二年から熹平二年頃までの間（西暦一六九〜一七三頃）に書かれたと考えられたから、仕官後の蔡邕及び後漢末・三國初頭の楊彪によつて最終的な編述が行われた『東觀漢記』の方が「郭有道碑文」よりも後の記述ということになる。前掲「郭泰關連記事佚文對照一覽表」に示したとおり、『東觀漢記』佚文は（ケ）童子魏昭に關するもの一條のみが確認できる。ここで郭泰は「人師」と稱されているが、「郭有道碑文」が年若い者たちを正しい方向へ教導したとして郭泰を稱賛していたことを踏まえれば、この佚文は蔡邕の郭泰評價の枠内で理解することができものであるから、必ずしも袁宏『後漢紀』における位置付けから遡及させて人物評價に絡む記述と理解してよいものではない。

續く謝承『後漢書』佚文になると、確實に人物評價に關係する記述が出現する。特に23)知人②では郭泰の人物識鑒能力の高さとそれに對する人々の信賴が明言されており、25)六十人成名、B)茅容及び（サ）袁奉高と黄叔度、（巫）劉儒では人物評價の實例が示される。（一）許・郭は、記事自體は許劭に關わるものであるが、こうした形で兩者を並列したこと自體が、少なくとも謝承においては「賞識」、すなわち人物識鑒者としての側面を郭泰が持つていたと考えられていたことを表している。

謝承『後漢書』佚文の殘存狀況は傳全體を復元するにはほど遠いものであるため、謝承がここから如何なる評價を導き出そうとしていたかは分らない。人々からの尊崇が記録されている以上こうした限定を付けることにさしたる意味はないと考えられるかも知れないが、第三章で取り上げた皇甫謐『高士傳』がそうであったように、人物識鑒者としての能力の高さと、それゆえの人々からの尊崇を記録していても、それが直

ちに「人物識鑒者としての郭泰」という評價、敢えて言えば類別を意味するとは限らないのである。もう少し、この點について追究してみよう。

第四章で觸れたように、郭泰を孔子に比す見方は葛洪『抱朴子』正郭篇に引用された三國呉周恭遠（周昭）の言葉からみて概ね三國呉永安年間（西暦二五八〜二六四）頃には出現していた可能性が高い。前述のように現存の謝承『後漢書』佚文から傳全體を復元するのは不可能であり、また直接郭泰の評價を示す文言も殘されておらず、かつ今までの検討や「郭泰關連記事佚文對照一覽表」にも示されているとおり、蔡邕「郭有道碑文」を除いて、周昭の言葉より以前に遡る直接的な郭泰評價を見出すことはできない。そこで検討の對象を少し廣げ、三國期の文獻で郭泰の事績を典據とした議論をここでは検討する。

諸家『後漢書』・『後漢紀』佚文と同じく、郭泰の名は三國期の文獻においても不思議なほど論及されていない。しかしごく少數の事例が三國呉に絡んで殘されており、直接的關わりはないものの強いて言えば17)不爲危言に關係する内容であるので、〔史料6〕17)に參考として示した。

この二條のうちまず評價をより明確に打ち出している『太平御覽』卷四四七品藻下條所引「姚信士緯」から見る。ここには、

平議之士、若季札、趙武、逮于林宗、皆可盡爲則也。其洩冶・伯宗及末世史雲・子將之屬、皆美而未善。聖人考功默陟、猶以三載。而子將月旦之處、史雲睚眦廢人。其觀進者或飾虛、其怠沮者皆離叛。識誠可謂妙矣、然非洩冶之風、三千之弘化。

公平な議論を行う士人について論ずると、季札や趙武（二趙文子）から郭林宗までのとき人物は、みな全て模範とするに値する。洩冶「左傳宣公九年」や伯宗「左傳成公十五年」、衰えた時代である後漢の史雲（二范冉（丹））や子將（二許劭）といった類の者たちは、みな立派ではあるが正しくはない。聖人が

功績を考え任免を行うのであつてさへ三年を費やしたのである「…尚書舜典」。なのに子將は毎月初めのときに（人物評價を）行い、史書はひと睨みしたぐらいの些細なことで人を見捨てて顧みなかった。彼らの取り立て評價した者によると見かけだけで中身が無く、侮つて留めおいた者はみな（彼らから）離れていった。その識鑒は確かに極めて精緻と見なすに足りるが、しかし洙水と泗水の間の（魯の地で學問を教授した孔子の）品格、（そして孔子が）三千人の弟子たちに及ぼした教化（と比較できるもの）ではない。

とみえる。姚信は三國呉赤烏七、八年（西暦二四四～五）から建衡元年（西暦二六九）にかけて活動が確認できる人物であり、初めは太子孫和の側近として陸遜の外甥である顧承・顧譚と共に名がみえ、降つて孫皓在位の頃には太常の任にあつたと考えられる<sup>82</sup>。右引の書名「姚信士緯」は『隋書』經籍志子部名家類人物志條に付記されている『士緯新書』と同一と考えられ、現存の佚文からも人物評價の實例を集めた書物であるとされる<sup>83</sup>。ここで注目されるのは郭泰が「平議之士」の模範として挙げられ、さらにそれより格下とされる范冉（范丹）や許劭らについて論評した後で孔子が比較対象として登場することである。しかし范書本傳<sup>26</sup>論曰の場合と異なり郭泰ら三人を直接稱賛する言葉がここには見えないため、范書の場合のように末尾に言及される孔子に三者をなぞらえているのかどうかは判別し難い<sup>84</sup>。ここでは郭泰を「平議之士」として評價する動きがあつたことを確認するにとどめておく。この文中で論じられている「平議之士」の行動が基本的に人物評價とそれによる教化であることを考えれば、ここには人物批評家として見る方向が含まれていると考えることができる。

こうした人物批評家として郭泰をとらえる視線はもう少し遡ることができる。『三國志』呉志十二陸瑁傳には、

時尚書暨鑒盛明臧否、差斷三署、頗揚人闇昧之失、以顯其譴。瑁與書曰、夫聖人嘉善矜愚、忘過記功、以成美化。加今王業始建、將一大統、此乃漢高棄瑕錄用之時也、若令善惡異流、貴汝穎月旦之評、誠可以厲俗明教、然恐未易行也。宜遠模仲尼之汎愛、中則郭泰之弘濟、近有益於大道也。鑒不能行、卒以致敗。

當時、尚書の暨鑒は人物の善し惡しをやたらに暴きたて、五官・左・右の各官廳に屬する郎官たちを等級付けし、人々の愚かで知識がないことからくる失敗をどんどん明示して、それでもつてその處分を周知させた。陸瑁は暨鑒に書簡を送つて以下のように言つた。「そもそも聖人は善人を褒め稱えて愚かな者にも同情し」「…論語子張」で、（些細な）過失は目こぼしし功績は記録しておくことで、それによつて立派な教化を成し遂げたのです。その上今（呉王陛下の）王朝建設という大業は新しく創建されたばかりで、これから帝位をひとつにまとめようとしておられるところであり、これはまさに漢の高祖が（些細な）瑕瑾には目をつづつて優れた才能ある者を擧用した（ことに見習うべき）時であります。それなのにもし善人と惡人とが別々になるようにし、汝南や潁川で行われた月旦の評（のような人物評價を）尊重させてしまったら、確かにそれによつて世間の人々を勵まし、立派な教化を知らしめることはできませんが、しかしそれを實現することは容易ではないかも知れません。遠い昔の例としては孔子があまねく人々を愛したことを模範とし「…論語學而」、より最近の例としては郭泰が廣く人々を助け勵ましたことを見習つて、今の世において人々の踐み行うべき正しい道を一屬推し進めることが妥當と存じます。」暨鑒はこの意見通りに行うことができず、結局そのために失敗を招いてしまった。とみえる。暨鑒の失脚は黄武三年末から四年頃（西暦二二四～五）と考えられるから<sup>85</sup>、この陸瑁の書簡も事實とすれば黄武年間初頭、謝承『後漢書』成立に先立つ時期のものということになる。陳壽『三國志』呉志

のもととなった韋昭『吳書』は孫權の死後、太傅諸葛恪のもとで建興元年から二年（西暦二五二～三）に編纂が始められ、韋昭が下獄する鳳皇二年（西暦二七三）にはほぼ完成していたと考えられており、先に問題とした周昭もこれに參與していたが、彼らは暨艶に續いて失脚した張温の與黨であつたという<sup>86</sup>。暨艶は張温の引き立てによって選曹尚書となつた人物であるから、張温―暨艶、そして『吳書』編纂者という文脈の上で陸瑁の意見が収録されていることになる。實は郭泰に關する言及を残した三國呉の人物全てが何らかの形で暨艶・張温の事件及び彼らの與黨と關わりを持つてゐるのだが、ここではこの書簡が三國初期の認識を示したものである可能性があること、また記述そのものも西暦二七〇年頃までは遡り得るものであることを確認しておく。

この陸瑁の書簡は、聖人としての孔子の交際のあり方・人物の見方を理想として前提におき、その上で近い時代に求められる模範として郭泰を引き合いに出すという構成を取つてゐる。郭泰の交際と人物評價を模範とできるもの＝理想に近いものと見てゐるのは文中から明らかであり、筆者陸瑁にも人物批評家として郭泰をとらえる視點があるのは間違いない。同一の目的のための議論とは一概に考えられないものの、こうした立論の構造、及び人物評價による教化の擴大がここでも主目的とされてゐる點から見て、この陸瑁の議論の組み立ては先掲の姚信の見解に近いと判斷できるし、さらに第五章における検討をふり返れば、袁宏の郭泰評價に繋がつていく原型と見なすことも可能であろう。しかしここに、袁宏の場合に見られたような、郭泰を聖人に比肩しうる存在としてとらえる見方があるかという、やはり姚信の場合と同様直接的な表現を缺いており判別し難く、周昭の理解が否定的ながら背景に孔子に比する見方が存在したことを示唆してゐるのと比べても、史料状況からはこうし

た意識が薄いと判斷せざるを得ない。

陸瑁・姚信に共通してみられた、人物評價による教化に主眼がおかれてゐるが聖人に比す見方が明確に出ているわけではない、という郭泰に對するとらえ方は、蔡邕が教化を一つの要件として郭泰を隱逸と評價したこと、續く皇甫謐が人物評價を隱逸としての独自の價值として位置づけたとみられることからみれば、こうした評價の枠内に納まり得るものであり、第六章でまとめたとおり、未だ隱逸としての評價の枠から出るものではなかつたのではないかと推測される。この點で、陸瑁が暨艶に先の書簡を送つた當時、彼自身が事實上隱逸として生きていたことは注目に値する<sup>87</sup>。在野の隱逸である陸瑁が執權者である暨艶の行つてゐる人物評價をたしなめるという文脈の上で、同じく隱逸であつた郭泰のあり方は陸瑁の立場に巧く適合するものであり、萬一の場合も警戒・彈壓を受ける危險を招かずに済むものだったのである<sup>88</sup>。

こうしたことからみれば、謝承『後漢書』佚文と前後して出現する陸瑁・姚信の理解は、蔡邕―皇甫謐と引き繼がれた隱逸としての郭泰という評價の枠から基本的に出るものではなかつたと考えられよう。しかし議論が前後するようではあるが、謝承『後漢書』佚文も含めて、これらの中に人物批評家としての郭泰という視點が既に萌していることは看過できない。第四章でみたように周昭の文章は西暦二六〇年頃まで遡り得るものであつたが、姚信と陸瑁の場合も最大限遡るとそれぞれ西暦二四〇年代半ば、二二〇年代前半の文章と考えることができた。無論これらは所收書物の編纂の年代にも左右されるのであり、場合によつては西晉期までずれ込んでしまう可能性もある。しかし假に編纂の際手が加えられなかつたとすると、評價の枠組み、類別として隱逸とみること自體は繼續してゐたと考えられるものの、三國呉において既に初期から人物批

評家としての郭泰という見方が存在しており、西暦二六〇年頃にはその交際と人物評價に注目して聖人に比するような評價も生まれていた、つまり葛洪『抱朴子』正郭篇の構造にみえたような評價の競合に至るその前段階が、三國呉において既に始まっていたことが窺えるのである。

『三國志』魏志・蜀志では、裴松之注以外に郭泰は出現せず、議論の対象となった形迹も認められない。他書にみえる魏・蜀關係の史料においても、許劭はしばしば断片的な形ながら名前が擧がるのであるが、郭泰を対象として議論したものは管見の限り見つけられなかった。このことの意味はさておき、こうした現状では三國呉における議論から後漢末・三國期の議論の展開を推測するより他にない。しかしここまで検討した三國呉における郭泰の評価とその記事は、第六章に示した郭泰評價の變化、中でも冒頭でも觸れた蔡邕と皇甫謐の間の變化と矛盾するものではない。むしろ三國期に郭泰の人物評價に關する記事が出現し始め、丁度皇甫謐『高士傳』成立と前後する時代に人物批評家として評價する方向が確認できるということは適格的でさえある。

このように見てくると、1)謝甄に引いた『汝南先賢傳』佚文において、謝甄の人物評價が郭泰を凌ぐものと記録された背景がより理解しやすくなるであろう。この文章は從來郷里におもねって書かれたもの<sup>99</sup>、あるいは後漢末における人物評論の分裂・恣意性を語るものとして取り扱われてきたが<sup>90</sup>、『汝南先賢傳』が書かれた三國魏の頃には未だ郭泰を人物批評家として聖人に比してとらえる見方が成立していなかったものであつて、つまり郭泰の人物評價自体は知られていても、まだその人物識鑒能力が聖人に匹敵するような壓倒的な權威をもつものと考えられていなかったからこそ、謝甄の方を格上とする記述が可能であつたのであろう。

先に觸れたように三國呉の初期、黄武年間には既に郭泰を人物批評家

と見るものが出現し、それに少し遅れて郭泰の人物評價に關する謝承『後漢書』の記事が現れていた。これより五十年ほど前、郭泰の死後まもなく成立した蔡邕「郭有道碑文」には人物評價に直接繋がる記述は無いとはいえ、郭泰が京師の官僚・士大夫から尊崇を受けていたという記述は存在することに鑑みれば、少なくとも彼が京師において何らかの人物評價活動を實際に行っていたのではないかと疑いが生じよう。蔡邕「郭有道碑文」も『東觀漢記』佚文も直接人物評價を伝えるものではない以上この點の斷定は根本的には不可能であるが、しかし右に論じたことから考えれば、後漢末、蔡邕「郭有道碑文」の段階から三國期の郭泰の類別は一貫して隱逸であつたのであり、人物識鑒能力に注目して聖人に比し得る存在ととらえる見方、即ち最高級の存在によつて權威付けられた人物批評家という范曄『後漢書』のような理解が郭泰の中心的評價となるのは西晉を待たなければならぬという第六章までの検討結果は、郭泰の實際の行動が持った社會的な意味、所謂「郭泰の規制力」なるものの實相を考える上でも重要な意味を持つことになる。例えば、假に郭泰が實際には同時代においても范曄『後漢書』に描かれているような聖人に比し得る人物評價の權威者で、蔡邕は黨錮のもとで廻護のために隱逸と評價したに過ぎなかったと假定しよう。しかしもしそうなら、蔡邕は黨錮が解かれた後董卓の政權下で寵遇されていたのであり<sup>91</sup>、『東觀漢記』編纂にも深く關與していたのであるから、當然自ら墓碑銘の筆を執るほどの關わりのあつた郭泰をそのまま放っておくとは考えにくく、むしろ人物批評家として郭泰を宣揚し直し、彼との關係を誇示することで自らの顯揚も圖る筈であり、ならば結果として聖人に比す方向性も、肯定否定はともかく理解の枠組み自体は後漢末當初から出現してくるのが自然と考えられる。しかし實際の状況がそのように理解できるものでないこ



とは今まで見てきたとおりであった。これらから判断すれば、やはり郭泰はその同時代においても基本的に隠逸として理解されていたのであり、人物評價の權威者、代表的存在と認められていたわけではないと考えるべきであろう。その意味で蔡邕「郭有道碑文」は單なる廻護の産物ととらえるべきではなく、當時の郭泰に對する認識を、その時代状況において可能な形で表現したものと理解すべきと思われる。

では人物識鑒能力に注目し聖人に比す存在と見なす、即ち最高位の存在によって高い權威を付與されるという評價の部分が、郭泰にまつわる具體的な記述にどの程度の影響を及ぼしているのだろうか。范書本傳自體が范曄の郭泰評價に基づいて編述されていると考えられることは第一章や本章前節において觸れてきたが、しかし場合によってはこうした評價はあくまでそれぞれの時代における評價に過ぎず、從來具體的な記事の考證に基づいて論じられてきた郭泰の後漢末における役割そのものとは別ではないかという考え方もできよう。ところが、郭泰が聖人に比し得る存在と評價されるようになってから記述に大きな變動が生じ、その結果今まで存在しなかった場所に郭泰が出現し、それに伴って記事自體の意味も變質していったと判断することのできる事例が存在するのである。次節では、前節末で豫告したこの事例について検討する。

### 第三節 郭泰と徐穉 — 郭泰評價の變化と記事の改變 —

郭泰の類別が隱逸から聖人に比し得る存在へと移行していった結果、記事自體に大きな變動が生じたと考えられるのは、郭泰と徐穉にまつわるものである。ここではこれを「史料8」(xii)徐穉としてまとめた。關係する記事・佚文が多數にわたるため、これを書物毎に分類し、今後の

検討の便宜のため①～⑦の番號を配している。

徐穉(徐稚/徐孺子)は、「逸民的人士」とされる人々の中でも代表格の一人であり、とりわけ當時の政治・社會の状況に對し鋭い認識を持っていたと評價される人物であるが<sup>92</sup>、ここで(xii)にまとめた記事、とくにその范曄『後漢書』徐穉列傳の記述は彼の厳しい現状認識を物語る史料としてよく知られているものである。検討を始めるにあたり、まずこの内容を確認しておく。

#### ⑦范曄『後漢書』列傳四三徐穉列傳

穉嘗爲太尉黃瓊所辟、不就。及瓊卒歸葬、穉乃負糧徒步到江夏赴之、設雞酒薄祭、哭畢而去、不告姓名。時會者四方名士郭林宗等數十人、聞之、疑其穉也、乃選能言語生茅容輕騎追之。及於塗、容爲設飯、共言稼穡之事。臨訣去、謂容曰、爲我謝郭林宗、大樹將顛、非一繩所維、何爲栖栖不遑寧處。

徐穉(徐孺子)は以前太尉黃瓊によって辟召されたが、就任しなかった。黃瓊が死去しそのなきがらが郷里に埋葬されるようになって、そこで初めて徐穉は行糧を背負って徒歩で江夏までやってきて墓所に至り、ニワトリの肉と酒とを供えて簡素な祭りを行い、哭禮が済むとすぐに立ち去って、(喪主に)姓名を名乗らなかった。當時、(葬禮に)集まっていた四方の名士たち郭林宗以下數十人はこのことを耳にして、その人が徐穉ではないかと疑い、そこで應對や言葉遣いに巧みな人である茅容を選び、單騎で彼を追いかけた。道中で追いついたので、茅容は徐穉のために食事を用意し、農作業のことについて語り合った。別れに際して、徐穉は茅容に言った。「私のために郭林宗に言ってくれ。大樹が倒れようとしているのに、一本の細繩で支え守れるものではない。どうしてそんなにあたふたと忙しく、安らかに落ち着いている暇もないほどののか」「論語憲問」。

舞台は江夏、黃瓊の葬禮であり、そこに集まっていた郭泰(及び茅容

以下の「四方の名士」に對して、哭禮をすませると姓名も告げずに去った徐穉が後漢の支えがたいことを指摘したというこの説話からは、「清流派」の巨頭・郭泰と「逸民的人士」たる徐穉との態度の違いを明確に印象づけられるし、また實際そのように理解されてきたといつてよい。<sup>93</sup>

しかしこの記述を、(Ⅻ)に整理した史料群をもとに、年代順にたどつていくと、黄瓊の歸葬と徐穉子の弔禮に關係する記述には、范曄『後漢書』とは異なる内容を持つものが検出できる。(Ⅺ)の状態のままでは煩雜であるため、各書毎に記述を整理し、復元したものが以下に挙げる①～⑦である。以後本節で丸數字、及び(イ)(ロ)(ハ)の記號を用いる時はここに示したものを指す。

#### ① 現行本『風俗通』卷三愆禮篇

(イ)公車徵士豫章徐穉子、比爲太尉黃瓊所辟、禮文有加。穉子隱者、初不答命。<sup>(ロ)</sup>瓊薨、既葬、負<sup>(ハ)</sup>青<sup>(ニ)</sup>涉<sup>(ニ)</sup>、齋一盤、酸哭於墳前。孫子琰故五官郎將、以長孫制杖、聞有哭者、不知其誰、亦於倚廬、哀泣而已。穉子無有謁刺、事訖便去、<sup>(イ)</sup>子琰大怪其故、遣瓊門生茅季瑋追請辭謝、終不肯還。

#### ② 『海内士品』佚文

(イ)徐穉子嘗事江夏黃公。<sup>(ロ)</sup>黃公卒、穉子往會其葬、家貧、無資自以致、齋摩鏡具自隨、每所在、賃摩鏡取資、然後得前。既至、祭畢而退。

#### ③ 謝承『後漢書』佚文

(イ)徐穉前後州郡選舉、諸公所辟、雖不就、<sup>(ロ)</sup>有死喪、負笈赴弔。常於家豫炙雞一隻、以一兩縣絮漬酒中、暴乾以裹雞、徑到所赴冢塚外、以水漬縣、使有酒氣。斗米飯、白茅爲藉、以雞置前、醖酒畢、留謁則去、不見喪主。

#### ③ 謝承『後漢書』佚文<sup>94</sup>

(イ)徐穉子嘗爲太尉黃瓊所辟、不就。<sup>(ロ)</sup>及瓊卒歸葬、穉乃負糧徒步、到瓊所赴之、設鷄酒脯祭、卒哭而去。不告姓名。

#### ④ 『海内先賢行狀』佚文

(イ)徐穉子徵聘未嘗出門、<sup>(ロ)</sup>赴喪不遠萬里。<sup>(ハ)</sup>常事江夏黃公、<sup>(ニ)</sup>薨、往會其葬、家貧、無以自供、齋磨鏡具自隨、每至所在、賃磨取資、然後得前。既至設祭、哭畢而返。

#### ⑤ 皇甫謐『高士傳』徐稚條

(イ)未嘗答命、<sup>(ロ)</sup>公薨、輒身自赴弔。<sup>(ハ)</sup>太守黃瓊亦嘗辟稚、<sup>(ニ)</sup>至瓊薨、歸葬江夏。稚既聞、即負笈徒步豫章三十餘里、夏瓊墓前致辭而哭之。

#### ⑥ 袁宏『後漢紀』卷二二孝桓皇帝紀下延熹四年八月條

(イ)諸公所辟雖不就、<sup>(ロ)</sup>其有死喪者、負笈徒步千里赴弔、斗酒隻雞、藉以白茅、酌畢便退、喪主不得知也。初、稚少時遊國學中、江夏黃瓊教授於家、故稚從之、諮訪大義。<sup>(ハ)</sup>瓊後仕進位至三司、稚絕不復交。<sup>(ロ)</sup>及瓊薨、當葬、稚乃往赴弔進酌、哀哭而去、人莫知者。<sup>(ハ)</sup>時天下名士、四方遠近無不會者、各言、聞豫章徐穉子來、何不相見。推問喪宰曰、頃寧有書生來邪。對曰、先時有一書生來、衣麤薄而哭之哀、不記姓名。僉曰、必穉子也。於是推選能言語者陳留茅季偉候與相見、酤酒市肉、稚爲飲食。季偉請國家之事、稚不答。更問稼穡之事、稚乃答之。季偉還爲諸君說之。或曰、孔子云、可與言而不與言、失人。稚其失人乎。郭林宗曰、不如君言也。穉子之爲人也、清潔高廉、飢不可得食、寒不可得衣、而爲季偉飲酒食肉、此爲已知季偉之賢故也。所以不答國事者、是其智可及其愚不可及也。何不知之乎。是時宦豎專政、漢室侵亂、林宗周旋京師、誨誘不息、稚以書誡之曰、大木將顛、非一繩所維。何爲棲棲、不遑寧處。林宗感悟曰、謹拜斯言。以

爲師表。

### ⑦ 范曄『後漢書』列傳四三徐穉列傳

穉嘗爲太尉黃瓊所辟、不就。<sup>(イ)</sup>及瓊卒歸葬、穉乃負糧徒步到江夏赴之、設雞酒薄祭、哭畢而去、不告姓名。<sup>(ロ)</sup>時會者四方名士郭林宗等數十人、聞之、疑其穉也、乃選能言語生茅容輕騎追之。及於塗、容爲設飯、共言稼穡之事。臨訣去、謂容曰、爲我謝郭林宗、大樹將顛、非一繩所維、何爲栖栖不遑寧處。

以上の史料には、いくつかの點で語られている内容に重大な相違が認められる。まず①から⑤の西晉初頭までに成立した各書では、③に若干問題があるため謝承『後漢書』に黄瓊の名が挙げられていたかどうか確實とは言えないが、全て(イ)徐穉は(黄瓊の)辟召を受けたが應じなかった、(ロ)しかし(黄瓊が)死去して(江夏に)葬られると單獨で出向いて祭禮を行い、終わると姓名を告げたり喪主に會つたりせず、ただちに立ち去った、という構成を基本としてみるとでき、(ハ)後を追ってきた使者(茅容)と應對した、という部分をもつ①『風俗通』であっても、その内容は(ロ)を補足するものとどまつていて、(ハ)部分は獨自の内容を持つていない。この點から見て、これらの説話は徐穉子の隱者としての行動を記すことを主題としたものであつたと考えられよう<sup>96</sup>。また①『風俗通』で徐穉を迎える側として登場し使者茅容に後を追わせるのは黄瓊の孫黄琬であつて、郭泰や四方から集まつた「天下名士」ではない。この點について、②から⑤までの史料では(ハ)の部分がなくともあり明示されていないが、しかしここでも「喪主」が言及されるだけで郭泰や「天下名士」は全く出現しない。

ところが、これが⑥袁宏『後漢紀』となると、①で既に見られた(イ)(ロ)

(ハ)の構成は基本的に踏襲されているものの、(ハ)に當たる部分の構成が大きく變わり、内容も膨らんでいる。徐穉を迎える側の人物は「天下名士」に入れ替わり、使者茅容の目的も謝意を述べるために徐穉を連れ戻すことから離れ、その考えを知ることの方に移っている。そしてその後にこの徐穉の言行に關する郭泰と某人の問答(破線圍み部分)があるが、ここでは徐穉の人格とその言行の意味が郭泰によつて論じられており、その意味で郭泰による人物評論であるといえる。さらにこれにつづいて徐穉から郭泰への書信の中で後漢の支えがたいことが述べられる(波線部分)。郭泰が徐穉の人格を論じていることと併せて、茅容の復命と問答とは必ずしも空間的・時間的に連續していなければならない必然性がなく、この點から郭泰は嚴密には黄瓊の葬禮の場に居合わせているとはいえない形になっていることをここでは確認しておこう。

ここで再び⑦范曄『後漢書』を見てみると、この史料が⑥袁宏『後漢紀』の記述を繼承しつつ、より再構成を進めたものであることが容易に讀み取れる。⑥では(イ)(ロ)(ハ)の構成の外にいた郭林宗が(ハ)の部分に組み込まれて使者茅容を送り出す主體となり、さらに本來は時と場所を異にしていたはずの徐穉から郭泰に與えられた書信の内容がそのまま茅容に託された郭泰への傳言となつてゐる。これは、⑥袁宏『後漢紀』にみえた二つの挿話(問答と書信)のうち、挿話中に登場する郭泰を「天下名士」の代表者として(ハ)部分に組み込んだ上で、徐穉の茅容に對する應答の内容に基づいてその人物に評したものである問答の部分を削除し、後漢の支えがたいことを述べた書信の内容を應答の末尾に組み込むことによつて、(ハ)部分の意義を變化させつつ全體として一つの説話に仕立て直したものである。この徐穉の「何爲栖栖不遑寧處」という言葉は『論語』憲問を典據とするが、第四章第二節の検討をふり返れば、こうした見解

が葛洪による批判、とくにその段落⑤末尾に見えた、後漢を救うに足る才能が無いことを承知しているのであれば隠逸として生きるか、少なくとも静かに退居すべきなのに、浮華的なふるまいをするという悪行を犯した、という論理構成上重要な位置を占める部分とほとんど同内容、まさに異口同音というに相應しいものであることは明らかである。上述『論語』憲問の内容が隠逸である微生畝が孔子の行動を批判した内容であったことを考えれば、孔子になぞらえられ、「四方名士」と共に黄瓊の葬禮に参列している郭泰と、「四方名士」と關わりを持つとせず、哭禮が済むと直ちに立ち去ってしまう隠逸としての徐穉、という對比が、郭泰が黄瓊の葬禮の場に居合わせているのかどうか不明瞭な袁宏『後漢紀』よりも一層明確にされていると考えることができる。従来指摘されてきた「逸民の人士」による清流批判とは、ことこの史料に關してはこうした記述の再編成によって浮かび上がってきたと考えてよからう。

先にも述べたように、①から⑤の西晉初頭までに成立した史料においては、この説話は明らかに徐穉の隠者としての行動を主題としており、郭泰は全く登場してこなかった。このことの確認という意味では、①『風俗通』・⑤『高士傳』が譌脱はあるが一應完結した文章の形で残っていることは大きい。さらに上述の検討からみれば、⑥袁宏『後漢紀』の段階以降もこの主題は基本的に繼承されているが、そこに徐穉と向き合う側として黄琬にかわり「天下名士」、さらには郭泰が組み込まれ、併せて⑧部分の内容が變化することによって、徐穉が「天下名士」及びその代表者としての郭泰に對する批判者としての役割を帯びるようになった、とみることができる。隠逸が孔子を批判した言葉、そして葛洪が郭泰の隠逸としての評價を否定する論理の上で用いた言葉と同じものが、隠逸としての徐穉の口から郭泰に對する意見として述べられている、と

いうことは、袁宏や范曄、就中後者は郭泰を隠逸としてとらえていないと言うことを意味しているよう。しかし〔史料3〕皇甫謐『高士傳』郭泰條と⑤同書徐稚條の存在が傳えているように、少なくとも皇甫謐はこの兩者をともに隠逸として並列させていた。第六章までで論じたように、郭泰の評價は西晉期を境に隠逸から聖人に比し得る人物批評家へと變化したと考えられたが、本来徐穉の隠逸としてのあり方を語っていた史料に徐穉を評價する者として郭泰が入り込み（東晉の⑥袁宏『後漢紀』、さらに隠逸としての徐穉と、孔子に比し得る存在にして名士の代表格である郭泰の對比が強調されるようになる）⑦范曄『後漢書』、という記述の變化は、こうした動向と軌を一にするものと考えることができる。主題や基本的な筋立ては變化しないが、その筋立てを構成する各要素や意義付けが變化することによって全體の意味が變わってゆくというかつて拙稿で論じた記事改變の特質がここにも確認できるといえよう<sup>98</sup>。

では郭泰が何故黄瓊の葬禮の場に現れるようになるのか、その理由は必ずしも明らかではない<sup>99</sup>。しかし記述の構成から見れば、郭泰の登場と共に徐穉が葬禮に集まった「天下名士」たちの批判者の位置を占めるようになったのは確かであり、范曄が「四方名士」の代表者として郭泰を組み込んだことを念頭に置けば、郭泰がその交際と人物評價によって聖人に比し得る高い權威を持つ存在と考えられるようになったこと、その意味で後漢末の士人の社會において人物評價の代表的な地位を認められたこと、そしてそれと共に隠逸としての評價が弱まっていくことが作用しているように考えられる。⑦范曄『後漢書』では記事再編の結果消えてしまっているが、⑥袁宏『後漢紀』で郭泰が登場してくる際、それが徐穉の評價者としてであったことはそれを暗示するものであろう。その意味でこの史料は郭泰に對する評價の變化が郭泰の重要性を高め、活



躍の場を押しひろげていくことになった實例といえるのではなからうか。

たびたび觸れたように葛洪や范曄は郭泰に關係する記述に誇張が多いことを指摘しており、范曄は24)でそうしたものの選別を明言していた。

第一節で觸れたとおり、范曄はこのような姿勢で諸書の記述を簡要にまとめ直し郭太列傳を編述したと考えられた。本節で論じた史料は本傳ではないものの、郭泰に關する記事に問題があるという認識があつた以上、他の列傳に引かれたものについても同様の姿勢で臨んでいたと考えることができる。とすると、少なくともここから見れば范曄は後漢末から劉宋に至る間の郭泰評價の變化に沿う形で變貌を遂げたこの記述を確かなものと信賴したのであり、むしろこれを自らの郭泰評價に合う形に再編成することにより確かな記述にしようとしたとさえ考えられる。范曄が郭泰について人物識鑒能力に注目して聖人に比すという評價を主眼にしながら、17)では范滂にその隱逸としての一面を語らせ、また26)論曰でもその一面を押さえていたように、范曄は後漢末以來蓄積されてきた郭泰に對する理解を周到かつ簡要にまとめることに長けていたようであり、ここでも⑥袁宏『後漢紀』までの内容を巧みにまとめ上げたのは確かである。しかし第一章での検討からも明らかのように、それは范曄の評價に沿う形で、それを證し立てることを方針として行われていることもまた事實であつて、そして本節で論じたように、このような方針によって行われる記事の再編成は郭太列傳においても具體的な記述内容にまで及んでいたと考えることができるのである。

〔史料6〕〔史料7〕〔史料8〕の他項目をみても、25)六十人成名やF)賈淑のように變化は認められるにしてもそれが何を意味しているのか論證のしようがない、または意味を見出しにくいものがあるだけで、管見の限り他にはこれほど明瞭に記事の變化を追えるものは存在しない。記

事内容が漢末・三國期まで遡れるものについては前節で論じたとおりである。これらの點から見ればこの記事はそれだけ特殊なものであるようにも思われるが、前章・本章の検討からみて、諸書佚文からも第六章までで論じた郭泰評價の變化に沿うか、少なくとも矛盾しない状況が讀み取れると云えるのであり、この意味で本論において明らかにしてきた郭泰評價の變化には蓋然性があるものと考えられよう。

おわりに

以上七章にわたり、評價の論理構成と傳記の記述の両面から、范曄『後漢書』に至るまでの、後漢末〜東晉劉宋期の郭泰の傳記の構成過程について検討してきた。その結果を時代を追って整理すれば、以下のようにまとめることができるだろう。

①後漢末の段階では郭泰は隱逸として評價されていた。その傳記の骨格も概ね完成しているが、人物評價に關する記述は確認できない。

②三國期初頭から、郭泰の人物評價と、その人物識鑒能力の高さを伝える史料が確認できるようになる。

③三國期も郭泰は基本的に隱逸として理解されていたと考えられる。彼の人物評價に對する關心は深まりつつあり、人物識鑒能力に注目して聖人に比す評價も三世紀後半、西晉の成立前後には出現していたと考えることができるが、この段階ではまだその權威は確立しておらず、人物識鑒能力において郭泰を凌ぐ存在が語られている事例も存在する。

④西晉最末期には、依然隱逸としての理解が基盤に存在したと考えられるが、既に交際と人物識鑒能力に注目して聖人に比する評價が郭泰評價の中核を占めようとしており、二つの理解の競合状態から後者を中

心とする方向へと移行しつつあった。

⑤東晉以降、交際と人物識鑒能力に注目して聖人に比する評價が郭泰評價の中心を占めるようになり、これに對して隱逸としての理解は弱まっていた。それに伴い、人物批評家としての郭泰の活動の場が擴大し、隱逸とは對比される存在として描かれる事例が現れた。

⑥范曄の郭泰評價はその人物識鑒能力の高さに注目して聖人に比するものであるが、これは以上の後漢末から東晉までの郭泰評價の展開に沿うものであり、記事の編成もそうした觀點に立って行われていると考えられる。

以上から、從來郭泰はしばしば清流派の幅の廣さを示す代表的な士人として、または「人物批評家」として後漢末に大きな役割を果たしたと考えられてきたが、こうした理解が三國から西晉期に起こった郭泰評價の變化に引き摺られたものであることは明らかであろう。かつて川勝義雄氏は郭泰に『浮華交會』的輿論における花形<sup>100</sup>としての姿と「處士の態度」「逸民的士人への方向」をもつ姿の兩方を讀み取り、前者から後者への轉向、あるいは周到に處士として立ちまわっていた可能性を示唆した<sup>100</sup>。本章で明らかにしてきたのはこの二つの方向が實は後漢末から劉宋に至る時期に歴史的に現れた、層位の異なる問題であったということである。川勝氏の理解は、いわば范曄『後漢書』という層を一番上とし全ての層を重ね合わせて見たものといえる。これは、(意圖の有無はともかく)范曄が、かつて郭泰が隱逸として理解されていたことを西晉以降の見方に據りつつ記述の中に織り込んだと思われることを踏まえれば、その場合に考えられる無理のない理解であったといえよう。しかし後漢末から劉宋に至る議論の層位の違いに目を向ければ、郭泰は逸民的士人の方向へと轉向した清流なのではなく、後漢末においてはそもそも

隱逸として理解されていたのであり、三國・西晉期における議論の變質を受けてそこから分かれ出、交際と人物識鑒能力の高さで注目される、聖人に比し得る存在となったものだったのである。郭泰に關する議論、また傳の筆者たちが郭泰の評價を行うに當たつて用いた論據・行論の手法は様々であったが、その屬する類別をどう定めるかという評價の方向性に注目すれば、上述の展開を一貫して追うことができたのであり、その意味でこうした理解が各論者における特殊なものに過ぎなかったとは考えにくく、むしろ後漢末から劉宋に至る士人の間での評價を反映するものだったと考えるべきであろう。そしてそのような變化を経たことが具體的な記述内容に影響を及ぼしている可能性については、第七章第三節で論じたとおりである。このような人物批評家としての郭泰像の成立を見る限り、人物批評を重要な核として成立する後漢末の輿論・清議もまた、同様に魏晉期の層位を含んでいないか再考する餘地がある。

以前拙論で「天下名士の番付」について論じた際も、この「番付」の成立は三國末から西晉を最初の畫期としていることが窺えた<sup>101</sup>。以上の検討からは郭泰の評價についても同時期に一つの畫期を迎えていると考えられるが、假にそうならば貴族制の形成に關わる後漢末の状況についての理解がこの時期に何らかの重要な變化を起こしたのではないかと考えられることになり、さらには范曄『後漢書』に描かれた、そして現在の後漢末認識の基礎になっている後漢末時代像の基本的な姿がこの時期に形成されてきたのではないかと疑われることになる。この點はなお今後の検討を要するが、後漢末の状況を通してそれぞれの時代の認識の枠組みが語られていることを考えれば、三國から西晉に至る時期における貴族制の展開と絡む問題として意義を持つであろう。

では、ここで論じたような郭泰評價の變化は何故發生したのであろう

か。この點を論ずるのは極めて難しいが、少なくともこの問題は、なぜ人物批評家として聖人に比されていく方向性が西晉成立前後に生まれてくるのかという面と、西晉期以後隱逸としての評價がどうして弱まっていくのかという面と、二つの側面から考えられるものではある。

前者の問題については、こうした方向性が現れる西暦二六〇年前後に先立ち、三國魏明帝期後半の青龍二年（西暦二三四）頃には完成していたとみられる劉劭『人物志』が、『周禮』を意識しつつ「中和の質」を備えた聖人による他律的な人物評價によって全ての人物が適切な地位・任務を與えられるという考え方を示していたこと<sup>102</sup>、そしてこれが九品官人法の再検討に關わるものであり、嘉平元年（西暦二四九）には州大中正が設置されていることが何らかの形で關わっているのではないかと推測される。州大中正の設置の意義については地方と中央の關係を含め西晉の支配構造のあり方の問題として問われてきたが、これを中央による郷論の支配強化を意味すると理解するか、それとも地方輿論の積み重ねの上に中央の人事を運用する政策であると評價するかはひとまずおくとしても、州大中正の設置が地方の輿論を束ね中央に連ねしめるものであり、そしてこれが中央での人物評價を軸に「浮華」的な政權運営を行っていた曹爽を打倒した司馬懿の意向が強く反映されたものと理解されていることは確かであろう<sup>103</sup>。先に『抱朴子』正郭篇に引かれた諸葛恪・殷禮・周昭、及び郭泰に關する言及を残した陸瑁・姚信が全て何らかの形で張溫・暨艷の事件に關連していることに觸れたが、この中でも張溫の黨とされる周昭の他、郭泰の議論を私的偏向として非難した殷禮は張溫の引き立てで尚書戸曹郎となり共に失脚した人物であった<sup>104</sup>。張溫・暨艷は選曹尚書として中央で厳格な人物評價を主導し綱紀肅正を強行したことで政治的な混亂を招き失脚しているが、こうした動きに對し吳郡の大姓出

身である陸瑁が暨艷をたしなめる書信の中で「廣く人々を助け勵ました」模範として郭泰を擧げていたことは、彼ら、特に殷禮の郭泰批判の原點が何處にあるかを示しているように思われる。即ち、少なくとも三國期においては、地方の輿論を顧慮しつつこれを束ね中央と關連づけるという方向性と、廣く人々を助け勵まし教え導く隱逸としての評價と共に人物批評家としての逸話ももつ郭泰のあり方はもともと親和しやすいものだったのであり<sup>105</sup>、それが州大中正の設置を契機に、劉劭『人物志』にみられるような人物評價に對する考え方を媒介として注目され、急速に人物批評家として評價されるに至ったのではなからうか。

後者については、第四章で觸れたように、西晉末期以降隱逸に關する考え方が變化した結果郭泰を隱逸として評價し得る可能性が狹まっていたことが原因として考えられた。この點については、第一章から第六章までで検討した郭泰に關する記述を残した論者のうち袁宏を除く四者が隱逸論の展開の上でも注目される文章を残しているものであり、そして第七章第三節で論じた記事の變化も逸民的人士のひとりと目される徐穉をめぐるものであったことを考えれば、清流士大夫の代表格と目される人物の評價が隱逸に關する考え方と密接に絡みながら展開するというこの問題は、後漢末から魏晉期の隱逸と逸民的人士、及び清流の關係の問題に繋がるものである。このことは逸民的人士の系譜に屬する者が魏晉交代期以後貴族となっていくのではないかとという川勝氏の指摘とも關わるものであり<sup>106</sup>、從來論じられてきた貴族制成立期の諸概念を史料の歴史性という面からとらえ直していく上で意味を持つものである。この點に關しては今後の課題としたい。

— 以上 —

## 注

- 1 關係する川勝氏の主要な研究は「川勝義雄一九八二」参照。また川勝氏の研究の展開については「拙稿二〇〇四」で検討したことがある。
- 2 「川勝義雄一九六七」、特に26～30頁。
- 3 以上の渡邊氏の見解については「渡邊義浩一九九一」第七章「黨錮」第三節二、特にその399頁参照。
- 4 「拙稿二〇〇〇a」・「拙稿二〇〇〇b」。
- 5 「拙稿二〇〇二」。
- 6 「石本裕之一九九〇」は、『莊子』列禦寇篇の當該部分を「孔子の獨白」に分類し、孔子を「至人」として稱揚するものと理解している。
- 7 郭泰は范曄『後漢書』列傳五一左周黃列傳にみえる范曄の論でも取り上げられているが、こちらでも  
 及孝桓之時、碩德繼興、陳蕃・楊秉處稱賢宰、皇甫（規）・張（奐）・段（熲）出號名將、王暢・李膺彌縫衰闕、朱穆・劉陶獻替匡時、郭有道（＝郭泰）獎鑒人倫、陳仲弓弘道下邑。…（以下略）…  
 とあり、人倫、即ち人物評價の面で郭泰が代表的人物として挙げられている。
- 8 これら郭泰に關する史料や彼によるとされる人物評價は、「岡村繁一九五五a」・「岡村繁一九五五b」に纏められている。本論も岡村氏の高説から多くを學んでいるが、しかし氏は史料の成立時期を顧慮せずと同列において比較する傾向が強く、郭泰の傳記や彼に對する評價の變化には注目していない。本論は各史料の成立時期の違いを意識した上で、傳記・評價の變化に注目するものである。
- 9 この他にも『世說新語』には郭泰にまつわる記述を複数見出すことができるが、これらは事實上先に挙げた論題毎に區切られた形で提示されており、まとまった形を取っていない分その評價を検討することは難しい。従って『世說新語』に現れる郭泰の記述は、他の諸書の佚文と共に後論することとする。
- 10 後漢末期、人物批評で名聲があったとされる士人については「岡村繁一九六〇」第二節（1）に一覧がある。
- 11 蔡邕は後漢末・三國期の文壇に残した影響については「岡村繁一九七六」参照。蔡邕は張衡（西暦七八一～一三九）と共に文章の名手として「張蔡」と並稱されたが、岡村氏は建安期における賦題が總じて蔡邕の作品を踏襲していることから、魏晉期においてはより近い時代の文人である蔡邕の方に強い關心が寄せられていた可能性を指摘する。
- 12 梁劉勰『文心雕龍』諷碑篇第十二に以下のようにある。  
 自後漢以來、碑碣雲起、才鋒所斷、莫高蔡邕。觀楊賜之碑、骨鯁訓典、陳（仲弓）・郭（林宗）二文、詞無擇言。
- 13 現在出所が明かな最古の『蔡中郎集』は北宋天聖元年（西暦一〇二二）刊の歐靜本であり、これは明華堅の正徳十年（西暦一五一五）覆刻本（蘭雪堂本／華本）として現存する。四部叢刊本はこの蘭雪堂本である。現行の『蔡中郎集』は基本的に全てこの歐靜本＝蘭雪堂本の系統から派生したものと考えられる。「小林春樹一九八四」、「鄧安生二〇〇二」前言第四節参照。『蔡中郎集』は『隋書』經籍志以降歷代の書目に著録されているものの巻数に出入りがあるため、宋代までに一旦散逸し、その後再輯集されたものと考えられる。この点については蘭雪堂本に附された歐靜の序、南宋陳振孫『直齋書錄解題』卷十六別集類上蔡中郎集條、『四庫全書總目提要』卷一四八集部一別集類一蔡中郎集條を参照。なお、陳振孫は歐靜を歐陽靜につくる。
- 14 このことは古くは桓範『政要論』銘誅篇（『羣書治要』卷第四七所收）で論じられている。近代以降の研究でこの點を論じたものは多く存在するが、さしあたり代表的なものとして「内藤湖南一九四七」第六講「文學の變遷」を挙げておく。「角谷常子一九九二」はこうした觀點から墓碑を「意思表明＝顯彰」の屬と分類する。なお、後述の福井佳夫氏論文にも同様の指摘がある。
- 15 「福井佳夫一九八八」。



「丹羽兌子一九七二」、「丹羽兌子一九七三」。

郭泰の歿年については混乱がある。後に觸れる「史料2」第一段落末尾の21) 傍線部にみえるとおり、現行の「郭有道碑文」は歿年月日を建寧二年正月乙亥とする。謝承『後漢書』佚文、四庫全書本皇甫謐『高士傳』、范書本傳も建寧二年をとるが(「史料1」21)参照)、實は建寧二年正月は甲辰朔であり乙亥は二月の三日目になる。この點について、『水經注』卷六汾水注は郭泰碑の存在に觸れ、その碑文の一部を引用した中で歿年月日を建寧四年正月丁亥とする。後掲の「史料5」袁宏『後漢紀』では建寧二年九月の第二次黨錮事件の際郭泰はまだ生存していたことになっており、『資治通鑑』卷五六漢紀四八孝桓皇帝下建寧二年九月條もこれを採用して記事を配置している。『資治通鑑考異』卷二建寧二年九月條參照。建寧四年正月は壬戌朔であるので丁亥はその二六日目に當たり、この點の問題はない。なお乙亥も建寧四年正月の十四日目に存在する。

兩説のどちらを取るかは、結局のところ『文選』・謝承『後漢書』・范書の系統と袁宏『後漢紀』・『資治通鑑』のどちらを信賴するか議論として展開した向きがある。例えば清翁方綱は『水經注』の記述に矛盾がないことを指摘しつつも、范書の記述を重く見、「疑わしきを闕く」として判斷を保留している。『兩漢金石記』卷十七郭林宗碑條參照。惠棟も同見解であるが、より踏み込んで酈道元の誤りではないかと述べる。惠棟『後漢書補注』卷十六、同『後漢書訓纂』卷十六參照。岡村繁氏など日本の論者も范書の記述に基づいて袁宏『後漢紀』等の記述を否定し建寧二年を取っているが、これは『水經注』の記述を檢討の對象にしていない。『岡村繁一九五五b』參照。この點は王先謙『後漢書集解』卷六八校補も同様であり、岡村氏の見解はこれを下敷きにしている。これらに對し、楊守敬氏は酈道元は碑文を實際に見て述べたのであって『水經注』の記述は信賴できるとし、袁宏『後漢紀』・『資治通鑑』の記述を援用して『文選』・范書の記述を否定する。『水經注疏』卷六汾水注參照。王利器氏や鄧安生氏も基本的に同様の見解であり、王氏は袁宏の判斷を重視する姿勢を明言している。『王利器一九八三』建寧四年條、「鄧安生二〇〇二」郭有道林宗碑條の注二八、同書蔡邕年譜建寧四年條參照(鄧氏はここに「郭有道碑文」執筆を掛けている)。

なお鄧氏のみ丁亥を乙亥に校している。

郭泰碑の原石は唐代ないし北宋初期には既に失われ、現存するのは重刻のみである。重刻碑は複数の系統があったことが知られ、前引の『兩漢金石記』卷十七郭林宗碑條や『金石萃編』卷十二郭泰碑條によれば拓本・摹本も明代以降少なくとも傳本・鄭本・姜本の三種類があったことが分かるのだが、管見の限りではどれも建寧二年正月乙亥とつくっている。郭泰碑に關しては上記二書の他に「永田英正編一九九四」本文篇161頁參照。

『水經注』の記述は日の干支に矛盾がないという點で尊重すべきではあろう。しかし佚文とはいえより古い謝承『後漢書』の記述をはじめ他の諸史料は全て二年につくっており、より後に現れる『水經注』が孤立した事例であることにはやはり疑問が残る。鄧安生氏は漢碑に「四」を「三」とつくる事例が多くみられることを根據に、郭泰碑の場合もそれが誤って「二」となったのではないかと論じているが、主に漢簡と文獻を對象とした檢討ながら、勞幹氏によれば「三」が轉譌するのは多く「三」であるという。『勞幹一九八五』19、20頁參照。

郭泰碑の原石が早くに失われ、後代の著録において重刻・拓本・摹本がしばしば拙劣と非難されていることを思えば、この問題は決め手を缺くと言わざるを得ない。この兩説は碑文の執筆者である蔡邕の仕官年を挟む形で存在しており、そこからみれば蔡邕の郭泰評價を考える上で簡単に捨象するわけにはいかないのであるが、本論は歴史の中で語られる對象としての郭泰を論ずるものであり、郭泰自身の歿年に關する詳細な論證を必ずしも必要としない。従ってここでは、「郭有道碑文」は蔡邕の第一次仕官時代に入ってから作である可能性を無視できないことを確認するに止めておく。

18 これは「丹羽兌子一九七二」・「丹羽兌子一九七三」共に同じである。

19 丹羽氏の清流士大夫觀については「拙稿二〇〇四」。氏は隱逸から政治參與まで種々の傾向を斷絶無く併せ持つものとして清流士大夫を理解するが、實際、蔡邕の隱遁生活が完全に世間との交際を斷つものではなく、門人を持ち、講學や執筆活動も行うものだったと指摘している。「丹羽兌子一九七三」22頁。郭泰を「清議の中心人物」と表現するのも同論文からの引用である。



蔡邕「郭有道碑文」については蔡邕自身が語った言葉（史料1）<sup>22）</sup>が伝えられており、司馬彪『續漢書』佚文・『郭子別傳』佚文にも関連する記事がみえる（史料6）<sup>22）</sup>。ここで蔡邕が語った相手は盧植および馬日磾とされているが、『水經注』卷六汾水注には

其（Ⅱ郭泰）碑文云、將蹈洪涯之遐迹、紹巢由之逸軌、…（中略）…乃樹碑表墓、昭銘景行云。陳留蔡伯喈・范陽盧子幹・扶風馬日磾等、遠來奔喪、持朋友服。心喪期年者、如韓子助・宋子浚等二十四人。其餘門人、著錫衰者千數。其碑文故蔡伯喈謂盧子幹・馬日磾曰、吾爲天下碑文多矣、皆有慚容、惟郭有道無愧于色矣。

とあり、この三者は郭泰の葬禮に駆けつけ、朋友としての喪に服したという。

この記事は三者に當初から接点があった可能性を示すものだが、管見の限り『水經注』以外に見られず典拠も明らかでない。しかし現在の史料状況から三者が密接な関係を持ったと思われる時期を確定しておくことは、碑文執筆時期の下限を定める意味で有効であろう。この点に關し范曄『後漢書』列傳五四盧植列傳には以下のようにあり、この三者は東觀で五經や漢記（のちの『東觀漢記』）の校定・編纂に当たっていたと考えられる。この記事は范曄『後漢書』列傳四四楊震列傳附彪傳李賢注所引「華嶠書」でも確認できる。

（盧植）復徵拜議郎、與諫議大夫馬日磾・議郎蔡邕・楊彪・韓說等並在東觀、校中書五經記傳、補續漢記。（靈）帝以非急務、轉爲侍中、遷尚書。

蔡邕は范曄『後漢書』列傳五〇下蔡邕列傳によれば建寧三年に司徒橋玄に辟召されてから縣長に補せられ、さらに郎中に拜されて東觀で校書に就き、次いで議郎に遷っているが、丹羽氏によれば蔡邕が議郎となったのは四二歳の時（熹平二年、西暦一七三）で、四八歳（光和元年、西暦一七八）まで六年間その任にあった。この点は「鄧安生二〇〇二」蔡邕年譜も同見解である。上引盧植列傳には尚書へ遷ったことがみえるが、范書列傳七〇下文苑列傳の酈炎列傳には（酈炎）妻始產而驚死、妻家訟之、收繫獄。（酈）炎病、不能理對、熹平六年、遂死獄中、時年二十八。尚書盧植爲之誄讀、以昭其懿德。

とみえる。また范書蔡邕列傳李賢注引「洛陽記」によれば、熹平石經の禮記碑

には諫議大夫馬日磾と議郎蔡邕の名が記されていたといい、従って熹平石經の立碑が行われた熹平四年の段階ではこの両者は東觀に揃っていたとみられる。

以上からみて、この三者が東觀に揃っていたのは概ね熹平二年から、長くて六年までの四年間と考えられることになる。従って「郭有道碑文」成立の下限は熹平二年頃、遅くとも熹平六年には完成していたと考えるのが、現在の史料状況からは最も妥当と言えよう。

21 「福井佳夫一九八八」82頁。

22 後掲の「史料8」（Ⅱ）八顧に参考として附した傳陶潛『聖賢羣輔錄』所引「甄表狀」には、郭泰の生涯について蔡邕「郭有道碑文」と一致する内容がみえる。表現上も共通する部分が多く、「郭有道碑文」に基づいたとみられる。「拙稿二〇〇二」にて論じたとおり傳陶潛『聖賢羣輔錄』は來歴に疑問のある史料なのだが、「甄表狀」が事實三國魏明帝によるものなら、西暦二三〇年代前後の魏においても蔡邕「郭有道碑文」の示す郭泰の傳記は受け入れられており、なおかつ人物批評家としての側面は語られていなかった可能性は高い。

23 洪涯は黃帝の、巢父・許由はともに堯の時代に生きたという傳説的な隱逸であり、許由が堯の禪讓の申し出を断った話は『莊子』逍遙遊篇にみえる。巢父・許由は後に觸れる皇甫謐『高士傳』にも列せられており、また洪涯のことは次注に引く『三國志』魏志十一管寧傳でも觸れられている。

24 隱逸を洪涯・巢父・許由に比す表現は郭泰の事例に止まるものではない。例えば次注に引いた後漢胡廣「徵士法高卿碑」にも法眞を評價する文言として見えるし、また『三國志』魏書十一管寧傳によれば、正始二年に太僕の陶丘一らが管寧を推舉した上奏の中で

若（管）寧固執匪石、守志箕山、追迹洪崖、參蹤巢・許、斯亦聖朝同符唐・虞、優賢揚歷、垂聲千載。

と述べられている。ここにみえるように、隱逸として生きた人物を巢父・許由になぞらえるのは一方で皇帝を堯・舜に比すということも意味するのであり、この世を聖世と壽ぐ意味合いももっていた。こうした理解については後述。この點をとらえれば確かに蔡邕による郭泰評價は「常套的」と言い得るが、范書

まで繼承される郭泰傳の基本的構成の中から隱逸として評價する方向性が引き出されている點は無視し得ないであろう。

25 「郭有道碑文」の部分的引用は、先述の『水經注』卷六汾水注以外に、『藝文類聚』卷三七隱逸下條にも存在する。前者は界休（＝介休）縣故城の東に郭泰碑があることに觸れ、續けて

（郭）林宗、縣人也。辟司徒舉太尉、以疾辭。其碑文云、將蹈洪涯之遐迹、紹巢由之逸軌、翔區外以舒翼、超天路以高峙、稟命不融、享年四十有三、以建寧四年正月丁亥卒。凡我四方同好之人、永懷哀痛、乃樹碑表墓、昭銘景行云。陳留蔡伯喈・范陽盧子幹・扶風馬日碑等、遠來奔喪、：（以下略）：

としており、碑文を引用するに当たって建碑の由來を説く部分と併せて古の隱逸と比した部分を引く。後者の引用は前者に比べやや多い。引用されている部分は「史料2」に網掛で示した。ここでも郭泰の徳の高さ、士大夫からの尊崇と併せ、前者同様古の隱逸と比す内容が引用されており、銘の引用部分もこれと重なる。兩者とも碑文を引用するに当たって巢父・許由らとの比較をおさえており、ここに蔡邕の碑文の中心があると認識されていたことが窺える。

なお、後者では「郭有道碑文」は胡廣「徵士法高卿碑」・蔡邕「伯夷叔齊碑」に續けて載せられている。法高卿（法眞）は范曄『後漢書』列傳七三逸民列傳に列せられており、隱逸と理解される人物の一人であるので、卷名と併せ見れば後者では「郭有道碑文」が隱逸を語るものと理解されていることは明白であり、さらにその藍本である梁『華林遍略』・北齊『修文殿御覽』においてもそのように位置づけられていた可能性は高い。ところで胡廣の碑文には

言滿天下、發成篇章。行充宇宙、動爲儀表。四海英儒、履義君子、企望來臻者、不可勝紀也。翻然鳳舉、匿耀遠逝。名不可得而聞、身難可得而觀。爲堯舜所知、不飲洗耳之水、超越青雲之上、德踰巢許之右。：（中略）：其辭曰：（中略）：彪童蒙、作世師。辭皇命、確不移。亞鴻崖、超由夷。垂英聲、揚景暉。

とあり、士大夫の尊崇を受けたこと、微を斷つて隱棲したことを踏まえ、洪涯・巢父・許由を越える人物と評價する内容を持つ。胡廣による法眞の評價の方

向性が蔡邕の郭泰に對する評價と似た構造を取っているながら、法眞が范曄『後漢書』に至るまで隱逸として位置づけられ續けたことは、後述する郭泰の評價の變質との比較の上で重要であろう。

26 皇甫謐の生涯については「丹羽父子一九七〇」が詳しい。またその本籍の位置、隱棲の場所などについては「趙以武一九九三」等がある。

27 唐代まで隱逸の代表格は皇甫謐であり、陶潛（陶淵明）が隱逸として評價されるようになるのはそれ以降であることは「佐竹保子二〇〇二」第一章第一節、「魏明安一九八五」參照。後者は宋代以降についても觸れる。

28 「丹羽父子一九七〇」、「佐竹保子二〇〇二」第一章第一節末尾參照。また「魏明安一九八二」にも同様の觀點が窺える。

29 六朝期の隱逸論にこうした側面があることは既に「王瑤一九八六」（初出一九五）にみえるが、皇甫謐がその先驅者であったことを初めて指摘したのは「石川忠久一九八八」と思われる。「丹羽父子一九七〇」はこの隱逸も參與する「體制」を指して「王法（の世界）」と言う。「佐竹保子二〇〇二」第一章はこうした皇甫謐の姿勢をその著作の形式から詳細に検討している。「魏明安一九八五」・「蒲秋征一九九二」にはこうした視角はなく、皇甫謐の思想を儒道雜糅ととらえ、司馬氏に協力しない姿勢をもつものと理解する。

30 「佐竹保子一九九五」。「佐竹保子二〇〇二」第一章も參照。

31 「拙稿二〇〇四」。

32 「丹羽父子一九七〇」。「蒲秋征一九九二」は泰始二三年（西曆二六六）七年）の間の作とする。

33 蒲秋征氏は『高士傳』に列せられたうち老子ら幾人かが下吏になった經驗をもつことを引きつつ、身は王公に屈せずというのは權勢を顧みず道義を樂しむという意味であろうとする。「蒲秋征一九九二」。

34 「石川忠久一九八八」。「蒲秋征一九九二」など中國の研究は特にこの點を重視する傾向にある。

35 「丹羽父子一九七〇」、「佐竹保子二〇〇二」第一章第一節參照。  
36 現行本『高士傳』（上中下三卷）には明古今逸史本、廣漢魏叢書本、四庫全書

本等があるが、蒲秋征氏によればこれらの内容は一致しており、同一の系統に属するという。「蒲秋征一九九二」。現行本について『四庫全書總目提要』卷五七史部十三傳記類一高士傳條は、『隋書』經籍志では六卷であった卷数が『舊唐書』以降の著録では十卷に増えており、さらに今は三卷になっていること、及び列せられた人数が南宋李石『續博物誌』では七二人とされているのが現行本では九六人まで増大していることを根據に、後代人による輯佚本としている。

『四庫提要』は、『太平御覽』卷五〇六・五〇九所引「皇甫子安高士傳」を、七一人の傳をまとめて挙げていることから『高士傳』全體を收録したものと見なし、そのため從來『太平御覽』所引のものをテキストとするのが一般的であった。これに對し魏明安氏は、現行本の序に「九十餘人」とみえ、かつ陳振孫『直齋書錄解題』も同じ人数を挙げること、現行本の内容が「釋勸論」等の内容と矛盾しないこと、『太平御覽』等所引の佚文では七二人を越える數の傳が確認できること、『續博物誌』が信賴に足りる書物ではないことを論じ、現行本が本來の姿をとどめていると主張する。「魏明安一九八二」參照。しかし魏氏の見解では卷數の變遷が十分に説明できず、また「佐竹保子二〇〇二」第一章注五九の指摘から明らかのように『續博物誌』の記述は梁陶弘景『眞誥』に依據していると思われる以上、『四庫提要』の見解は基本的に是認すべきであろう。後に示すように現行本の郭泰條が「泰」を全て「太」とつuckingしていることから、現行本が范書と對校して手を加えられたものであることはほぼ間違いない。これらの點も併せ考慮すれば、『太平御覽』等所引の佚文に七二人を超える數の傳が確認できるといふ魏氏の主張からは、むしろ氏の意圖とは逆に『太平御覽』の藍本となった『修文殿御覽』の段階で既に版本の混亂が始まっていた可能性が讀み取れるように思われる。

ここで『高士傳』序をみると、その前半が『太平御覽』卷五〇一總隱逸條所引「皇甫子安高士傳序」として引かれているが、歴代の高士傳の批判と自らの採録方針を記す後半部が脱落しており、また現行本序には存在しない一文がみえるなどの相違がある。上述のように現行本序は列せられた人数が「九十餘」とされている以上後代の改變が加えられている疑いが拭えない。周中孚はこ

した狀況を論じた上で現行本の内容と『太平御覽』所引本を比較し、現行本の増加分は嵇康『聖賢高士傳』・范曄『後漢書』からの増補であつて、序はこの増補が行われた際に七から九に改竄されたものと見なしている。同『鄭堂讀書記』卷二三史部傳記類二總錄高士傳條參照。管見の限り序には『太平御覽』所引のもの以外對照できるテキストが存在しないため、ここでは周中孚の理解を念頭に、さしあたり從來も檢討に用いられてきた現行本序を底とし、『太平御覽』所引佚文を對照して利用することとする。

37 「佐竹保子二〇〇二」第一章第三節、67～8頁參照。前注に記したように魏明安氏も同見解である。

38 「蒲秋征一九九二」。唐代にはこの論贊は『高士傳』から獨立した單行の書物として流布していたとみられる。現行本、『太平御覽』所引「皇甫子安高士傳」とも、現在は論贊が存在しない。なお明嘉靖刊黃省曾本に附されている論贊は黃省曾によるものであり、本來のものではない。

39 『太平御覽』卷五〇八逸民八條所引「皇甫子安高士傳」には、  
姜肱字伯淮、彭城廣戚人也。：（中略）：習學五經、兼明星緯、弟子自遠方至者三千餘人、聲重於時。

とあり、また同卷「皇甫子安高士傳」には、

姜岐字子平、漢陽上（郡）（邦）人也。：（中略）：治書・易・春秋、恬居守道、名重西州。：（中略）：遂隱、以畜蜂豕爲事、教授者滿於天下、營業者三百餘人。

とみえる（「邦」字は現行本により校訂）。兩條とも現行本卷下に存在する。

40 皇甫謐が批判した從來の逸民の傳記とは、具體的には序に言及される梁鴻『逸民傳』・蘇順『高士傳』の他、佚文の對照から嵇康『聖賢高士傳』も含まれると考えられることについては「石川忠久一九六八a」、「松浦崇一九九〇」參照。嵇康の書については本來列せられたという百十九人のうち六九人の名前が判明しており、さらにそのうち二人を除き佚文も確認されているが、郭泰はこの中には含まれていない。「戴明揚一九六二」。

41 陶潛（陶淵明）の『五柳先生傳』に『高士傳』の強い影響が見られることは

「石川忠久一九六八b」。「魏明安一九八二」も葛洪『抱朴子』外篇自敘篇の記述から葛洪が好んだ高士の傳が皇甫謐のものである可能性を指摘する。少なくとも東晉以降『高士傳』は一定の評價を受けていたと言えよう。

42 「大淵忍爾一九五六」[「同一九五八」][「同一九五九」]。

43 「吉川忠夫一九六四a」,「吉川忠夫一九六四b」。

44 「大淵忍爾一九五八」521頁,「葛洪年譜」参照。なお『四庫全書總目提要』卷一四六子部五六道家類抱朴子内外篇條は葛洪の羅浮山退居(西曆三三〇年、葛洪四八歳)後に成立したものとするが、大淵氏は自敘篇の内容、内篇の練丹術に關する記述からこの見方を否定し、建武元年完成は確實とする。

45 「大淵忍爾一九五六」参照。

46 實際には、『三國志』裴松之注引の諸書にも例があるように、時系列の混亂は魏晉期の史書においてもまま見られるのであるから、これをもって葛洪の執筆姿勢を非歴史的とまでは言い切れないであろう。なお内篇にも同様の論理的な「無自覺さ」、不整合があることは「大淵忍爾一九五六」・「福井文雅一九九九」。

47 君主權の強化と刑罰の重視については「陳抗生一九八二」。こうした觀點から賢人の登用も重視される。「許抗生一九八五」,「焦傳斌・李哲夫一九八一」。

48 以上の葛洪の政治思想は「吉川忠夫一九六四a」[「同b」]が詳論している。

49 「佐竹保子二〇〇二」第一章第三節参照。葛洪が皇甫謐『高士傳』を好んでいた可能性については先に觸れた。なお葛洪も伯夷・叔齊の行動を隱逸として模範とするに値しないと否定する。『抱朴子』外篇・逸民篇に以下のようにある。

仕人又曰、隱遁之士、則爲不臣、亦豈宜居君之地、食君之穀乎。逸民曰、何謂其然乎。…(中略)…由此論之、率土之濱、莫匪王臣、可知也。在朝者陳力以秉庶事、山林者脩德以厲貪濁、殊塗同歸、俱人臣也。王者無外、天下爲家、日月所照、雨露所及、皆其境也。安得懸虛空、浪咀流霞、而使之不居乎地、不食乎穀哉。…(中略)…昔夷齊不食周粟、鮑焦死於橋上、彼之經經、何足師表哉。

皇甫謐が政治から獨立した價値を持っていないとして彼らを否定したと考えられることと比べると、葛洪は王法の世界に屬する者としての隱逸というとなえ

方がより明確であり、自身が著述を通して政治・社會狀況に對し嚴しい批判を繰り返していることを考えれば、皇甫謐よりも隱逸を政治の場に近く置いていると言えるかも知れない。吉川忠夫氏が、逸民としての葛洪は自らに經世の才がないと韜晦することによって、實は現實世界に非常に近いところにいたと指摘しているのはこのことと關連するであろう。「吉川忠夫一九六四b」46頁。

50 以上の經緯は「大淵忍爾一九五八」[「葛洪年譜」]参照。

51 「吉川忠夫一九六四」49頁参照。

52 「岡村繁一九五五b」。

53 なおテキストは「楊明照一九九一」[「楊明照一九九七」]を底とし、適宜平津館叢書本・四部叢刊本と對校した。

54 「棲棲」は『論語』憲問にみえる微生畝と孔子の對話に典據がある。

55 微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與。無乃爲佞乎。孔子曰、非敢爲佞也。疾固也。

56 浮華の様相とその轉變は、三國魏から西晉への政治的展開との關わりから論じられてきた。專論としては「丹羽兌子一九六七」・「葭森健介一九八六」。

57 增淵龍夫氏は『資治通鑑』胡三省注を手掛かりに郭泰の名聲を「浮華・交會」的風潮からくる儒教的價値基準の名目化・外在化の一つの現れと指摘したが、この葛洪の議論と氏の見解が重なっていることには注目すべきである。「增淵龍夫一九六〇」。

58 「吉川忠夫一九六四b」,特に45頁。

59 葛洪が皇甫謐『高士傳』を好んでいた可能性については前述。

60 殷禮については『三國志』吳志七顧雍傳附邵傳裴松之注に、(殷)禮子基作通語曰、禮字德嗣、弱不好弄、潛識過人。少爲郡吏、年十九、守吳縣丞。孫權爲王、召除郎中。後與張溫俱使蜀、諸葛亮甚稱歎之。稍遷至零陵太守、卒官。

とみえ、同傳本文他に同書吳志二吳主傳裴松之注引「漢晉春秋」、吳志十二張溫傳、吳志十八趙達傳にその事績が散見する。『抱朴子』での字が「伯緒」となっており上引と異なるものの、零陵太守であったこと、占候を始めとする學識を



備え『三國志』本文では「名儒善士」と稱されていることから、楊明照氏や吉川忠夫氏は『抱朴子』の「殷伯緒」は殷禮のことと解している。「楊明照一九九七」474頁注(一)、「吉川忠夫一九六四a」65頁注⑩参照。

60 殷禮については前注参照。殷禮が張温と共に蜀に使いたのは黃武三年夏(西曆二二四)のことである。なお『三國志』呉志二呉主傳赤烏四年夏四月條裴松之注引「漢晉春秋」には全琮・朱然・諸葛謹・諸葛恪らの軍が淮南方面に出動したことについて「零陵太守殷禮」が孫權を諫めた記事があり(赤烏四年は西曆二四一)、この頃までは生存していたものと考えられる。諸葛恪については『三國志』呉志十九諸葛恪傳および同志十四孫登傳の記載に基づく。また周昭は『三國志』呉志七步騭傳、同志八薛綜傳にみえるが、永安年間に韋曜(韋昭)・薛瑩・華覈・梁廣らと共に國史の編纂に當たるも、孫休在位中、即ち永安年間のうちに下獄死したことが分かるにとどまる。彼らの政治的背景と三國呉の政治過程に關しては後論する。

61 (史料4) 諸葛恪の發言中に「街談巷議以爲辯」とあるが、これは楊明照氏も指摘するように張衡「西京賦」(『文選』卷二所收)に、

若其五縣(Ⅱ長陵・安陵・陽陵・武陵・平陵)遊麗辯論之士、街談巷議、彈射臧否。剖析毫釐、擘肌分理。所好生毛羽、所惡成創瘡。

とあることを踏まえてのものと考えられる。これは「西京賦」中の語り手「憑虛公子」が長安の繁榮ぶりを頌えて述べる言葉の一つで、「街談巷議」するのは筋道立てた議論を行う華やかな士人であり、彼らは人々の善惡について厳しく細かな議論を行って、好む者は盛んに稱揚し、憎む者は打ち叩いておとしめたとする。諸葛恪が郭泰と引き比べる郭解・原涉の二人のうち後者は「西京賦」上引文の直前にも登場しており、ここから見れば諸葛恪は「西京賦」に描かれたような毀譽褒貶を念頭においてこの言葉を使つたものと考えられることができる。

なお『文選』所引「西京賦」李善注は薛綜注を元としているが、『三國志』呉志八薛綜傳には、薛綜の著作に『二京解』があり世上に流布したとある。薛綜注張衡「二京賦」(「西京賦」・「東京賦」)と『二京解』については姚振宗『隋書經籍志考證』卷四〇集部總集類雜賦注本條参照。薛綜の孫氏政權下での活動年

代は建安年間末(西曆二一五前後)から赤烏六年(西曆二四三)であり諸葛恪にやや先行するから、恪が「西京賦」に親しんでいたとしても不自然ではない。

62 (史料2) 蔡邕「郭有道碑文」一段落目の19)として破線を引いた部分。

爾乃潛隱衡門、收朋勸誨、童蒙賴焉、用祛其蔽。

63 「佐竹保子二〇〇二」第一章第二節、特に45〜7頁参照。「客傲」は『晉書』卷七二郭璞傳所收。

64 『晉書』卷七二郭璞傳所收の「客傲」に、

乃者地維中絕、乾光墜采、皇運暫廻、廓祚淮海。

とあり、西晉崩壊後、江左において司馬睿が即位しこの地域を清めたと述べられている。郭璞は王敦の二度目の叛亂(太寧二年、西曆三二四)の際に死亡しているから、「客傲」は東晉成立(西曆三二七)から死去までの七年の間に書かれたものと考えられる。なお『晉書』は「客傲」を永昌元年(西曆三二二)の記事の前に配列している。

65 「佐竹保子一九九五」。氏は夏侯湛「抵疑」と束皙「玄居釋」を分析し、これが皇甫謐の見解を充分意識しつつも、そこから逸脱する内容を持つものであることを論じている。氏も述べるように、夏侯湛・束皙と同時期に學者として西晉武帝に重んじられた摯虞も皇甫謐の弟子であったのであり、皇甫謐―摯虞の學問が西晉期に占める位置は無視しえぬものだったと考えられる。

66 「樓宇烈一九九三」、特にその第二部分参照。また「中林史朗一九九三」、「中林史朗／渡邊義浩一九九三」123頁。

67 「帝紀」を核とする體例の成立といわゆる「古史」については「拙稿二〇〇〇a」参照。白壽彝氏は、袁宏『後漢紀』は傳を類別にまとめて織り込むことが多く、編年體斷代史の著述の幅を広げたと同時にその特性も弱めたと指摘する。「白壽彝一九六四」。

68 原文「穎」、「陳慶元一九九五」62頁注(三)により改める。

69 考證は「陳慶元一九九五」62〜65頁による。

70 例えば劉裕も宋公に封じられた際(義熙十四年、西曆四一八)隱逸の戴顓らを徴している。『宋書』卷九三隱逸傳・戴顓傳参照。こうした事例として最もよ



く知られているのは、桓玄が東晉安帝から禪讓を受ける（元興二年、西暦四〇三）に先立ち、皇甫謐の六世の孫・皇甫希之を隱逸に仕立てて徴し、希之にわざと斷らせた件であろう。『晉書』卷九九桓玄傳、及び「王瑤一九八六」参照。

71 『周禮』考工記序に「或坐而論道」とあり、鄭玄はここに「論道、謂謀慮治國之政令也」と注している。なお偽古文とされる『尚書』周官にも「立太師・太傅・太保、茲惟三公、論道經邦、變理陰陽」とある。

72 「茂木信之一九九四」。また「王瑤一九八六」。

73 「星川清孝一九五一」、「星川清孝一九五二」。

74 例えば『後漢紀』卷四光武皇帝紀建武四年春正月條「袁宏曰」には「自三代已前、君臣穆然、唱和無間、故可以觀矣。五霸・秦漢、其道參差、…（以下略）」とあり、また同卷八光武皇帝紀建武三十二年二月條「袁宏曰」には「故自黃帝・堯・舜、至于三代、各一封禪、…（以下略）」とある。

75 「白壽彝一九六四」、特に第五節「袁宏的『名教』觀點」参照。

76 『後漢紀』卷二二孝桓皇帝紀下延熹九年九月條「袁宏曰」に、  
是以古先哲王、必節順群風而導物、爲流之塗而各使自盡其業。…（中略）

：中古陵遲、斯道替矣。

とあり、古の聖王によって行われた正しいあり方が「中古」に衰え、風俗が移り変わったことになった結果、

春秋之時、禮學征伐、霸者迭興、以義相持。故道德仁義之風、往往不絶、雖文辭音制、漸相祖習、然憲章軌儀、先王之餘也。戰國縱橫、疆弱相陵、臣主側席、憂在危亡、無不曠日持久、以延名業之士、而折節吐誠、以招救溺之資。故有開一說而饗執珪、起徒步而登卿相、而遊說之風盛矣。

とあるように、春秋にはまだ先王の餘風があったものの、戰國には遊說の風が盛んになったという。

袁宏はこうした「中古」の風に一長一短があることを明らかにした後で、古之爲政、必置三公以論道德、樹六卿以議庶事、百官箴規諷諫、閭閻講肆、以修明業。於是觀行於鄉閭、察議於親鄰、舉禮於朝廷、考績於所蒞。…（中略）：野不議朝、處不談務、少不論長、賤不辯貴、先王之教也。…（中略）

：苟失斯道、庶人干政、權移於下、物競所能、人輕其死、所以亂也。至乃夏馥毀形以免死、袁閔滅禮以自全、豈不哀哉。

と「古の政」について述べ、それが失われ盡くした結果として黨錮事件の際の夏馥や袁閔の事例に言及する。前述した「三代」と「春秋以降」の對比を念頭に置けば、「先王之教」が行われていた「古」が三代を指していることは疑いなく、同時に袁宏にとってその三代の世が理想であることもまた間違いないだろう。

77 『論語』雍也に左のようにみえる。

子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

78 魏晉南北朝時代に人物を類別する發想が廣く見られたことはよく知られているが、それを明確に示した初期の文獻として注目されてきたのが劉劭『人物志』である。岡村繁氏は『人物志』における類別の發想について、劉劭は人間の資質（質）を本來多種多様なものととらえ、あらゆる資質が止揚された「中和の質」を備える聖人を頂點に各人がそれぞれ特徴的な資質をもち、それによって定まる才能である「材」と、それに見合う任務である「任」をもっており、この材・任の全體像は『周禮』になぞらえて體系化されていることを指摘する。

「岡村繁一九八三」。同論文第四節・第五節によれば、岡村氏はこうした劉劭の姿勢を「人格多元論」と呼ぶが、これが人物の「資」を極めて固定的・宿命的にとらえているため必然的に「中和の質」を備えた聖人による他律的な人物評價に頼るほかない形になっており、ここに九品官人法を再検討する氣運を先取りし、「聖人」としての魏の皇帝を絶對的支配者にいたたく中央集權の官僚體系の確立に理論的な基盤を提供しようとした劉劭の思惑が讀み取れるとしている。岡村氏が同論文第二節および第五節の末尾で述べている如く、氏はかつて『人物志』を後漢末以來の清議の理論的集大成、「極めて高い識見を以て綴られた人物鑒識理論の專著」として注目していた。「岡村繁一九五二」。上記論文序言と「岡村繁一九八三」第一節の文章に共通する部分が見られることから考えれば後者は前者の理解を修正したものと思し得るが、氏が検討を進めるにつれ右のような結論に至ったということは重視すべきであろう。劉劭が三國魏明帝の

もとでよくその意圖に應ずることのできた「實務的立法家」であり、夏侯恵と近く、「最少限その役割を客觀的に評價する次元の問題としては」曹宣派といえることについては「多田狷介一九八〇」。岡村氏や多田氏は『人物志』を三國魏明帝期後半の青龍二年（西暦二三四）頃に概ね完成していたものとしているが、この頃『周禮』を意識しつつ人物評價を束ねる存在として「聖人」を設定する構想が生まれていたことは、本論にて論ずる郭泰評價の變化と照らし合わせれば興味深い。なお郭泰評價との関連で言えば、『人物志』が『周禮』になぞらえて人格とその任務を體系化した上で比定對象としての先人を設定していることも注目すべきであろう。例えば「法家」の材は司寇の任であり、その代表的人物としては管仲と商鞅が挙げられている。

これに對し「渡邊義浩二〇〇三」もこうした『人物志』の性格を指摘するが、しかし「岡村繁一九五二」を引きつつこれを曹操の「唯才主義」に對し「名士」の側が自らの人物評價を理論化した結果として生まれたものと位置づけているようである。氏が人物評價を「名士」の自律性を支える中核と理解し、三國魏の國家權力強化に協力する方向性とは異なる、「黨人」の流れを汲む「名士」に共通してみられる本来の方向性であったと捉えていることを考えれば、先に述べた岡村氏の研究の展開とはいささか矛盾する位置付けであるように思われる。曹魏政權と「名士」の關係、および「名士」の取った二つの方向性については「渡邊義浩二〇〇一a」。

79 後掲の「史料6」「史料7」「史料8」にもみられるように、こうした別傳と思われる引書名としては「郭林宗別傳」の他、「郭泰（太）別傳」「泰別傳」「郭子別傳」「郭林宗傳」という名稱が出現する。書名の異同に關して、『三國志』裴松之注にみえる「郭林宗傳」について侯康はこれを別傳と同一とするが（同「補後漢書藝文志」卷三郭泰別傳條參照）、一方姚振宗は『太平御覽』經史圖書綱目では「郭林宗別傳」と「郭泰別傳」が別に立項されており、また本文中に「郭氏別傳」が登場することを根據として、これらが本来別書である可能性を示唆している（同「後漢藝文志」卷二郭泰別傳條參照）。

これら各書名が實際に別書である可能性は確かに存在する。しかしながら、同

じ「郭林宗別傳」の記事とされており、さらに本来『修文殿御覽』の同じ條から轉載されたと推測される『太平御覽』卷四一四孝下條所引「郭林宗別傳」と『藝文類聚』卷二〇孝條所引「郭林宗別傳」同士でさえ、本来同一の記事であったと斷言するのが躊躇われるほどの相違が確認できるのであり（史料6）B）參照）、こうした佚文の比較からこの問題に結論を下すのは非常に困難と言わざるを得ない。従ってここでは別書である可能性を念頭に置きつつも、さしあたりこれら別傳類を一つのジャンルとしてまとめて取り扱うこととし、『郭林宗別傳』佚文と總稱することにする。

なお、『郭林宗別傳』はいずれの書名の形でも隋志等に著録されておらず、成立年代を明らかにするのは難しい。『三國志』裴松之注に「郭林宗傳」が引用されていることから見れば范曄『後漢書』の成立した五世紀前半に『郭林宗別傳』が存在していたのはほぼ確実なのであるが、別傳の盛行が西晉期以降とされることに鑑み、ここではそれより遡り、西晉の間に成立したものと假定しておく。

80 同「補後漢書藝文志」卷三郭泰別傳條參照。

81 このことは郭泰の傳記が記述を變化させず安定して繼承されてきたことを意味していない。郭泰の歿年をめぐる問題、および10)吾觀乾象や（サ）袁奉高と黃叔度の事例は先に觸れたが、これ以外にも6)や25)、また本傳以外では（キ）見仇香において、范曄『後漢書』と袁宏『後漢紀』の間であつても史料系統の違いと思われる相違が確認できる。葛洪や范曄が指摘するように、郭泰の傳記は様々な「附益増張」を経験したのであろう。

82 姚信の事績は『三國志』呉志十三陸遜傳、同志十四孫和傳、同志十六陸凱傳に散見する。また同志十二陸績傳裴松之注には「姚信集」から陸續の娘で張温の弟・張白に嫁いだ鬱生の節義を顯彰した姚信の上表が採録されている。『隋書』經籍志には「周易」姚信注が著録されている他、梁代にはここに佚文を引いた『士緯新書』をはじめ『听天論』・『姚信集』が存在していたと記録されており、易や天文に關する知見を有していたことが知れる。こうした姚信の事績と著作については盧弼『三國志集解』卷五七陸續傳裴松之注引「姚信集」條に簡要なまとめがある。なお姚振宗は陸遜傳の記述から顧承・顧譚と共に姚信も陸遜の

外甥であつた可能性を示唆しているが（同『三國藝文志』卷一姚信周易注條案語參照）、假にそうならば陸績は陸遜の族父に當たるので上述の鬱生は姚信にとつても母方の縁者ということになる。鬱生が嫁いですぐ張温は失脚し、張白も共に官を追われ配流先で死去しているのだが、張温は暨艶と同時期、黃武三年末から四年（西曆二二四く五）に失脚したと考えられるので、姚信の活動時期は赤烏年間末よりももう少し遡り得るかも知れない。

83 「湯用形一九五七」。「岡村繁一九五二」、「岡村繁一九八三」も同見解である。

84 時代・背景は異なるが參考迄に『漢書』卷二十古今人表をみると、季札は「上中（仁人）」に、趙武は「中中」に列せられており、「上上（聖人）」とはされていない。聖人とされるのは、三皇五帝の他、殷の湯、周の文王・武王、周公、そして孔子だけである。

85 「田餘慶一九九一」、特に296頁第一節注①の判斷による。

86 以上の経緯については「滿田剛二〇〇四」。

87 『三國志』吳志十二陸瑁傳に、

陸瑁字子璋、丞相（陸）遜弟也。少好學篤義。陳國陳融・陳留濮陽逸・沛郡蔣纂・廣陵袁迪等、皆單貧有志、就瑁遊處、瑁割少分甘、與同豐約。……（中略）……州郡辟舉、皆不就。

とみえる。なお學業を好み、私利を追わず清貧な生活を送るというこうした姿勢は、「逸民的人士」の特徴として指摘されるものでもある。「都築晶子一九七八」參照。陸瑁はこれより八年ほど後、嘉禾元年に公車にて徵され、議郎・選曹尚書に任ぜられている。

88 陸瑁は「四姓」の一つとして知られる呉郡の大姓陸氏の出身であるが、彼ら江東の大姓と孫氏政權の關係が黃武年間中のこの時期においても依然緊張を孕んだものであつたことについては「田餘慶一九九二」、「渡邊義浩一九九九」・「渡邊義浩二〇〇〇」等多くの論者が指摘するところである。田氏・渡邊氏とも孫策が陸遜・陸瑁兄弟の從祖父である廬江太守陸康を攻撃しその宗族の多くを殺害したことがその後の孫氏と陸氏、さらには江東の大姓と孫氏政權の緊張關係を決定づけたとするが、田氏は顧雍が丞相となり陸遜が呂蒙の歿後軍權を握つ

たことをもつて深刻な狀況が根本的に解消されたと見なすのに對し、渡邊氏は孫權の後繼をめぐつて皇太子孫和と魯王孫霸の間に起きたいわゆる「二宮事件」で皇太子派として多くの江東出身者が彈壓を受けたこと、またそれに續く陸遜の失脚・憤死を根據に緊張關係がその後も持續したとする。渡邊氏は士人同士の地域的な對立よりも、北來士人も含めて構成されるという孫吳「名士」社會の方を注視しており、これと君主權力の間の角逐に貴族制の原型を見る。

なお張温も呉郡の「四姓」の一つに數えられる大姓の出身であり、北來士人の重鎮であつた張昭や劉基から高く評價されていた。田氏は暨艶・張温らの嚴格な適格審査の標的が主に三署郎であつたことを重視し、郎官の出身の分析からこれが主として江東出身者であり、暨艶の活動と失脚が孫氏政權の「江東化」の上で重要な一段階となつたとする。「田餘慶一九九一」、特に第二節「暨艶案與吳四姓」參照。これに對し渡邊氏は張温が張昭から高く評價されたことを重視し、張温・暨艶が「名士」の自律的秩序に基づいて人事を強行しようとしたのに對し、陸瑁らはこうした「ごり押し」に批判的な立場から君主權力との協調の道を探っていたとしている。「渡邊義浩二〇〇〇」、特にその「二、孫吳「名士」社會」參照。田氏は暨艶・張温らが江東出身であるにもかかわらずこうした人事を行つた要因について、彼らが後漢末の清議に影響を受けており、張温は特にその江東における首領となつていたことを挙げ、彼らがそうした立場から人事の綱紀肅清を強行したことが政治的混亂を招き、失脚に至ることになつたとしているのであつて（「田餘慶一九九一」第三節「張温與暨艶」、また「田餘慶二〇〇四」所收同上論文後添の「作者跋語」參照）、こうした面から見れば兩者の理解には通底するものがあるようにも思われる。いずれにせよ當時陸氏は孫氏政權と微妙な關係にあつたのであり、孫策以來度々江東の聲望ある士人が殺害・流徙されていることを考えれば、いかに私信とはいえ陸瑁も「交際」と人物識鑒能力に注目して聖人に比される郭泰を例に擧げるような危險は冒さなかつたであろう。

89 余嘉錫は當該佚文について「汝南先賢傳乃言其知人過於林宗、殆不免阿私鄉曲之言也」と述べる。余嘉錫『世說新語箋疏』賞譽第八（上海古籍出版社版）（修

訂本、一九九三）上巻416頁注（二）参照。

90 「渡邊義浩二〇〇三」。

91 「丹羽允子一九七二」第四節、特に10～11頁参照。氏は蔡邕が清流派の大官として隠然たる勢力を有していたこと、そして彼自身従前の清流派の交友関係を殊更大切にすることで人々に清流派大官という印象を強調する意圖を持っていたことを示唆しており、王允が董卓を排除した後まず蔡邕を處刑したのはそうした勢力を有するが故とする。

92 「川勝義雄一九六七」27頁。また「都築晶子一九七八」参照。

93 川勝氏は實際にこの史料を引用し、「帝國崩壞の必然性を認識するか否かは、かれらの（＝清議の徒と逸民の人士の、筆者補）政治への姿勢に影響を與えることはいうまでもない。清議の徒と逸民の人士の間に態度の差を生じた契機の一つは、このような認識の有無にあったと想定することができるかもしれない。」と述べる。「川勝義雄一九六七」26～7頁参照。しかしながら氏はこう指摘した後で郭泰のもつ逸民的傾向を論じ、兩者の間に一連の繋がりを認めている。この理解は「川勝義雄一九七〇」の段階でも變わらないと考えられる。

94 この佚文について周天游氏は、⑦范曄『後漢書』と同文であり③謝承『後漢書』佚文とは異なっていることから范書からの誤引の可能性を疑っている。「周天游一九八六」上巻84頁参照。この佚文は他に對照しうる事例がなく、『北堂書鈔』の傳承の過程を考えれば、范書からの誤引か、あるいは引文の内容を范書によって書き改めたかした可能性は排除できないが、しかし④『海内先賢行狀』・⑤皇甫謐『高士傳』・⑥袁宏『後漢紀』ではまず③の内容を舉げてから黄瓊と徐穉の具體例を述べるという構成になっていることから見て、謝承『後漢書』においても同様であった可能性を考慮し検討の對象に加えた。區別のためこれには黒丸の番號を用いる。『北堂書鈔』の傳承過程と版本問題については「呉樹平一九八八b」、「鈴木啓造一九八〇」参照。

95 ③が眞實謝承『後漢書』佚文である場合、現在残っている范書の記述はこれを引き寫したものであることが考えられるので、問題となる(ハ)部分についてもこの段階で存在していた可能性を排除できない。ただし、皇甫謐『高士傳』に

は徐穉、郭泰のどちらにもこの逸話は見えていないのだから、謝承『後漢書』の段階で今范書にあるような形になっていた可能性は低いものと考えられる。

96 應劭は①に續けて按語をつけているが、そこでも問題とされているのは徐穉子の弔問の仕方である。

97 注54、および第四章第二節の検討を参照。

98 「拙稿二〇〇b」。

99 9) 辟不應では郭泰を辟召した司徒が黄瓊になっている。この記述は范書以前には見られないが、基本的な事實關係は變化しにくいという今までの検討から得られた推論をもとにすれば、(本項の史料をもとに補われた可能性もあるが)これは事實を傳えている可能性がある。なお黄瓊は、范書本傳及び本紀七桓帝紀によれば、司徒在任は永興元年～二年(西暦一五三～四)、死亡は延熹七年(西暦一六四)とされており、この點で矛盾はない。また(ハ)で使者となる茅容(茅季瑋)が謝承『後漢書』の段階から郭泰の引き立てで徳を完成させたことになつており(史料6)B)茅容参照)、こうした繋がりが背景に實在したが、または史書編纂者に意識されていたと考えられる。假にそうだとするならば、黄瓊の葬禮の場に郭泰が參列していたのは事實であり、本項のような検討は無意味ではないかと思われるかも知れない。しかし佚文としてではなく、案語を含めた完結した文章として一應殘されている現行本『風俗通』において同じモティーフの説話が完全に郭泰抜きで語られていること、そしてそれが皇甫謐『高士傳』においても同様であり、謝承『後漢書』を始めとする西晋までの佚文でも郭泰が登場した形跡がないことを考えれば、郭泰が徐穉と對比される主體として注目され、重要性を見出されたのが東晋以降であることは間違いない、言葉を変えれば後漢末において郭泰が袁宏『後漢紀』・范曄『後漢書』の該當條で示されるような重要性をもつ存在と見なされていなかったことは明らかである。

「川勝義雄一九六七」、特にその第一節、27～8頁参照。

「拙稿二〇〇二」。

102 101 100 『人物志』の性格については先述。なお「津田資久二〇〇四」は『周禮』重視に象徴される「類」と序列化の思想の高まりを論じる中で「拙稿二〇〇二」



## 参考文献一覽

〔凡例〕\*は右記著書所收の論文・著書を示す。\*は、右記\*印著書所收の論文を示す。

### 〔日文〕

石川忠久 一九六八 a

石川忠久 一九六八 b

石本裕之 二〇〇五

\*石本裕之 一九九〇

伊藤敏雄 一九八六

大淵忍爾 一九九一

\*大淵忍爾 一九六四

\*大淵忍爾 一九五六

\*大淵忍爾 一九五八

\*大淵忍爾 一九五九

岡村繁 一九五二

岡村繁 一九五五 a

岡村繁 一九五五 b

岡村繁 一九六〇

岡村繁 一九七六

岡村繁 一九八三

「隠士皇甫謐論」、『漢魏文化』7。

「史家としての陶淵明」、『櫻美林大學中國文學論叢』1。

『莊子』の中の孔子、響文社。

『莊子』中の孔子説話の類型について

「正始の政變をめぐって―曹爽政權の人的構成を中心に―」、野口鐵郎編『中國史における亂の構圖』（筑波大學創立十周年記念東洋史論集）、雄山閣出版所收。

『初期の道教』、創文社。

『道教史の研究』、岡山大學共濟會書籍部。

「論衡・潛夫論と抱朴子」

「葛洪傳」

「鮑靚傳」

「人物志の流傳について―支那中古人物論の本質的解明への一試論―」、『哲學』（廣島哲學會）3。

「郭泰・許劭の人物評論」、『東方學』10。

「郭泰の生涯とその爲人」、『支那學研究』（廣島支那學會）13

「後漢末期の評論的氣風について」、『名古屋大學文學部研究論集』22。

「蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢」、『日本中國學會報』28。

「劉邵『人物志』における人物論の構想とその意圖」、金谷治編『中國における人間性の探究』、創文社所收。

に觸れ、全國的な「番付」が存在する可能性は否定できないとして批判した。氏の批判の正確な内容を筆者はいまだ十分に汲み取れていないのだが、假に徐幹『中論』譴交篇・『意林』卷五所引「典論」等に記される交際の風を全國的な「番付」と結びつけて理解しておられるのだとしたら、そうした理解のあり方が果たして妥當なのか、というところ自體に筆者の關心がある、と答えざるほかない。「増淵龍夫一九六〇」が交際の風の性格と清流士大夫の全國的團結との關係を問うていたことについては「拙稿二〇〇四」にて論じた。本論の検討は、「類」と序列化の思想の高まりを貴族制の形成との關わりにおいてどのように評價すべきにも關わるものと考ええる。

103 州大中正の設置とその意義に關する研究は多数存在するが、特に曹爽の政權と司馬懿による州大中正の設置については、「葭森健介一九八六」、「伊藤敏雄一九八六」、また「渡邊義浩二〇〇一b」を参照。

104 『三國志』吳志十二張温傳の、孫權が張温を處斷した際下した令に

又殷禮者、本占候召、而温先後乞將到蜀、扇揚異國、爲之譚論。又禮之還、當親本職、而令守尚書戶曹郎、如此署置、在温而已。

とみえる。

105 これに比べると許劭は偏った人物評價を行ったという方向で語られることが多いように思われる。先に引いた姚信『士緯』佚文でもそうであったが、他にも例えば『三國志』蜀志七龐統傳裴松之注に引く「蔣濟萬機論」には

許子將褒貶不平、以拔樊子昭而抑許文休（許靖）。劉曄曰、子昭拔自賈豎、年至耳順、退能守靜、進能不苟。濟答曰、子昭誠自長幼完潔、然觀其函齒

牙、樹頰脰、吐唇吻、自非文休敵也。

とみえる。蔣濟『萬機論』が『人物志』や姚信『士緯』などと並んで人物評價を論じた書物であることは「岡村繁一九八三」参照。

106 「川勝義雄一九六四」、「川勝義雄一九七〇」。



川勝義雄 一九八二

\* 川勝義雄 一九六七

\* 川勝義雄 一九七〇

川勝義雄 一九九三

\* 川勝義雄 一九六四

小林春樹 一九八四

佐竹保子 一九九五

佐竹保子 二〇〇二

鈴木啓造 一九八〇

角谷常子 一九九一

多田狷介 一九九九

\* 多田狷介 一九八〇

津田資久 二〇〇四

都築晶子 一九七八

内藤湖南 一九六九

\* 内藤湖南 一九四七

中林史朗 一九九三

中林史朗／渡邊義浩 一九九九

永田英正編 一九九四

丹羽兌子 一九六七

『六朝貴族制社會の研究』、岩波書店。

「漢末のレジスタンス運動」

「貴族制社會の成立」

『中國人の歴史意識』（増補改訂版）、平凡社ライブラリ

一三三九、平凡社。

「六朝貴族制」

『蔡邕』獨斷』小考——とくにその版本について、『史滴』

5。

「西晋の出處論——皇甫謐に續く夏侯湛と束皙の「設論」——、『日本中國學會報』47。

『西晋文學論——玄學の影と形似の曙——』、汲古書院。

「北堂書鈔の刊本および寫本について」、早稻田大學教育

學部『學術研究』地理學・歴史學・社會科學編29。

「秦漢時代の石刻史料」、『古代文化』43・9。

『漢魏晉史の研究』、汲古書院。

「劉劭とその考課法について」

「漢魏交代期における『皇覽』の編纂」、『東方學』108。

「逸民的人士」小論、『名古屋大學文學部三十周年記念論集』。

『支那中古の文化』、『内藤湖南全集』第十卷、筑摩書房

所收。

『中國中古の文化』、弘文堂書房。

「袁宏管見く政治的動靜と『後漢紀』く」、『大東文化大學漢學會誌』32。

『後漢紀』、中國古典新書續編22、明德出版社。

『漢代石刻集成』、同朋舎出版。

「いわゆる竹林七賢について」、『史林』50・4。

丹羽兌子 一九七〇

丹羽兌子 一九七二

丹羽兌子 一九七三

福井文雅 一九九九

福井佳夫 一九八八

星川清孝 一九五一

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

星川清孝 一九五二

「皇甫謐と高士傳——隱逸者の生涯——」、『名古屋大學文學部研究論集』史學17。

「蔡邕傳おぼえがき」、『名古屋大學文學部研究論集』史學19。

「文人の原型——蔡邕——」、『書論』2。

「『抱朴子』葛洪の詭弁」、『東方學』97。

「『碑』の文體について——蔡邕の作品を中心に——」、『東京大學文學部紀要』22・2。

「晉代に於ける「風流」の理念の成立過程について」正、

『茨城大學文理學部紀要・人文科學』1。

「晉代に於ける「風流」の理念の成立過程について」續、

『茨城大學文理學部紀要・人文科學』2。

『新版 中國古代の社會と國家』、岩波書店。

「後漢黨錮事件の史評について」

「逸民傳・高士傳を通して見た隱逸思想の展開」（中）、

『福岡大學人文論叢』21・4。

「韋昭『吳書』について」、『創價大學人文論集』16。

「文人と隱逸」、荒井健編『中華文人の生活』、平凡社所收。

「抱朴子の世界」上、『史林』47・5。

「抱朴子の世界」下、『史林』47・6。

「魏晉革命前夜の政界——曹爽政權と州大中正設置問題——

『史學雜誌』95・1。

『後漢國家の支配と儒教』、雄山閣出版。

『三國政權の構造と「名士」』、汲古書院。

「孫吳政權の形成」

「孫吳政權の展開」

「寛」治から「猛」政へ」

「浮き草の貴公子 何晏」

「史」の自立——魏晉期における別傳の盛行を中心として——

拙稿 二〇〇〇 a 「後漢時代關係史料の再検討―先行研究の検討を中心に―」、『史料批判研究』第4號。

拙稿 二〇〇〇 b 「袁宏『後漢紀』・范曄『後漢書』史料の成立過程について―劉平・趙孝の記事を中心に―」、『史料批判研究』第5號。

拙稿 二〇〇二 「黨錮の「名士」再考―貴族制成立過程の再検討のために―」、『史學雜誌』111-10。

拙稿 二〇〇四 「清流・濁流と「名士」―貴族制成立過程の研究をめぐって―」、『中國史學』14。

## 〔中文〕

王利器 一九八三 『鄭康成年譜』、齊魯書社。

王瑤 一九八六 「論希企隱逸之風」、同『中古文學史論』所收、北京大學出版社。初出一九五。

※右論文日本語譯は石川忠久・松岡榮志譯「隱逸を願う風潮について」、同譯「中國の文人―竹林の七賢」とその時代」、大修館書店、一九九一 所收。

魏明安 一九八二 「皇甫謐《高士傳》初探」、『蘭州大學學報』〔社會科學版〕一九八二―四。

魏明安 一九八五 「魏晉思潮與皇甫謐」、『蘭州大學學報』〔社會科學版〕一九八五―一。

許抗生 一九八五 「葛洪社會政治思想探析」、『學術月刊』一九八五―二。

吳樹平 一九八八 a 『秦漢文獻研究』、齊魯書社。

\*吳樹平 一九八八 b 「四庫館臣輯本《東觀漢記》與《北堂書鈔》」

周天游 一九八六 『八家後漢書輯注』上・下、上海古籍出版社。

焦傳斌・李哲夫 一九八八 「抱朴子・外篇」中的人才學探微」、『社會科學輯刊』〔遼寧社會科學學院〕一九八八―一五。

戴明揚 一九六二 「嵇康集校注」、人民文學出版社。

趙以武 一九九三 「皇甫謐生平新探」、『西北師大學報』〔社會科學版〕一九九三―一。

陳慶元 一九九五 『沈約集校箋』、浙江古籍出版社。

陳抗生 一九八二 「葛洪的法律思想―《抱朴子・用刑》述評」、『法律史論叢』第二卷、中國社會科學出版社。

田餘慶 二〇〇四 『秦漢魏晉史探微』（重訂本）、中華書局。

\*田餘慶 一九九一 「暨案及相關問題―再論孫吳政權的江東化」

\*田餘慶 一九九二 「孫吳建國的進路―論孫吳政權的江東化」

鄧安生 二〇〇二 『蔡邕集編年校注』、河北教育出版社。

湯用彤 二〇〇一 （湯一介等導讀）『魏晉玄學論稿』、上海古籍出版社。

\*湯用彤 一九五七 「讀《人物志》」

白壽彝 一九九九 『中國史學史論集』、中華書局。

\*白壽彝 一九六四 「陳壽、袁宏和范曄」

蒲秋征 一九九二 「皇甫謐《高士傳》述略」、『西北師大學報』〔社會科學版〕一九九二―一。

楊明照 一九九一 『抱朴子外篇校箋』上、新編諸子集成第一輯、中華書局。

楊明照 一九九七 『抱朴子外篇校箋』下、新編諸子集成第一輯、中華書局。

勞幹 一九八五 『漢晉西陲木簡新考』、中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之二十七。

樓宇烈 一九九三 「袁宏與東晉玄學」、『國學研究』1。

## 【付記】

\*本稿は瀬戸内魏晉南北朝史研究会、魏書研究会等での発表を踏まえてまとめたものである。またこれ以外の場でも、多くの方からご指導ご指摘を頂いた。発表の機会を與えてくださった主催者の皆様、ならびに、指導ご指摘を賜った皆様に、この場を借りて深く御禮申し上げる。

\*本稿は平成十九年度科学研究費補助金（研究代表者・伊藤敏雄）の成果の一部である。

\*漢字は、JIS第二水準までに正字が含まれるものについては原則正字としたが、含まれないものについては意味が変化しない限りにおいて通用の字體で代用した。第三・第四水準に正字が含まれるものについても可能な限り正字としたが、作業上の制約により徹底していないことをお詫び申し上げます。

〔史料1〕 范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳

1) 〔出身〕

郭太字林宗、太原界休人也。

郭太、字は林宗、太原郡界休縣の人である。

2) 〔貧〕

家世貧賤。

家は代々貧しく、身分も低かった。

3) 〔斗筭之役〕

早孤、母欲使給事縣廷。林宗曰、大丈夫焉能處斗筭之役乎。遂辭。

早くに父親を亡くし、母親は(林宗を)縣の役所に勤めさせようとした。林宗は言った、「いっぱしの男が、どうしてつまらない役目に

居ることができようか!」。そのまま(謝絶し)立ち去った。

4) 〔屈伯彦學〕

就成阜屈伯彦學、三年業畢、

成阜の屈伯彦の學舎に行き、三年で學業を終えた。

5) 〔學問〕

博通墳籍。善談論、

いにしえの書物に通曉し、議論に優れ、

6) 〔容貌①〕

美音制。

聲や姿ふるまいは美しかった。

7) 〔見李膺〕

乃游於洛陽。始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善、於是名震京師。

8) 〔神仙〕

後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯與李膺同舟而濟、

衆賓望之、以爲神仙焉。

後に郷里に歸ることになり、衣冠を身につけた學者たちは黄河のほとりまで見送ったが、その車は數千兩にもなった。林宗はただ李膺とだけ一緒に船に乗り、黄河を渡ったが、たくさんの賓客たちはこれを望んで、神仙とみなした。

9) 〔辟不應〕

\*途中に10)〔吾觀乾象〕を含む、次項参照

司徒黃瓊辟、太常趙典舉有道。…(10)〔吾觀乾象〕…遂並不應。

司徒の黃瓊が辟し、太常の趙典が有道に舉げた。…(10)〔吾觀乾象〕…そのまま兩方とも應じなかった。

10) 〔吾觀乾象〕

\*前項9)〔辟不應〕内に挿入されている

或勸林宗仕進者、對曰、吾夜觀乾象、晝察人事、天之所廢、不可支也。

ある人が林宗に仕えて官吏となることを勧めたが、これに林宗は答えていった、「私は夜天文を観察し、晝に人間世界の動きを調べているが、天が退けようとしているものは、支えることはできないものだ」…左傳定公元年、杜預注の解釋では支えるべきでないの含意あり」。

11) 【知人①】

性明知人、好獎訓士類。

人となりを明らかに理解（し識別）する性格で、人士を勵まし助けることを好んだ。

12) 【容貌②】

身長八尺、容貌魁偉、褒衣博帶、

身の丈八尺、大きく立派な風采であった。儒者の着るゆったりとした衣、幅廣の帶を身につけ、

13) 【周遊】

周遊郡國。

各地を經巡った。

14) 【林宗巾】

嘗於陳梁間行遇雨、巾一角墊、時人乃故折巾一角、以爲林宗巾。其見慕皆如此。

かつて、陳と梁の間を行く途中雨中に遭い、かぶりものの一角がへこんで垂れ下がった。そこで時の人々はわざと巾の一角を折って、それを林宗巾といった。彼が敬慕されたことは全てこのようであった。

15) 【范滂の評價】

或問汝南范滂曰、郭林宗何如人。滂曰、隱不違親、貞不絶俗、天子不得臣、諸侯不得友、吾不知其它。

ある人が汝南の范滂に「郭林宗とはいかなる人でしょうか」と問うた。范滂は答えていった、「世を避けて隠れ住んでも親に仕えることを怠らず、身を正しくしていても俗世間との關係を斷ち切らず、天子はこれを臣下にすることができず、諸侯はこれを仕えさせることができない。私は彼以外にそのような者を知らない。」

16) 【母憂】

後遭母憂、有至孝稱。

後に母の死に遭ったが、至孝と賞賛された。

17) 【不爲危言】

林宗雖善人倫、而不爲危言覈論、故宦官擅政而不能傷也。

林宗は人物批評に優れていたとはいえ、厳しい物言いをし、事實を盡した議論をすることはなかったで、それで宦官が政治をほし、いまにしても彼に害を與えることはできなかった。

18) 【黨事】

及黨事起、知名之士多被其害、唯林宗及汝南袁閔得免焉。

黨錮が起るに及んで、名を知られた士人たちは多くその（＝宦官の）害を受けたが、ただ林宗と汝南の袁閔だけが免れることができた。

19) 【閉門教授】

遂閉門教授、弟子以千數。

そのまま門を閉ざして教授し、弟子は千単位で数えるまでになった。

20) 【野哭】

建寧元年、太傅陳蕃・大將軍竇武爲閹人所害、林宗哭之於野、慟。既而歎曰、人之云亡、邦國殄瘁。瞻烏爰止、不知于誰之屋耳。

建寧元年（西暦一六八）、太傅陳蕃・大將軍竇武が宦官によって殺された。林宗は野で彼らのために哭禮を行い、悲哀の情きわまって聲をあげて泣いた。そのまま嘆いていった、「賢人が亡びに向かっているというのは、國々がまさに窮乏しようとしていることなのだ」「詩大雅瞻卬、佞人の口出しで天子の徳が天・神に至らず、朝廷の威

儀も正しくないことを示唆」。カラスがとどまり集まるところが誰の家であるか分からないだけだ「：詩小雅正月、カラスは人々の寓意」。

## 21) 〔早卒〕

明年春、卒于家、時年四十二。四方之士千餘人、皆來會葬。

次の年の春、(出仕せぬまま)家で亡くなった。四二歳だった。各地の士人千人あまり、皆やって来て葬儀に参列した。

## 22) 〔蔡邕爲碑文〕

同志者乃共刻石立碑、蔡邕爲其文、既而謂涿郡盧植曰、吾爲碑銘多矣、皆有慙德。唯郭有道無愧色耳。

そこで志を共にする者たちは石に銘文を刻んで碑を建て、蔡邕がその文章をつくった。まもなく涿郡の盧植にこう言った、「私は石碑の銘文をつくったことが多いが、どれも不徳を恥じるところがある。ただ郭有道には恥じるものがないだけだ。」

## 23) 〔知人②〕

其獎拔士人、皆如所鑒。

その勵まし、引き抜いた士人は、みな彼の見立て通りの人物であった。

## 24) 〔附益増張・獎拔された士人の實例〕

後之好事、或附益増張、故多華辭不經、又類卜相之書。今録其章章效於事者、著之篇末。

後の時代の好んで作り事をする人々が、ことによると話をつけ加え膨らませたために、中身のない派手な言葉が多くて常道が守られていないばかりか、人相見の書物と同類である。今、その文章のうち事實によって検証できるものを記録し、篇末に記しておく。

## A) 〔左原〕

左原者、陳留人也。爲郡學生、犯法見斥。林宗嘗遇諸路、爲設酒肴以慰之。謂曰、昔顔涿聚梁甫之巨盜、段干木晉國之大狙、卒爲齊之忠臣、魏之名賢。蘧瑗・顔回尚不能無過、況其餘乎。慎勿悲恨、責躬而已。原納其言而去。或有譏林宗不絶惡人者。對曰、人而不仁、疾之以甚、亂也。原後忽更懷忿、結客欲報諸生。其日林宗在學、原愧負前言、因遂罷去。後事露、衆人咸謝服焉。

左原は、陳留の人である。郡の學生となったが、法を犯して糾弾された。林宗はかつて彼と道で出會ったことがあり、彼のために酒肴を用意して、それで彼を慰めた。そして言った、「昔、顔涿聚は梁甫の大盜賊で、段干木は晉の交易商だったが、最後にはそれぞれ齊の忠臣、魏の名だたる賢人となった。蘧瑗(蘧伯玉)や顔回であっても、間違いを犯さないことはできなかったのだ。ましてその他の者はよけいそうだろう。絶対に怒り狂って恨んだりしてはいけない。自らを省みて、自分の誤りを反省するだけにしなさい。」左原はその言葉を受け容れて立ち去った。ある人が、林宗は惡人と關わりを斷っていないと嘲笑した。林宗は答えていった、「(孔子も言ったように)人の仁でない者がいたとして、これを嫌うことがあまりに甚だしいと、かえって彼をおいつめて(亂暴に)してしまう」「：論語泰伯」。」のち、左原はにわかになび恨みを懷き、客と結託して諸生に復讐しようとした。その日林宗が學にいたので、原は以前の言葉に恥ずかしく思い、それによってそのまま止めて立ち去った。後にその事實が露見し、人々は皆感謝し感心した。



## B)〔茅容〕

茅容字季偉、陳留人也。年四十餘、耕於野、時與等輩避雨樹下、衆皆夷踞相對、容獨危坐愈恭。林宗行見之而奇其異、遂與共言、因請寓宿。旦日、容殺雞爲饌、林宗謂爲己設、既而以供其母、自以草蔬與客同飯。林宗起拜之曰、卿賢乎哉。因勸令學、卒以成德。

茅容字は季偉、陳留の人である。四十歳餘りで田野で耕作をしていた。いつも同輩と木の下で雨宿りをする時は、人々はみな足を投げ出し向かい合って座ったが、容はひとり正しい姿勢で座り、ますます慎み深くしていた。林宗は歩きながらこれを見て、その他の人と異なっているさまを優れているとして、そのまま共に話し合い、そこで宿を請うた。翌日、容は二ワトリを殺してごちそうを作った。林宗は私のために用意したのだと思ったが、(容は)すぐにそれをその母親に出してしまい、自分は粗末な食事を客と一緒に食べた。林宗は立ち上がって彼を拜していった、「あなたは實に賢明です。」そこで説得して學問をさせた。最後にはそれによって徳を完成させた。

## C)〔孟敏〕

孟敏字叔達、鉅鹿楊氏人也。客居太原。荷甌墮地、不顧而去。林宗見而問其意。對曰、甌以破矣、視之何益。林宗以此異之、因勸令遊學。十年知名、三公俱辟、竝不屈云。

孟敏字は叔達、鉅鹿楊氏の人である。太原に假住まいしていた。こしきを擔いでいて地面に落として(壊して)しまったが、ふり返ることなく去っていった。林宗は(その様子を)見てその意圖を尋ねた。敏は答えていった、「こしきはもはや壊れてしまっ

## D)〔庾乘〕

にいる。それを見ることが何の役に立つのか」と。林宗はこの受け答えをもって彼をとりわけ優れているとし、そこで説得して遊學させた。十年にして名前を知られ、三公はみな辟召したが、全て従わなかったのである。

庾乘字世遊、潁川鄆陵人也。少給事縣廷爲門士。林宗見而拔之、勸遊學官、遂爲諸生備。後能講論、自以卑第、每處下坐、諸生博士皆就讎問、由是學中以下坐爲貴。後徵辟竝不起、號曰徵君。庾乘字は世遊、潁川鄆陵の人である。若くして縣の役所に勤め、門衛となった。林宗は彼を見かけて拔擢し、説得して學校をまわらせ、そのまま諸生の雇い人となった。後に議論を交わすことができるようになったが、自ら低い地位にあるとして、いつも下座にいた。(しかし)諸生や博士たちはみな彼に教えを請い、疑問を問いただした。これによって學校の中では下座が尊いものとなった。後に辟召を受けたがどれにも應ぜず、「徵君」と稱せられた。

## E)〔宋果〕

宋果字仲乙、扶風人也。性輕悍、意與人報讎、爲郡縣所疾。林宗乃訓之義方、懼以禍敗。果感悔、叩頭謝負、遂改節自勸。後以烈氣聞、辟公府、侍御史・并州刺史、所在能化。

宋果字は仲乙、扶風の人である。性質はすばしこくて氣が強く、人に對して仇討ちをすることを好んでいた、郡縣の役所から憎まれていた。ところが林宗は彼にことを行うにあたって守るべき規範や道理を教え諭し、降りかかる災いや失敗によっておそれさせた。果は感じ入って今までのことを悔い改め、

叩頭して罪の許しを乞い、そしてその節操を改めて自ら身を正した。後に死をも怖れぬ激しい氣性で世間に知られ、公府から辟召され、侍御史、并州刺史となって、任地をよく治めることができた。

## F) 〔賈淑〕

賈淑字子厚、林宗郷人也。雖世有冠冕、而性險害、邑里患之。林宗遭母憂、淑來修弔、既而鉅鹿孫威直亦至。威直以林宗賢而受惡人弔、心怪之、不進而去。林宗追而謝之曰、賈子厚誠實凶德、然洗心向善。仲尼不逆互郷、故吾許其進也。淑聞之、改過自厲、終成善士。郷里有憂患者、淑輒傾身營救、爲州閭所稱。

賈淑は字子厚、林宗の郷人である。代々高官を出す家柄であったが、しかし性格は陰險で平氣で人を害するたちであり、郷里の人々はこれに苦しんでいた。林宗が母親の死に遭ったとき、賈淑は弔問にやって來た。つづいて鉅鹿の孫威直もやって來た。威直は林宗が賢明であるにもかかわらず惡人の弔問を受けているのを心中不審に思い、中に入らずに歸ってしまった。林宗は追いかけていって彼にお禮を述べ、言った、「賈子厚は本當に仁德に背いた惡行をする輩だが、しかし過ちを改めて改心し、善い方へ向かおうとしている。仲尼は（風俗が悪い）互郷の人間を追い返さなかった」「論語述而」、だから私も彼が中に入るのを許したのだ。」「賈淑はこの話を聞き、今までの過ちを改めて自ら努め、しまいには行いの正しい立派な人物となった。郷里で心配事がある者がいると、賈淑はそのたびに全力を盡くしてその苦しみから助けたので、郷里の人々から賞賛を受けた。

## G) 〔史叔寶〕

史叔寶者、陳留人也。少有盛名。林宗見而告人曰、牆高基下、雖得必失。後果以論議阿枉敗名云。

史叔寶は陳留の人である。若い頃から盛んな名聲があった。林宗は彼を見かけて、人に知らせていった、「かきねは高くても土台は低い。（名聲を）得ているとはいえ、必ず失うであろう。」その後果たして、議論が偏っていて不公正であることにより名聲を失ったということだ。

## H) 〔黃允〕

黃允字子艾、濟陰人也。以儻才知名。林宗見而謂曰、卿有絕人之才、足成偉器。然恐守道不篤、將失之矣。後司徒袁隗欲爲從女求婚、見允而歎曰、得婿如是足矣。允聞而黜遣其妻夏侯氏。婦謂姑曰、今當見弃、方與黃氏長辭、乞一會親屬、以展離訣之情。於是大集賓客三百餘人、婦中坐、攘袂數允隱匿穢惡十五事、言畢、登車而去。允以此廢於時。

黃允は字子艾、濟陰の人である。俊才であるということでも名を知られていた。林宗は彼に會って言った、「あなたは人からかけ離れた才能を持っていて、才能優れた人物となるのに充分です。しかし道理を守ることに眞心がこもっていないから、それだけの器量を失うことになるでしょう。」後、司徒の袁隗が兄弟の娘のために結婚相手を求めようとした時、允を見て感嘆していった、「婿を得るのにこのような人物であれば充分だ。」允はこの話を聞いて、その妻の夏侯氏を離縁した。夏侯氏は姑に言った、「今、夫から棄てられるにあたって、黄氏ととこしえに別れを告げることになるので、今一度親屬と會い、離

別の思いを申し述べたくお願いたします。」そこで賓客三百人餘りをあまねく集めた。夏侯氏は宴の途中で、袖を拂い決然として允が隠していた十五の悪事を一つ一つ述べ立て、言い終わると車に乗って去っていった。黄允はこのことによって當世の人々から退けられた。

#### I)〔謝甄〕

謝甄字子微、汝南召陵人也。與陳留邊讓並善談論、俱有盛名。每共候林宗、未嘗不連日達夜。林宗謂門人曰、二子英才有餘、而並不入道、惜乎。甄後不拘細行、爲時所毀。讓以輕侮曹操、操殺之。

謝甄は字子微、汝南召陵の人である。陳留の邊讓と並んで議論が巧みで、二人とも盛んな名聲があつた。つねに二人して林宗のところを訪れ、何日も、夜になるまで議論しないことがなかった。林宗は門人に言った、「二人の優れた才能は餘りあるほどであるが、しかしともに正しい道に入っていない。惜しいことだ。」謝甄は後、細かな作法にこだわらなかつたために、當世の人々から非難された。邊讓は曹操を侮つたことによつて、曹操に殺された。

#### J)〔王柔〕

王柔字叔優、弟澤字季道、林宗同郡晉陽縣人也。兄弟總角共候林宗、以訪才行所宜。林宗曰、叔優當以仕進顯、季道當以經術通、然違方改務、亦不能至也。後果如所言、柔爲護匈奴中郎將、澤爲代郡太守。

王柔は字叔優、その弟澤は字季道、林宗と同郡の晉陽縣の人である。兄弟はまだ髪を總角に結っている子供の時に共に林宗

のところを訪れ、(自分たちの)才能や品性、行いがぴたり適合するのはどこか尋ねた。林宗は言った、「叔優はきつと仕官すること世に顯れるであろうし、季道は學問によつて志を遂げるであろう。しかし、その掟に背き、追求する方向を変えてしまつたら、極みに達することはできない。」後、果たしてその言葉通りとなり、柔は護匈奴中郎將となり、澤は代郡太守となつた。

#### 25)〔六十人成名〕

又識張孝仲芻牧之中、知范特祖郵置之役、召公子・許偉康並出屠酤、司馬子威拔自卒伍、及同郡郭長信・王長文・韓文布・李子政・曹子元・定襄周康子・西河王季然・雲中丘季智・郝禮眞等六十人、並以成名。

また張孝仲を牧童の中から選び出し、范特祖を郵置で使われている人間の中から(見つけ出して)知り合い、召公子と許偉康とともに肉を賣つたり酒を賣つたりする賤業者の中から引つ張り出し、司馬子威を兵隊の中から引き抜いた。そして同郡の郭長信・王長文・韓文布・李子政・曹子元、定襄の周康子、西河の王季然、雲中の丘季智・郝禮眞など六十人とともに、みなそれによつて名聲を上げた。

#### 26)〔論曰〕

論曰、莊周有言、人情險於山川、以其動靜可識、而沈阻難徵。故深厚之性、詭於情貌。則哲之鑒、惟帝所難。而林宗雅俗無所失、將其明性特有主乎。然而遜言危行、終亨時晦、恂恂善導、使士慕成名、雖墨・孟之徒、不能絶也。

范曄の論。『莊子』には次のような言葉がある。「人の心は山川より

も險し（く、理解しがた）い「…『莊子』列禦寇篇」。日頃の舉動から理解することができるとはいうものの、しかしそれはとても奥深くて明らかにし難いものなのだ。だから深く隠され厚く装われている人の性質は、心の動きや見かけとは違っているのである。人となりを知別するという賢明さは、堯や舜でさえ困難であるとするものであった「…『尚書』皐陶模」。しかし林宗は高雅な人であれ卑俗な人であれ間違った評價を下すことがなかった。それは人の性質を明

## 〔史料2〕蔡邕「郭有道碑文」（『文選』卷五八碑文上所引）

1) 先生諱泰、字林宗、太原界休人也。其先出自有周王季之穆、有號叔者、寔有懿德、文王咨焉。建國命氏、或謂之郭、即其後也。先生誕生應天衷、聰睿明哲、<sup>16)</sup>孝友溫恭、仁篤慈惠。夫其器量弘深、姿度廣大、浩浩焉、汪汪焉、奧乎不可測已。若乃砥節厲行、直道正辭、貞固足以幹事、隱括足以矯時。<sup>5)</sup>遂考覽六經、探綜圖緯。<sup>13)</sup>周流華夏、<sup>7)</sup>隨集帝學。收文武之將墜、拯微言之未絕。<sup>7)</sup><sup>8)</sup><sup>14)</sup>于時纓綏之徒、紳佩之士、望形表而影附、聆嘉聲而響和者、猶百川之歸巨海、鱗介之宗龜龍也。<sup>19)</sup>爾乃潛隱衡門、收朋勤誨、童蒙賴焉、用祛其蔽。<sup>9)</sup>州郡聞德、虛己備禮、莫之能致。羣公休之、遂辟司徒掾、又舉有道、皆以疾辭。將蹈鴻涯之遐迹、紹巢許之絕軌、翔區外以舒翼、超天衢以高峙。<sup>21)</sup>稟命不融、享年四十有二、以建寧二年正月乙亥卒。

1) 先生の諱は泰、字は林宗、太原郡界休縣の人である。その祖

らかにするにあたって格別に根本となるものを持っていたからであろうか。しかし言葉を抑えめにし行動を慎重にして、ついに時勢に従って隠遁することを滞りなく達し得た。順序よく巧みに人を教え導き「…『論語』子罕」、士人たちに名聲をあげることをあこがれさせた。墨子や孟子のたぐいであつても、（彼を）超越することはできない（といえる）。

先は周の（古公の子、太伯の弟の）王季の子、號叔なる者がいたのによつて出ており、その號叔にはうるわしい徳があつて、文王は彼に諮問している。國を建てて氏を賜るにあつて、ある者はこれを郭といった。つまりこれの後裔である。

先生は天の心に應じていて、賢明で物事の道理を洞察することができ、<sup>16)</sup>親には孝行で兄弟にはいつくしみ深く、穩やかでうやうやしく、慈しみ深くて手厚く、あわれみ深かった。そもそもその度量の大きくて深く、そのもつて生まれた資質の（さまざまな方面に）あまねく廣がつていることは、廣大であり、深く廣く、深遠ではかりがたかつたのである。節義をみがき、品行を修め、正しい道にのつとり言葉をきちんとただす、ということでは、その正しい道を守つて搖らがなことは物事をつか

さどり成し遂げるのに充分であり「『周易乾』、まがつているものをただすその規範として、時流をただすのに充分であった」〔『韓詩外傳卷二、蘧伯玉に關連』〕<sup>5)</sup>そして六經をよく讀んで調べ、圖讖や緯書に精通した。<sup>13)</sup>華夏をあまねくめぐりあるき、<sup>7)</sup> ついですぐに太學にとどまって、周の文王・武王の道がまさにだめになろうとしているのをもとにもどし、孔子の奥深い言葉の（絶えなんとしているが）いまだに絶えていないのをすくいあげた。<sup>7)</sup> <sup>8)</sup> <sup>14)</sup> この當時、冠のひもと飾りをつけ大きな帯をたらし玉珮をさげている、官僚や聲望ある士大夫たちの、その容貌や立ち居ふるまいをあがめて影の形に付き従うように従い、そのうつくしい聲望に耳を傾けてそれに唱和することは「『莊子在宥篇、』大人之教』に關連」ちようどあまたの川が大きな海に注ぎ集まり、魚や貝が龍や龜を長として貴ぶのと同じようであった。<sup>19)</sup> そこで粗末な家にひそみ隠れて隠者となり、仲間たちを受け容れ親切に力をこめて教えた。無知で年若い者たちは彼を頼りにし、それによってその道理にくらいたところを取り拂った。<sup>9)</sup> 州郡（の長官）はその徳を耳にして、謙虚にして禮儀をきちんと整え（て招い）たが、彼を招き寄せることができたものはいなかった。公卿たちは彼を賛美し、そして司徒掾に辟し、また有道にも擧げたが、すべて病氣を理由に辭退した。まさに、古の仙人である鴻涯（洪涯）の足跡を踏んでゆき、巢父・許由の生き方を引き継ぎ、域外を翔けてそれによって羽を大きく伸ばし、みやこ（に代表される官界）を超越してそれによって高く抜きんでようとしていたが、<sup>21)</sup> その壽命は永くなく、享年四十二歳、建寧二年正月乙亥に世を去った。

22) 凡我四方同好之人、永懷哀悼、靡所寘念。乃相與惟先生之德、以謀不朽之事。僉以爲先民既沒、而德音猶存者、亦賴之於見述也。今其如何而闕斯禮。於是樹碑表墓、昭銘景行、俾芳烈奮于百世、令問顯於無窮。

22) そもそもわれら天下の志を同じくする者達は、ながらく哀悼の氣持ちを抱き續けたが、その思いの至る所がなかった。そこでもとに先生の徳を思いめぐらし、それでもつてとこしえに失われぬ事業を相談した。人々が考えるには、いにしえの賢人で、亡くなっているのになおその名聲が傳わっているものは、それを記述されたことになっているのだ。今、いったいどうしてその禮を缺くことがあるのか、と。そこで、碑を立ててその墓をたたえ、その高尚な品性と行いをきれいに碑文を刻んで、その榮えある功業を百世にわたつてとこしえに發揚せしめ、そのすばらしい名聲を永遠に表彰することとした。

其辭曰、

於休先生、明德通玄。純懿淑靈、受之自天。崇壯幽浚、如山如淵。

5) 禮樂是悅、詩書是敦。匪惟撫華、乃尋厥根。宮牆重仞、允得其門。

懿乎其純、確乎其操。<sup>7)</sup> <sup>8)</sup> <sup>14)</sup> 洋洋搢紳、言觀其高。<sup>19)</sup> 棲遲泌丘、善誘能教。<sup>9)</sup> 赫赫三事、幾行其招。委辭召貢、保此清妙。<sup>21)</sup> 降年不永、

民斯悲悼。<sup>22)</sup> 爰勒茲銘、摛其光耀。嗟爾來世、是則是效。

そこでその辭を以下のように作った、

ああすばらしき先生、その徳はあきらかでものごとの奥深い眞理に通じておられた。その高尚でたぐいまれな聰明さは、天から受け



たものであった。その立派で深遠なことは、山のようであり淵のようであった。<sup>5)</sup> 禮樂をよろこび、詩書を重んじた「左傳僖公二十七年」。文章の美しさをとることを考えるのではなく、その根本を追究した。（孔子の學問の）非常に高い垣根であっても、たしかにその門から入ることができた「論語子張」。その純なること（まごころがあつて篤實、眞正でまじりけがない）はりっぱであり、その節義はしっかりとしていた。<sup>7)</sup> <sup>8)</sup> <sup>14)</sup> あまたの官僚や學者たちは、その高尚さを（仰ぎ）見た。<sup>19)</sup>（隱棲の場所

である）泉の涌く丘で安らかに暮らし、うまく人をよい方向へ導き、人々を教化することができた。<sup>9)</sup> 聲望盛んな三公はたびたび彼を招いたが、うち捨てられるに任せて辟召も貢舉も辭退し、その高潔さ立派さを保った。<sup>21)</sup> しかしその壽命はながく、人々はそのことを悲しみ悼んだ。<sup>22)</sup> ここにこの銘を刻み、その輝かしい徳を伝え廣めよう。ああ、後世の人々よ、これを模範とし手本とせよ「詩小雅鹿鳴」。

### 〔史料3〕皇甫謐『高士傳』郭泰條

※『太平御覽』卷五〇八逸民八に引く「皇甫士安高士傳」を底とし、四庫全書本と對校した。四庫全書本に無い文字には網掛を行い、四庫全書本にあり『太平御覽』に無いものは（カッコ内）に示した。譯は『太平御覽』の文による。なお四庫全書本は郭泰を全て郭太につくる（注記は省略）。

1) 郭泰字林宗、太原人也。16) 少事父母、以孝聞。12) 身長八尺餘。2) 家貧、3) 郡縣欲以爲吏、歎曰、丈夫何能執鞭斗筲哉。乃辭母。4) 與同郡宗仲至京師、從屈伯原學春秋、5) 博洽無不通、11) 又審於人物。由是名著。14) 於陳梁之間、步行遇雨、巾一角蟄（墊）。衆人慕之、皆（故）折巾角。士爭往從之、載策盈車。25) 凡泰知之于無名之中、六十餘人。23) 皆先言後驗。16) 以母喪歸。徐稚來吊（弔）、以生芻一束、頓泰廬前、而去。泰曰、（此必）南州高士徐孺子也。詩曰（不云乎）、生芻一束、其人如玉。吾不堪此喻耳。9) 後辟司徒府、有道

徵、皆不就。（凡司徒辟、太常趙典舉有道、皆不就。以建寧二年卒於家。）

1) 郭泰、字は林宗、太原郡の人である。16) 若い頃から兩親にすぎず、孝であるということで評判だった。12) 身の丈は八尺餘りあった。2) 家は貧しく、3) 郡縣は彼を吏にしようとしたが、郭泰は嘆いて言った、「いつぱしの男がどうして鞭をもって車を操るようなつまらない役目に居ることができようか。」そこで母のもとを辭去した。4) 同郡の宗仲とともに京師にたどり着

き、屈伯彦について『春秋』を學んだ。<sup>5)</sup> 物事・學問で通曉していないものではなく、<sup>11)</sup> その上人間の性格について知り盡くしていた。このことによってその評判は世に知られることとなった。<sup>14)</sup> 陳と梁の閒を徒歩で行く途中雨に遭い、かぶりものの一角が崩れたことがあった。人々はこのようすにあこがれて、皆そのかぶりものの角を折った。士大夫たちは先を争って行つて彼につき従い、積み込まれた策（刺？）は車から溢れるほどだった。<sup>25)</sup> 總じて、郭泰がまだ評判のない中から見分け知り合っ

た者は六十人餘りあった。<sup>23)</sup> みな先に郭泰から評價され、あとでそれが的中した。<sup>16)</sup> 母親が亡くなったので歸郷した。徐稚が弔問に訪れ、新鮮な草一束を郭泰の廬の前にとどめてすぐ去った。郭泰は言った、「南州の高士、徐孺子だ。詩には『まぐさ一束進ぜよう、その徳はまるで玉のよう』『詩小雅白駒』とある。私はこのたとえにふさわしくない。」<sup>9)</sup> 後、司徒府に辟され、有道として徴されたが、みな従わなかった。

#### 〔史料4〕葛洪『抱朴子』外篇・正郭篇

※文中（カッコ内）は楊明照『抱朴子外篇校箋』下（新編諸子集成第一輯、中華書局、一九九七）所掲の原文、「龜甲カッコ内」は楊氏の注釋によるその文字の讀み換えである。なお楊氏は平津館叢書本を底本とし、明魯藩承訓書院本等と對校している。四部叢刊本は魯藩本を底本とする。

抱朴子曰、嵇生以爲、太原郭林宗<sup>9)</sup> 竟不恭三公之命、<sup>5)</sup> 學無不涉、名重於往代、加之<sup>11)</sup> 以知人。<sup>26)</sup> 知人則哲、蓋亞聖之器也。及在衰世、<sup>13)</sup> 棲棲惶惶、席不暇溫、志在乎匡亂行道、<sup>26)</sup> 與仲尼相似。

① 余答曰、夫智與不智、存於一言。樞機之玷、亂乎白圭。愚謂亞聖之評、未易以輕有許也。夫所謂亞聖者、必具體而微、命世絕倫、與彼周・孔其閒無所復容之謂也。若人者、亦何足登斯格哉。<sup>12)</sup> 林宗拔萃翹特、<sup>23)</sup> 鑒識朗徹、方之常人、所議固多、引之上及、實復未足也。

② 此人有<sup>5)</sup> 機辯<sup>12)</sup> 風姿、又巧自抗、遇而善用。<sup>24)</sup> 且好事者爲之羽翼、延其聲譽於四方。故能挾之<sup>14)</sup> 見（准）〔推〕慕於亂世、<sup>24)</sup> 而爲過聽

不覈實者所推策。及其片言所褒、則重於千金、<sup>8)</sup> 遊步所經、則賢愚波蕩、謂龍鳳之集、奇瑞之出也。<sup>6)</sup> 吐聲則餘音見法、移足則遺迹見擬。可謂善擊建鼓而當揭日月者耳、非眞隱也。

③ 蓋欲立朝、則世已大亂。欲潛伏、則悶而不堪。或躍、則畏禍害。確爾、則非所安。<sup>13)</sup> 彰惶不定、載肥載臞。而世人逐其華而莫研其實、翫其形而不究其神。<sup>14)</sup> 故遭雨巾壞、猶復見飭。不覺其短、皆是類也。俗民追聲、一至於此。故其雖有缺隙、莫之敢指也。夫林宗<sup>5)</sup> 學涉<sup>11)</sup> 知人、非無分也。然而未能避過實之名、而闇於自料也。

④ <sup>10)</sup> 或勸之以出仕進者。林宗對曰、吾晝察人事、夜看乾象、天之所廢、

不可支也。方今運在明夷之爻、值勿用之位、蓋盤桓潛居之時、非在天利見之會也。雖在原陸、猶恐滄海橫流、吾其魚也。況可冒衝風而乘奔波乎。未若巖岫頤神、娛心彭・老、優哉游哉、聊以卒歲。

⑤案林宗之言、其知漢之不可救、非其才之所辯、審矣。法當仰濟商洛、俯泛五湖、追巢父於峻嶺、尋漁父於滄浪。若不能結蹤山客、離羣獨往、則當掩景淵沔、韜鱗括囊。13)而乃自西徂東、席不暇溫、26)欲慕孔・墨棲棲之事。

⑥聖者憂世、周流四方、猶爲退士所見譏彈。林宗才非應期、器不絕倫、出不能安上治民、移風易俗、入不能揮毫屬筆、祖述六藝。行自衒耀、亦既過差。收名赫赫、受饒頗多。然卒進無補於治亂、退無迹於竹帛、觀傾視汨、冰泮草靡、未有異庸人也。

⑦無故沈浮於波濤之間、倒屣於埃塵之中、7)邀集京邑、交關貴游、輪刺策弊、匪遑啓處。遂使聲譽翕習、秦胡景附、巷結朱輪之軌、堂列赤紱之客、輶車盈街、載(奏)〔刺〕連車。誠爲游俠之徒、未合逸隱之科也。

⑧有道之世而臻此者、猶不得復厠高潔之條貫、爲祕丘之俊民。而脩茲在於危亂之運、奚足多哉。孰不謂之闇於天人之否泰、蔽於自量之優劣乎。空背恬默之塗、竟無有爲之益、不值禍敗、蓋其幸耳。

⑨以此爲憂世念國、希擬素王、有似蹇足之尋龍駒、斥鷃之逐鴻鵠、焦冥之方雲鵬、鼯鼯之比巨象也。然則林宗可謂有耀俗之才、無固守之質、23)見無不了、庶幾大用。12)符采外發、精神內虛、不勝煩躁、言行相伐、口稱靜退、心希榮利。未得□玄圃之棲禽、九淵之潛靈也。

⑩自衒自媒、士女之醜事也。知其不可而尤効尤師、亞聖之器、其安在乎。雖云11)知人、26)知人之明、乃唐・虞之所難、尼父之所病。夫以明竝日月、原始見終、且猶有失、不能常中。況於林宗螢燭之明、得

失半解、已爲不少矣。

⑪然則名稱重於當世、美談盛於既沒、故其所得者、則世共傳聞。而所失者、則莫之有識爾。雖25)頗甄無名之士於草萊、指未剖之璞於丘園、然未能進忠烈於朝廷、立禦侮於壇場、解亡徵於倒懸、折逆謀之競逐、若鮑子之推管生、平仲之達穰苴。

⑫7)9)林宗名振於朝廷、敬於一時、三・九肉食、莫不欽重。力足以拔才、言足以起滯、7)而但養疾京輦、招合賓客、無所進致、以匡危蔽。徒11)能知人、不肯薦舉、何異知沃壤之任良田、識直木之中梁柱、而終不墾之以播嘉穀、伐之以構梁棟、奚辭於不粒、何救於露居哉。9)其距貢舉者、誠高操也。其走不休者、亦其疾也。

(注)平津館叢書本・四部叢刊本は「不可救」とするが、楊氏は本文のようにつくる。「不不」とした理由は示されていないが假に楊明照に従う。

抱朴子は言った。「嵇先生(嵇含)が考えるには、『太原の郭林宗は9)結局三公からの招きに從わず、5)學問は及ばないところがなかった。その名聲は昔から重んじられ、それに加えて11)人となりを識別することができた。26)人となりを識別できると

いうのは哲なる者であり、思うに「聖人に次ぐ(亞聖)」「人材である」「尚書皐陶模」。衰えた時代にあつて、13)慌ただしくて席を温めるとまもなく「論語憲問」、その志は世の中の亂れを正して道を行うことにあつた、というのに至つては、26)孔子と似通っている(とさえいえる)。』

①「私は答えていった。『そもそも、知恵があることとないことは、ただの一言にあるものだ。(君子にとって)肝要な部分(である言行)のきずは、白圭(Ⅱ清白な身)であつても亂してだめにしてしまう『詩大雅抑』。わたしが思うに、亞聖という評價は、かるがろしく

認めてしまうのは簡単ではないことなのだ。そもそも、言うところの亞聖とは、四肢（徳の喩え）はきちんと備わっていてもまだそれが小さく、その時代にあつて比べようのない程飛び抜けて優れていて、あの周公や孔子と比べても、彼らとの間にさらに別のものをいれるところがない（≡すぐ次ぐ地位に置けるほど優れている）者のことを言っているのだ。このような人（≡郭林宗）が、どうしてこの格（≡亞聖）に上げるのに足りるだろうか？<sup>12)</sup> 郭林宗は人々から飛び抜けていて、<sup>23)</sup> その人物評價の見識は明瞭で徹底しており、これを常人になぞらえるというのなら是非を論ずるところは當然多いが、これを古の聖人と比べれば、實のところさらに及ばないのだ。

②この人は<sup>5)</sup> 機知に富んでいて言葉たくみであり、<sup>12)</sup> 上品な立ち居ふるまいと立派な風貌を備えていて、またたくみに自らを高尚であるとし、時世のめぐりあわせのうちでその能力を上手に用いた。<sup>24)</sup> そのうえ、事を好む者は彼のためにその支えとなり、その聲望を四方へと廣めていった。だから、このことをたのみとして<sup>14)</sup> 亂世に尊重され慕われることができ、<sup>24)</sup> 誤つて信じ込んで事實を確かめない者たちによつて（その名聲はさらに）押し廣められたのだ。そのちょっとした言葉で褒められることは千金よりも價值があり、<sup>8)</sup> 彼が巡り歩いて通りかかったところは、賢い者も愚かな者もなだれをうつてこれに従い、龍鳳が集まるところ、奇瑞が現れるところと言われた。<sup>6)</sup> 聲を出せば、その（長く印象に留まり人を感動させる）餘音はお手本とされ、立ち去ると、その居たあとは（郭林宗のものであらうと）推し量られた。（人を招集したり軍隊の指揮を執ったりする）大きな太鼓を上手に叩いて、まるで日と月とを高く掲げるようにし

て自らの賢明さを誇示するにひとしい者というべきであるだけで、まことの隠者ではない。

③思うに朝廷に仕えようと望んでも世の中はすでに大いに亂れており、身を潜め隠者とならうと望んでも憂鬱で耐えられなかったのだろう。「周易乾の文言と相反」。假に官界に入つたとすればわざわざいにあうのをおそれただろうし、志をたてて隠遁したとすればそれは安んずるところではなかっただろう。<sup>13)</sup> うろつと動き回つてとどまることがなく、肥つたり瘦せたりした（≡道義と富貴を得ることの間で心が定まらなかった）「≡韓非子喻老」。それなのに世の人はその華々しいところを追求してその實際を検討することがなく、その形をくり返し學んでその精神を追求しない。<sup>14)</sup> だから雨に遭つて頭巾がこわれたのさえ、お手本とされたのだ。その短所に氣がつかないことは、みなこのたぐいである。俗人たちがその聲望を追い慕うことは、ここにまで至っているのだ。だから彼には缺陷があるといつても、それをあえて指彈する者はいない。そもそも郭林宗の<sup>5)</sup> すぐれた學識と<sup>11)</sup> 人物評價の見識には、限界がないのではないのだ。したがつて實際を過ぎていと言われることを避けることはできないし、自分の價值を隠している（と言われることを避けることはできないのだ）。

④<sup>10)</sup> 郭林宗に世に出て仕官することを薦める者がいた。郭林宗は答えていった。『私は晝には人々に關することを觀察し、夜には天の様子を見る。天が廢そうとしていることは、支えることができない。今まさに命運は明夷の爻（治）にあり、（君子を）用いない位置にあたっている。思うに、仕官せずに隠れ住むとき



であつて、天に昇つて君主にまみえるおりではない。原野にいたのであつてもまだ大海が溢れ流れ出して自分が魚になつてしまふのではないかと怖れる「…左傳昭公元年」ぐらいであるのに、まして、暴風に向かつていつて荒れ狂う波に乗るべきであるうか？山の洞穴で身を養ひ、心では彭祖・老子の道を樂しみ、ゆつたりのんびりと過ごして天壽を全うする、というのもまた知恵であらう「…詩小雅采芣」。』と。

⑤郭林宗の言葉を考へてみるに、彼は、漢をたすけないわけにいかないがそれは自分の才能によつてできることではない、ということ詳しく知つていた。(であるなら)やり方としては、仰いで商洛にのぼるか、かがんで五湖に浮かぶか、巢父を高い山峰に追ひ求め、漁父を青々と澄んだ水の流れにさがすべきであつて、もし隠士に仲間入りしてそれに倣ひ、仲間から離れ俗を離れて一人で自らの志を行うことができないのであれば、その明哲さを深い淵にかくし、(龍たる證である)ウロコを覆ひ隠して知恵を使うことなく口をつぐむべきである。<sup>13)</sup>それなにかへつて西から東へと歩き回つて席が温まるいとまもなく、<sup>26)</sup>孔子や墨子があたふたとしたことを手本としてまねようとしたのだ。

⑥聖人が世の中を憂へてあまねく天下をめぐりあるいても、それでも隱遁の士によつてその缺點を非難された。郭林宗の才能器量は(五百年の間に賢人が現れるという)期運に應じたものではなく、「比べようもないほど飛び抜けた」ものでもない。世に出てはお上を安んじ人々を治め「…孝經廣要道 禮に對應する行爲」「風俗を(美しいものへと)變えてゆく」「…孝經廣要道 樂に對應する行爲」ことができず、家の中では筆先がへつてなくなるほどに文章を書

き、六經に示された先人の道を繼承し手本として發展させることもできなかった。行いについては自分で自分の才能・學問を實力以上に見せていて、すっかり度を超して(おこり高ぶつて)いる。光り輝くような名聲を手に入れ、そのみのりを受けることはたいへんに多かった。それなのに、とうとう世に出て亂れを治めることに手を貸すこともなく、世から隠れて竹帛にものを書き残すこともなく、世の中が覆り亂れ、氷はとけてなくなり草は倒れなびく(お上の混亂が下々に及んで世が亂れていく)のを見ているだけであつて、凡人と異なるところはない。

⑦理由もなく官界の波間を浮き沈みし、ホコリのたつなかで脊を逆さまに履いて(慌ただしく賓客を出迎え)、刀みやこてあちらこちらへ出かけたたり集まつたりし、身分の高い者たちと交際し、車の車輪を摩滅させ馬の鞭をこわし、家に落ち着いている暇もなかった。とうとうその聲望と名譽を盛んにし、秦・胡を影の形に従うように従わせた。ちまたには身分の高い人の乗る朱漆塗りの車のわだちが(縦横に走つていて)まるで結んだようであり、母屋には赤綬を身につけた高官のお客が居並び、一頭立ての馬車は大通りにあふれ、名刺をのせて車を連ねた。まことに遊俠の徒であつて、隱逸という類別には合致しない。

⑧きちんとした政治が行われている世の中でこのようなふるまいをするに至つてしまった者であつても、高潔というものの道理に身を置いたり隠れた丘のすぐれた人物となる(隱逸)ことは二度とできないのに、この行いを危険で混亂しためぐりあわせのうちにあつて行つたのだ。どうして重んじるのに充分なことがあろうか！だれがこれを天と人との間が通じたり閉ざされ

たりすること（Ⅱ世の盛衰）を隠し、自らの力量が優れているか劣っているのかを隠すものだといわないことがあるだろうか？いたずらに無欲で静かであるという道に背き、とうとう立派な行いをして世の中に益することがなかった。わざわざいや失敗にあわずに済んだのは、ただ単に幸運であっただけであろう。

⑨このような郭林宗の行いを世を憂い國家を思うもので、素王（Ⅱ孔子）を手本としたものだとするのは、ちょうど足ののろい馬が背の高い立派な馬について行き、ミソサザイがおおとりをおいかけて、蚊のまつげに巣くうという小さな小さな虫を天かける巨大な鳥とくらべ、小さな鼠を大きな象に比べるのに似ている。したがって郭林宗は俗世間に顯示する才能の持ち主で、固く守っている實質はなく、<sup>23)</sup>見て明らかにならないものはないばかりに、重く用いられることを願った（人物）というべきである。<sup>12)</sup>美しい玉のような風采は外に現れていたが、内なる精神はうつろであって、いらだちやあせりに耐えられず、言葉と行動はおたがいにそこないあい、口では靜かにして世を退くと言っているが、心では名譽と利益を願っていた。崑崙山の山のひとつである玄圃の高い高い峰に棲む靈鳥や、九淵の深い深い底に潜む龍のようだと……（一字不明）……ことはできないのだ。

⑩自己宣傳し、仲人をたてずに夫を求めるのは、士大夫と女性の行いとして醜いものである。それがよくないことを知っていてそれに倣いそれを師と（する）という甚だしい罪をおか）していた。「聖人に次ぐ者（亞聖）」としての器量が、いったいどこにあるというのだろうか。<sup>11)</sup>人となりを識別できると言うけれども、<sup>26)</sup>人となりを識別するということその賢明さは、堯や舜も困難であるとするものであり、孔子も悩んだことであつた。そもそも、その賢明さは日月

を合わせたようであり、物事の始めを考察してその終わりを豫見するという聖人をもつてしても、まだ失敗することがあり、いつでも的中するということはできなかったのだ。ましてや、郭林宗のホタルや燈火の弱々しい明かりのような賢明さでもつてであれば、得るのと失うのとが半分ずつだとしても、十分すぎるほど少なくないといえよう。

⑪<sup>24)</sup>だから、その名聲はその時代に重んじられ、その立派な行いは死んでしまった後にも盛んに議論されたために、そのうまくいったことは世の中の人々がそろって傳え聞いているのだが、その失敗したことは、これを知るものがないだけなのだ。<sup>25)</sup>少々無名の士人を在野の草むらの中から抜き出し、未だに割られ見分けられていないあらたまを郷里に隱居するものたちのなかに見つけて指し示したとはいえ、しかし忠實で不屈の精神をもつ人物を朝廷に進めたり、外敵の攻撃を防ぐ武臣を國境に立てたり、滅亡の兆しを逆吊りにされているような（人々の）苦しみを解くことによって打ち消したり、叛逆の謀議が競って行われているのをくじいたり、鮑叔が管仲を推舉し、晏嬰が司馬穰苴を薦めたようにすることはできなかったのだ。

⑫<sup>7)</sup>郭林宗は、その名は朝廷を揺り動かし、その時代において敬われ、三公九卿の位にある者で、これを敬い重んじない者はいなかった。その力は才能ある者を抜擢するに足り、その言葉は取り残され、落ちぶれている人を助け起こすに足りていたのに、<sup>7)</sup>ただみやこで療養生活を送り、賓客を招き集めるばかりで、人材をすすめてそれによって危うい状況や覆い隠されていることを正すことがなかった。無駄に<sup>11)</sup>人となりを識別すること

ができるばかりで、すすんで推舉しようというの、土地が肥えていて良い田土にできることを知っており、また真っ直ぐな木で建物の梁や柱にぴったりであることを分かっているのに、結局これを開墾してアワを植えず、これ（Ⅱ木）を伐って建物のはりや棟木を組み上げない、というのどこが異なっているのか。これでどうして穀物が食べられないことから解放し、ふきつさらしのところで生活することから救い出すことができるだろうか。9)貢舉を拒んだことは、ほんとうに高尚な徳と節度をもった行いだ。しかし休むことなく走ったことは、憎むべき缺點であるだけだ。』

嵇生又曰、<sup>14)</sup>林宗存爲一世之所式、沒則遺芳永播、碩儒俊士、未或指點、而吾生獨評其短、無乃見嗤於將來乎。

抱朴子曰、曷爲其然哉。苟吾言之允者、當付之於後、後之識者、何恤於寡和乎。且前賢多亦譏之、獨皇生褒過耳。

故太傅諸葛公元遜亦曰、林宗隱不修遁、出不益時、實欲揚名養譽而已。<sup>5)</sup>街談巷議以爲辯、訕上謗政以爲高。<sup>7)</sup><sup>8)</sup><sup>14)</sup>時俗貴之歛然、猶郭解原涉見趨於曩時也。<sup>24)</sup>後進慕聲者、未能考之於聖王之典、論之於先賢之行、徒或華名、咸競準的、學之者如不及、談之者則盈耳。

中人猶不覺、童蒙安能知。

故零陵太守殷府君伯緒、高才篤論之士也。亦曰、<sup>7)</sup>林宗入交將相、

<sup>13)</sup>出游方國、崇私議以動衆、<sup>7)</sup><sup>9)</sup>關毀譽於朝廷。其所善、則風騰雨驟、改價易姿。其所惡、則摧頓陸沈、士人不齒、<sup>□</sup>其名賢。遭亂隱

遁、含光匿景、未爲遠矣。君子行道、以匡君也、以正俗也。于時君不可匡、俗不可正、林宗周旋清談閭閻、無救於世道之陵遲、無解於

天民之憔悴也。

又故中書郎周生恭遠、英偉名儒也。亦曰、夫遇治而贊之、則謂之樂道。遭亂而救之、則謂之憂道。亂不可救而避之、則謂之守道。虞舜、樂道者也。仲尼、憂道者也。微子、守道者也。漢世將傾、世務交游、林宗法當慨然虛心、要同契君子共矯而正之。而<sup>13)</sup>身棲棲<sup>7)</sup><sup>8)</sup><sup>14)</sup>爲之雄伯、非救世之宜也。于時雖諸黃門、六畜自寓耳。<sup>7)</sup>其陳蕃、寶武之徒、雖鼎司牧伯、皆貴重林宗、信其言論臧否、取定於匡危易俗、不亦可冀乎。而林宗既不能薦有爲之士、立毫毛之益、而遁逃不仕者、則方之巢・許。廢職待客者、則比之周公。養徒避役者、則擬之仲尼。棄親依豪者、則同之游・夏。是以世眩名實、而大亂滋甚也。若謂林宗不知、則無以稱聰明。若謂知之而不改、則無以言憂道。昔四豪似周公而不能爲周公、<sup>26)</sup>今林宗似仲尼而不得爲仲尼也。

於是問者慨而嘆曰、然則斯人乃避亂之徒、非全隱之高矣。

嵇先生在がまた言うことには、『<sup>14)</sup>郭林宗は、生きている間は、その時代のお手本とされ、死後はその残した遺徳と聲望がいつまでも廣まっていき、學識に優れた儒者や優秀な士人で誰もあげつらった者がいないのに、あなたただ一人がその短所を指摘した。かえって後世あざけりを受けることになるのではないだろうか。（なるにちがいない。）』

抱朴子が言うことには、『どうしてそれをその通りだとすることがあるのか！もし私の言葉が適正であるならば、これを後世に託さなければならぬ。後世の見識有る人物は、どうして（私の意見に）唱和する者が少ないことを思い悩んだりするだろうか（Ⅱその高尚さをきつと理解するだろう）。しかも、昔の賢人の多くもまた彼を讃っていたのだ。ただ皇先生（Ⅱ楊明照氏は皇甫謐と解す）が褒

めすぎたにすぎない。

かつての太傅・諸葛元遜（＝呉の諸葛恪）も言っている、『郭林宗は世を避けて隠れても隠遁者としての道を修めず、世に出ててもその時代に寄與することがなかった。まことに名聲を高めつちかうことを望んでいただけだったのだ。』<sup>5)</sup> 街角で（「こちやごちやとした無責任な」議論をして、そのことを能弁であるとし、お上を悪く言い政治を譏って、そのことを高尚であるとした。<sup>7)</sup> <sup>8)</sup> 14) 當時の世俗は一致してこれを責び、まるで郭解や原涉がその當時に慕われたのと同じようであった。<sup>24)</sup> 後から來てその名聲を慕う者たちは、これ（＝郭林宗）を聖王の残した經典にてらして考えたり、古の賢人たちの行いにてらして論じたりすることができず、いたずらにその華々しい名聲に惑い、みなきそってこれを目標とし、これに學ぶ者はまるで追いつけないかのよう努力し、これについて語る者は耳いっぱいに廣がるほど（美しく）語った。普通の人であっても氣付かないのだから、年若い者がどうして知ることができるだろうか。』

かつての靈陵太守・殷府君、字は伯緒（＝呉の靈陵太守殷禮か）は、才智は人並み優れ、正確な議論を行う士人であった。彼もまた言っている、『郭林宗は、<sup>7)</sup>（朝廷に）入っては文武の大臣と交わり、<sup>13)</sup>（都を）出ては天下の郡國を巡り歩き、私的な偏った議論を尊重してそれによって人々を動かし、<sup>7)</sup> <sup>9)</sup> 毀譽褒貶を朝廷にまで及ぼした。彼が親密に交際した者は、風が巻き上がって烈しい雨が降り注ぐような急な勢いで、評價が改まりその格も變わったし、彼が憎んだ者は、くじかれとどめられて世に現れず、士人らとは同列に扱われることがなく、その時代

の著名な賢人を：（一字不明）：。亂に遭遇して世の中から逃れ隠れ、その才能を包み隠してはいても（俗世間から）遠く離れていた、というわけではない。（そもそも）君子は道を行って、それによって君主（のあやまち）をただし、風俗をただすのである。當時、君主は正すことができず、風俗も正すことができなかったが（＝できるような状態ではなかったが）、郭林宗は談論を街角でめぐらせていて（ただで）、世の中の風俗がだめになっているのを救うことがなく、天下の民がやつれ衰えて苦しんでいるのから解放することもなかった。』

またかつての中書郎・周先生、字は恭遠（＝呉の中書郎・周昭）は、人並み優れた著名な學者であった。彼もまた言っている、『そもそも、良く治まっている世にめぐりあってこれをたすけることを、「道を楽しむ」という。亂世に遭遇してこれを制止することを、「道を憂う」という。亂世をとどめることができずに、これを避けることを、「道を守る」という。堯や舜は、「道を楽しむ」者である。孔子は、「道を憂う」者である。（紂の兄）微子は、「道を守る」者である。漢の世の中が傾き、亡ぼうとしていたとき、世間は交遊を結ぶことに力をつくしていた。郭林宗は當然、深く感じ入って謙虚になり、君子たちとびったりと心を合わせてともにこの世の中のまがった風俗を真っ直ぐにただすことをとめるべきであるのに、しかし<sup>13)</sup> 彼自身はあくせくと動き回って<sup>7)</sup> <sup>8)</sup> <sup>14)</sup> この曲がった世で人々から抜kindでた人物となっていたのは、世の亂れをとどめ正すのになっっていることではない。當時、（權限をふるった）宦官たちといえど、六畜によって自らをたとえていただけだった。<sup>7)</sup> 陳蕃や竇武の



やかからは、三公や地方の長官でありながら、みな郭林宗を尊重し、その言論や品評を信用して、それを取りあげて危うい情勢を正し風俗を改めようとしたのであるから、（君子たちと力を合わせ世を正すことを）望むべきでないということがあろうか？ それなのに郭林宗は、立派な士人を推舉し、僅かな利益をもたらすこともできなかったばかりか、逃亡して仕官しない者を（古の隠者）巢父・許由になぞらえ、職務をおろそかにして賓客をお迎えしている者を周公になぞらえ、人々を集め養って課役を避けている者を孔子になぞらえ、親族を棄てて勢力のある者につく者を（孔子の弟子である）子游や子夏と同じであるとした。そのために世間（の人々）は名聲と實態とで惑い（＝名聲にくらんで實態が分からなく

なり）、そして世の大きいなる亂れはますます甚だしくなったのだ。もし、郭林宗が（この道理を）知らなかったと考えるならば、聰明であると稱える手段はない（＝稱えることはできない）。もし知って改めなかったと考えるのであれば、「道を憂う」ものであったと言う手段はない（＝言うことはできない）。昔、戦國の四君は周公を真似たが周公となることができなかった。<sup>26)</sup> 當代、郭林宗は孔子のまねをしたけれども孔子となることはできなかったのだ。』

「ここにおいて、質問者は深く感じ入り、嘆聲をあげて言った、『であるのなら、かの人は世の中の混亂を避けたやかからであるだけで、隠遁者であることを全うした高尚な者ではないのだから！』」

## 〔史料5〕袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

（ア）<sup>20)</sup> 三君八雋之死、郭泰私爲之慟曰、人之云亡、邦國殄瘁、漢室滅矣。未知、瞻烏爰止、于誰之屋。

<sup>20)</sup> 三君と八雋の死の際、郭泰はこっそりと彼らのために聲をあげて泣いていた。「賢人が亡びに向かっていると言うのは、國々がまさに窮乏しようとしていることであり「…詩大雅瞻卬」、漢は滅びるにちがいない。カラスがとどまり集まるところが誰の家であるのか分からない「…詩小雅正月」だけだ。」

（イ）<sup>1)</sup> 泰字林宗、太原介休人。<sup>3)</sup> 少孤養母、年二十、爲縣小吏、喟然嘆曰、大丈夫焉能處斗筭之役。乃言於母、欲就師問。母對之曰、無資奈何。林宗曰、無用資爲。遂辭母而行。

<sup>1)</sup> 郭泰、字は林宗、太原郡介休縣の人である。<sup>3)</sup> 若いうちに父を亡くし、母を手厚く扶養していた。二十歳で縣の小吏となったが、溜息をついて嘆いて言った。「いっぱしの男が、どうしてつまらない役目に居ることができようか！」そこで母に、師について學問をしたいと言った。母は答えていった、「學資がないのをどう



するつもりなの。」林宗は言った、「使える財産がなくてもします。」  
とうとう母のもとを辭去して出掛けていった。

(ウ) 4) 至成阜屈伯彦精廬。并日而食、衣不蓋形、人不堪其憂、林宗不改其樂。三年之後、<sup>5)</sup>藝兼游・夏。

4) 成阜の屈伯彦の學問所にたどり着いた。二日三日に一日しか食事をせず、衣服は(ぼろぼろで)體を覆わないほどの(厳しい暮らし)だった。「禮記儒行」。人々はその苦しみを我慢できなかったが、林宗は(つらい中でも)その樂しみを改めなかった。「論語雅也」。三年の後は、<sup>5)</sup>その學問は子游や子夏を凌ぐほどになった「論語先進」。

(エ) 同邑宋仲、字雋、有高才、諷書日萬言。與相友善、閒居逍遙。泰謂仲曰、蓋昔之君子會友輔仁、夫周而不比、群而不黨、皆始於將順、終於匡救。濟俗變教、隆化之道也。於是仰慕仲尼、俯則孟軻、<sup>13)</sup>周流華夏、採諸幽滯。

同縣の宋仲、字は雋という人は、優れた才能があり、一日に一萬言の書物を暗記するほどだった。お互いに親しく付き合ひ、(ともに仕官せず)家において、氣ままに暮らしていた。郭泰は宋仲に言った、「いったい昔の君子は同好の友人を集め、彼らとの交際を通して仁德をつちかうのにあたつて」「論語顔淵」、そもそも公平に廣く交わりはしても偏つたグループは作らず」「論語爲政」、澤山の人々といても馴れ合つて徒黨を組んだりしないもので」「論語衛靈公」、優れたところに從つて進むことに始まり、悪いところを正し止めることに終わったということだ」「孝經事君」。風俗を良いものへと向かうようにし、國を治めるものとしての教化について考える、ということこそが、社會の風俗を

厚いものへとしていく道である。」そこで仰いでは孔子を慕い、うつむいては孟子にならない、<sup>13)</sup>中國を巡り歩いて、もろもろの隠れていてまだ登用されていない人物を選び出した。

(オ) 泰、始至京師、陳留人符融見而嘆曰、高雅奇偉、達見清理、行不苟合、言不夸毗、此異士也。7) 言之於河南尹李膺、與相見曰、吾見士多矣、未有如郭林宗者也。其聰識通朗、高雅密博、今之華夏鮮見其儔。友而親之。

郭泰が始め都にやって來た時、陳留の人である符融が彼と會ひ、感嘆して言った、「(人格は)氣高く雅やか、きわだつて立派であり、考えは道理を深く見抜いていて、物事の筋道に通じている。行いは適當に迎合することがなく、言葉は人にへつらつて媚びを賣ることがない。これは異士(11)特に優れた士人だ。」7) このことを河南尹の李膺に言い、ともに(郭泰と)會つて、(李膺は)言った、「私は士人と會つたことが多く、しかしまだ郭林宗のような者とは會つたことがない。このように賢くて記憶力が良く、伸びやかに(物事に)通じていて、氣高く雅やか、周密でかつ學識が廣い(という點では)、今の中國にはその同類を見ることはほとんどない。」(李膺は郭林宗を)友として親しく付き合つた。

(カ) 陳留人韓卓、有知人之鑒、融見卓、以己言告之。卓曰、此太原士也。他日又以泰言告之、卓曰、四海內士也。吾將見之。於是驟見泰、謂融曰、此子神氣沖和、言合規矩、高才妙識、罕見其倫。

陳留の人韓卓は人(の賢愚善惡)を見抜く能力があつた。符融は韓卓に會ひ、自分の言葉で郭林宗のことを告げた。韓卓は言った、「これは

太原郡（屈指）の士人だ。」他の日に、また泰自身の言葉によつて郭泰のことを告げた。韓卓は、「天下の内（でも屈指）の士人だ。近いうちに彼と會つてみよう。」そこですぐに郭泰と會つたところ、韓卓は符融に言つた、「この方は精神のありようは穩やかに調和しており、言葉は守るべき道理にきちんとかなつてゐる。その高い才能と優れた見識は、その同類を見ることがほとんどない。」

（キ）陳留蒲亭亭長仇香年已長矣、泰見香在而言之、明日起朝之、曰、君泰之師、非泰之友。

陳留郡の蒲亭の亭長、仇香は既に年老いてしまつていたが、郭泰は仇香と會つて、座つて彼と語り合い、次の日起きてから拜謁して言つた。「あなたは泰の師です。泰の友ではありません。」

（ク）B) 陳留茅容、年四十矣、親耕隴畝、避雨樹下。衆人悉踐躡、容獨釐膝危坐。泰奇其異、請問舍所在、因寄宿。容明旦殺鷄作食、泰謂之爲己也。容分半食母、餘半度置、自與泰素餐。泰曰、卿賢哉遠矣。郭泰猶減三牲之具以供賓旅、而卿如此、乃我友也。起對之揖、勸令學問、卒成盛德。

B) 陳留の茅容は、歳は四十歳になつてゐた。自ら田畑を耕し（ていた）ところたまたま雨が降り、雨を木の下に避けてゐた。人々はみなはだしでしゃがみ込んでいたが、茅容は一人だけ膝をきちんと揃え、正しい姿勢で座つてゐた。郭泰はその人と異なつてゐる様子を優れてゐるとして、住まいのあるところを訊ね、それによつて泊めてもらった。茅容は翌朝二ワトリを殺して食事を作つた。郭泰は、これを自分のためにしてゐるのだと思つた。しかし容は半分に分けて母に食べさせ、残り半分を

食物棚にしまつて、自分は郭泰と一緒に粗末な食事を食べた。郭泰は言つた、「あなたが賢明さは深遠で（常人とは大きく隔たつてゐます）。わたくし郭泰は親に出すべき、馳走を減らして賓客にお出しすることはありますが、しかしあなたはこのようになさつた。私の友です。」立ち上がつて彼に對し兩手を組んで禮をし、説得して學問をさせた。結局、立派な徳を完成させた。

（ケ）嘗止陳國、文孝童子魏昭求入其房供給灑掃、泰曰、年少當精義書、曷爲求近我乎。昭曰、蓋聞經師易遇、人師難遭、故欲以素絲之質附近朱藍耳。泰美其言、聽與共止。嘗不佳、夜後命昭作粥、粥成進泰、泰一呵之曰、爲長者作粥、不加意敬、使不可食。以杯擲地、昭更爲粥重進、泰復呵之。如此者三、昭姿無變容、顔色殊悅。泰曰、吾始見子之面、而今而後、知卿心耳。遂友而善之。

以前陳國に假住まいした時、文孝童子（郡國文學の學官付きの弟子か？）の魏昭が林宗の部屋に入つて給仕をし、水を打つて掃除することを（させて）くださいと求めた。郭泰は言つた、「年若い者は書物の奥深く微妙な意味を追求すべきだ。どうして私に近づこうと求めるのか。」魏昭は言つた、「いつたい、經書の知識を授けてくれる師には出會いやすいが、道德や學問すべてで人のお手本となるような師に出會うのは難しいと聞いておりますので、そのため善にも惡にもなり得る生地のままの性質をもって（美しい）朱色や藍色に近づこうと思つただけです。」郭林宗はこの言葉を立派であるとして（賛美して）、一緒に假住まいすることを許した。以前調子が良くないことがあつて、夜が更けて後魏昭に命じて粥を作らせた。粥ができて郭泰に差し上げたところ、郭泰は叱りつけて言つた、「年長者のために粥を作るのに、心

にうやまう氣持ちを加えていない。(それが)食べてはいけなくしている。」「杯を地面に放り棄ててしまった。魏昭はもう一度郭泰のために粥をつくってまた差し上げたが、郭泰はまた叱りつけ、このようなことが三回繰り返された。(しかし)魏昭の姿には變わるところがなく、顔つきもとても喜ばしげだった。郭泰は言った、「私は最初あなたの顔しかみていなかったが、今より以降は、あなたの心を理解したのだ(あなたの心が理解できるようになった)。」そして友として彼と親しく交際した。

(コ) 鉅鹿孟敏字叔達、客居太原、未有知名。叔達曾至市、買甌、荷擔墮地、徑去不顧。時適遇林宗、林宗異而問之、甌破可惜、何以不顧。叔達曰、甌既已破、視之無益。林宗以爲有分決、與之言、知其德性、謂必爲善士、勸使讀書。游學十年、知名當世。其宗人犯法、恐至大辟、父老令至縣請之。叔達曰、犯法當死、不應死自活。此明理也、何請之有。父老董敦之曰、儼其死者、此大事也、奈何以宜適而不受耶。叔達不得已、乃行見楊氏令、不言而退。令曰、孟徵君高雅絕世、雖其不言、吾爲原之矣。

の鉅鹿の孟敏、字叔達は、太原に假住まいしていたが、まだ名前を知られていなかった。叔達は以前市にゆき、甌を買った。荷物を擔っていて地面に落として(壊して)しまったが、そのまま行つてしまつてふり返らなかつた。その時たまたま郭林宗と出會つた。林宗は(そのふるまいを)他の人とは異なっていると彼に尋ねた、「甌が壊れてしまったのは惜しむに足ることだ。一體どうしてふり返らないのか。」叔達は言った、「甌は既に壊れてしまつている。これを見ても何の利益もない。」林宗は彼が決斷力

に優れていると考え、彼と議論をし、その道義を守り通そうとする素質を理解して、必ず行いの正しい立派な人物となると言つて、説得して學問をさせた。遊學すること十年で、その名聲は當時の世の中に知られるようになった。その一族の者が法を犯したのだが、死刑になつてしまふのを恐れた。父老は(孟敏を)縣にやつて彼(の助命を)請わせようとした。叔達は言った、「法を犯せば死ななければならない。死すべきではなければ、自然と生き長らえるであろう。これは明かな道理である。どうして彼の命乞いをするであろうか。」父老は彼を督促して言つた、「もしも死んでしまつたら、これは重大なことだ。どうして適切なことを受けないのか。」叔達はやむを得ず、行つて楊氏の縣令と會つたが、何も言わずに退出した。縣令は言つた、「孟徵君の氣高く上品なさまは世に並びなきほど優れている。何も言わなかつたといつても、私は彼のために(その宗人を)許そう。」

(サ) 初汝南袁閔盛名蓋世、泰見之不宿而退。汝南黃憲邦邑有聲、天下未重。泰見之、數日乃去。薛恭祖曰、聞足下見袁奉高、車不停軌、鑾不輟輶。從黃叔度乃彌日信宿、非其望也。林宗答曰、奉高之器、譬諸汎濫、雖清易挹。叔度汪汪如萬頃之波、澄之而不清、澆之而不濁、其器深廣、難測量也。雖住稽留、不亦可乎。由是憲名重於海內。

その昔、汝南の袁閔は盛んな名聲が世を覆うほどであったが、郭泰は彼に會つて、泊めて貰わずに退出した。汝南の黃憲はその郡ではよい評判があつたが、廣く天下ではまだ重んじられていなかった。郭泰は彼と會い、數日してから去つた。薛恭祖は言つた、「聞いたところによりますと、あなたは袁奉高に會つたけれども、車はわだちを停めず、

くびきも外さなかったということです。（ところが）黄叔度に付き従っては、意外にも日数を重ねて二泊なさいました。（彼は）そのような名聲に見合うものではありません。」郭林宗は言った、「袁奉高の器量は、これを汜濫にたとえられる。清であるといっても汲み取ることはやさしい。黄叔度は満々と深く広いことはどこまでも廣がる波のようであり、清らかにさせようとしても清くならず、かき回しても濁らない。その器量は深くて廣く、量りがたいのだ。泊まってそのまま留まったとしても、よいことではないか。」これによって、黄憲の名聲は天下で重んじられるようになった。

（シ）A) 初泰嘗止陳留學宮、學生左原犯事斥逐、泰具酒食勞原於路側、謂

之曰、昔顔涿聚梁甫之大盜、段干木晉國之大狙、卒爲齊之忠臣、魏之名賢。且蘧伯玉・顔子淵猶有過、誰能無乎。慎勿恨之、責躬而已。或曰、何爲禮慰小人。泰曰、諸君黜人、不託以藜蒸、無有掩惡含垢之義。人而不仁、疾之已甚、亂也。吾懼其致害、故訓之。後原結客謀構己者、至期曰、林宗在此、負其前言。於是去。後事發露、衆人咸自以蒙更生之賜於泰。

A) その昔、かつて郭泰が陳留の學校に滞在していたとき、學生の左原が掟を犯して追放された。郭泰は酒食を用意して左原を道ばたでねぎらい、彼に言った、「昔、顔涿聚は梁甫の大盜賊で、段干木は晉の交易商だったが、最後にはそれぞれ齊の忠臣、魏の名だたる賢人となった。まして蘧瑗（蘧伯玉）や顔回であつてさえ間違ひを犯しているのだから、一體誰が過ちを犯さないことができるだろうか。絶対にこのことを恨んだりしてはいけない。自らを省みて、自分の誤りを反省するだけにしなさい。」ある人が言った、「一體どうし

てくだらない人間を禮を盡くして慰めたのですか。」郭泰は言った、「みなさんは人を非難するにあたって、粗末な食事にこと寄せず、悪い點をおおい隠し良くないところを受け容れるという道理があることがない。人の仁でない者がいたとして、これを嫌うことがあまりに甚だしいと、かえつて（彼をおいつめて）亂暴にになってしまうのだ」〔：論語泰伯〕。私は彼が書を及ぼしてしまうことを恐れたので、だから彼を教へ導いたのだ。』のち、左原は客と結託し、自分を陥れた者を（害そうと）くわだてた。しかしその決行の日に言った、「郭林宗がここにいる。彼の以前の言葉に恥ずかしく思う。」そこで立ち去った。後にその事實が露見し、人々はみな自ら（死ぬところであつたが）生き返ることができたという恩恵を郭泰から受けたと考えた。

（ス）

H) 泰謂濟陰黃元艾曰、卿高才絶人、足爲偉器。然年過四十、名聲著矣。於此際當自匡持、不然將失之矣。元艾笑曰、但恐才力不然、至此年矣。若如所勅、敢自克保、庶不有累也。林宗曰、吾言方驗、卿其慎之。元艾聲聞遂隆、後見司徒袁隗、隗歎其英異曰、若索女壻、如此善矣。有人以隗言告元艾、又自生意謂之曰、袁公有女、得無欲嫁與卿乎。元艾婦夏侯氏有三子、便遣歸家、將黜之、更索隗女也。夏侯氏父母曰、婦人見去、當分釵斷帶、請還之。遂還。元艾爲主人請親屬及賓客二十餘人、夏侯氏便於座中攘臂大呼、數元艾隱隱穢惡十五事。曰、吾早欲棄卿去、而情所未忍耳、今反黜我。遂越席而去。元艾諸事悉發露、由此之故廢棄當世。其弘明善惡、皆此類也。

H) 郭泰は濟陰の黃元艾（范書では黃子艾Ⅱ黃允）に言った、「あなたは人からかけ離れた高い才能を持っていて、才能優れた人物となるのに充分です。しかし年が四十を過ぎてから名聲が世に知

られるようになるに違いありません。このとき（Ⅱ名聲が知られるようになったとき）には、身を正しく保たなければなりません。そうしなければ、その名聲を失うことになります。」元艾は笑って言った、「ただ才能能力がそのようではなくてその年になってしまふことを恐れるだけです。もしおつしやるようだったとしたら、進んで自分から自らを抑えて保つようにします。ぜひ問題がないことを願っています。」林宗は言った、「私の言葉はこれからしるしが現れます。あなたはどうかこのことに氣を付けてください。」元艾の名聲はとうとう盛んになった。後に司徒の袁隗と會ったが、隗は彼の有能で立派なことに感嘆して言った、「もし娘婿を求めるのにこのような人物であれば満足だ。」隗の言葉を元艾に告げた人物があり、彼はさらに自分で考えをつけ加えて言った、「袁公には娘御がおられます。あなたに嫁がせたいと思っていけないことがどうしてあるでしょうか。」元艾の妻・夏侯氏には三人の子がいたが、すぐに實家に歸し、彼女を離縁してあらためて袁隗の娘を妻に求めようとした。夏侯氏の父母は言った、「婦人が追い出されたということは、かんざしを分かち帶を斷た（Ⅱ離縁し）なければなりません。娘を返すようお願いします。」それで返した（Ⅱ離縁した）。元艾が主人役となつて親屬や賓客二十人餘りをお招きしたが、夏侯氏はそこで座中腕まくりをして奮い立って大聲をあげ、元艾が隠していた十五の惡事を一つ一つ述べ立て、そして言った、「私は前からあなたを棄てて去ろうと思つていましたが、（今まで去らなかつたのは）心情としてまだ忍びなかつただけでした。ところが今、反對に私を離縁したのです！」そして席を立てて去つていった。元艾はもろもろの惡事がことごとく

露見してしまい、このことによつて、當世の人々から退けられた。彼が善と惡とを廣め明らかにすることは、みなこのようであつた。

（セ）<sup>16)</sup>後遭母憂、喪過于哀。

<sup>16)</sup>後に母の死に遭つたが、喪（に服す態度）はあまりな悲しみようであつた。

（ソ）徐孺子荷擔來弔、以生芻一束頓廬前、既唁而退。或問、此誰也。林宗曰、南州高士徐孺子者、其人諸生、吾不堪其喻也。

徐孺子は荷物を擔いで弔問へやつて來て、新鮮な草を一束、（郭泰の）廬の前にとどめて、すぐに弔問をして退出した。ある人が問うた、「これはいったい誰でしょうか。」林宗は言った、「南州の高士徐孺子は、その人となりは學問の士である（といえよう）。私はこのたとえに應えられない。」

（タ）F) 鉅鹿孫威直來弔、既而介休賈子序亦來弔、林宗受之。威直不辭而去、門人告之。林宗遣人追之曰、何去之疾也。威直曰、君天下名士、門無雜賓、而受惡人之唁、誠失其所望、是以去耳。林宗曰、宜先相問、何以便去邪。鄉里賈子序者、實有匈險之行、爲國人所棄。聞我遭喪、而洗心來弔、此亦未被大道之訓、而有修善之志也、吾故受之。若其遂變化者、棄損物更爲費用。如其不然、不保其往也。且仲尼不逆互鄉、奈何使我拒子序也。子序聞之、更自革修、終成善人。其善誘皆此類也。

F) 鉅鹿の孫威直が弔問に訪れたところ、つづいて介休の賈子序もまたやつてきて、林宗は子序の弔問を受けた。（それを見た）孫威直は何も



六十人餘りいた。その中で官職に就いた者では、陳仲弓や夏子治のような人物が十人餘り、みな名聲と徳を備えた人物であつた。

(ツ) 石雲考從容謂宋子俊曰、吾與子不及郭生、譬諸由・賜不敢望回也。

今卿言稱宋・郭、此河西之人疑卜商於夫子者也。若遇曾參之詰、何辭以對乎。子俊曰、魯人謂仲尼東家丘、蕩蕩體大、民不能名、子所明也。陳子禽以子貢賢於仲尼、淺見之言、故然有定邪。吾嘗與杜甫論林宗之徳也、清高明雅、英達瓌璋、<sup>5)</sup>學問淵深、妙有俊才。然其愷悌玄澹、格量高俊、含弘博恕、忠粹篤誠、非今之人、三代士也。漢元以來未見其匹也。周甫深以爲然。此乃宋仲之師表也、子何言哉。

石雲考はのんびりしている時に宋子俊に言つた、「わたしとあなたとが郭先生に及ばないのは、これをたとえれば子路や子貢が顔回にはとうてい及ばないと言つたようなものです。今あなたは「宋・郭」と(並べて)論じましたが、これは河西(Ⅱ西河?)の人が卜商(Ⅱ子夏)を孔子になぞらえたようなもので、もし曾參の詰問に遭つたら、いったいどんな言葉で答えるのですか。」子俊は言つた、「魯の人は仲尼を「東の家の丘さん」と言つたが、(それは)その徳性がゆつたりと廣大で、人々が名付けることができなかった(からだ)」ということは、あなたが明らかにしたことです。陳子禽が子貢を仲尼より賢いとしたのは薄っぺらな見識による言葉でしたが、これによつて(評價が)定まることがあるのでしょうか? 私は以前、杜周甫(Ⅱ杜密)と共に郭林宗の徳について議論して、『氣高くて氣品があり、物事の道理を深く理解していて文藝にも優れ、賢明で物事に通じ、ひとときわ抜きんでた人品才能をもち、<sup>5)</sup>その學問は奥深く、神業にも近いかたちで卓越した才能を備えている。しかしながら彼がまわりと調和して樂しみ穩やか

言わずに去つていつてしまった。門人がこのことを告げたので、林宗は人をやつて彼のあとを追わせて傳えた、「どうしてお歸りになるのがこんなにも早いのですか。」威直は言つた、「あなたは天下の名士で、その門には雑多なお客が出入りしていないのに、それなのに惡人の弔問を受けているのは、本當にあなたが人々から敬われるわけを失つてゐる。それだから立ち去つただけです。」林宗は言つた、「まず訊ねるのが妥當であるのに、どうしてただちに立ち去つたのですか? 郷里の賈子序は、確かに凶惡でよこしまな行いがあつて、郡縣の人々が見捨てるものとなっています。(しかし)私が母親を亡くしたのを聞いて、過ちを改めて心を入れ替え、弔問に訪れたというのは、これもまた、まだ大いなる道の教えを受けていないとはいへ行いを正しくしていくという志を持っているものであるから、だから私は彼の弔問を受けたのです。もし彼が結果として變わるのであれば、うち捨てられていたものが改めて貴く有用なものになるということであり、もしそうでなかったとしても、去つてからのことは保證しないものです」「論語述而」。「そのうえ、仲尼は(話にくい)互郷の人間を追い返しませんでした」「論語泰伯」。「一體どうして私に子序を拒ませようとするのですか。」子序はこのことを聞いて、一層自ら心を入れ替えて行いを正しくしていき、とうとう最後には行いの正しい人物となつた。彼が巧みに人を教え導いたことは「論語子罕」、みなこのようであつた。

(チ) <sup>25)</sup>其所提拔在無聞之中、若陳元龍・何伯求、終成秀異者六十餘人。

其所臨官、若陳仲弓・夏子治者十餘人、皆名徳也。

<sup>25)</sup> 彼が引き抜き取り立てた者は名聲の無い中にあつたが、陳元龍や何伯求のように、最後には他から抜きんで優れた人物になつた者が

で、清らかであつさりとしており、その立派な器量は飛び抜けて優れており、包容力は廣大で手厚く、他者への誠實な思いやりはあまねく、眞心は純粹で篤いさまは、今の時代の人ではなく、古の三代の時の士人というべきである。漢の始め以来、まだ彼に匹敵する人物は現れていない。』(と言いました)。杜周甫はその通りだと心の底から同意しました。彼郭林宗は私宋仲のお手本なのです。あなたはどうかしてそんなことを言うのですか!」

(テ) 10) 於是勸林宗仕、泰曰、不然也。吾夜觀乾象、晝察人事、天之所廢、

不可支也。方今卦在明夷爻、直勿用之象、潛居利貞之秋也。猶恐滄

海橫流、吾其魚也。吾將巖棲歸神、咀嚼元氣、以修伯陽・彭祖之術、

爲優哉游哉、聊以卒歲者。9) 遂辭王公之命、闔門教授。

10) そこで林宗に仕官することを勧めたが、郭泰は言った、「そうではない。私は夜に天文を観察し、晝に人間世界の動きを調べているが、天が退けようとしているものは、支えることはできないものだ。『左傳定公元年』。今まさに卦は明夷の爻にあり、(君子を)用いない位置に當たっている。これは隠れ住んで(周圍と)調和し、志を正して固める時である。原野にいたのであってもまだ大海があふれ出して自分が魚になってしまうのを恐れるぐらい。『左傳昭公元年』なのだ。私は俗世を離れて岩穴に隠れ住み、靜かに修養を積んで、生命力の根源である元氣をかみなし飲み込んで、伯陽(老子)や彭祖の術を修めることによって、ゆつたりのんびりと過ごして天壽を全う。『詩小雅采芣』しようと思ふ。9) 結局、皇帝や大臣たちのお召しを斷つて、門を閉ざして教授した。

(ト) 12) 泰身長八尺、儀貌魁岸、5) 善談論、6) 聲音如鍾、宵行幽闇、必正其衣服。5) 家有書五千卷、率多圖緯星曆之事。與其等類行、晨則在前、暮則在後。所歷亭傳不處正堂、恆止逆旅之下、先加糞除而後處焉。及宿止、冬讓溫厚、夏讓清涼。如鄉里或有爾者、父母諺曰、欲作郭林宗邪。

12) 郭泰は身長八尺、その風貌は優れて大きく逞しく、5) 議論に優れ、6) 聲色は鐘のようだった。夜の暗闇の中を行く時も、必ずその衣服をきちんと正していた。5) 家には五千卷の書物があり、その大部分は圖讖や緯書、星の運行による占星術や曆法に關するものだった。同輩たちと行く時は、夜明け時には前にいて、日暮れ時には後ろにいた。經巡つた亭や傳置では正殿に滞在せず、いつでも客舎の下に泊まり、まず掃除をしてそれからそこに落ち着いた。宿泊するにあたっては、冬には暖かく居心地の良いところを譲り、夏にはさわやかですすがしいところを譲った。もしその郷里にこのような者がいると、その父母らは笑つて言つた、「郭林宗になりたいのかな?」

## 〔史料6〕 郭泰關連記事佚文對照一覽（二）——范曄『後漢書』關連部分

### 1) 〔出身〕

郭太字林宗、太原界休人也。

蔡邕「郭有道碑文」

先生諱泰、字林宗、太原界休人也。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

郭泰字林宗、太原人也。

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「續漢書」

郭泰字林宗、太原介休人。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

泰字林宗、太原介休人。

### 2) 〔貧〕

家世貧賤。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

家貧、（郡縣欲以爲吏、歎曰、丈夫何能執鞭斗筲哉。）

『太平御覽』卷四八五貧下條所引「郭林宗別傳」

林宗家貧、（初欲遊學無資、就姊夫貸五千錢。乃遠至成臯、從師受業。）

（參考）

『三國志』魏志第十荀攸傳裴松之注所引「漢末名士錄」

（袁）術常於衆坐數（何）顯三罪、曰、：（中略）：郭・賈（彪）寒賔、無他資業、而（何）伯求肥馬輕裘、光耀道路、是三罪也。

### 3) 〔斗筲之役〕

早孤、母欲使給事縣廷。林宗曰、大丈夫焉能處斗筲之役乎。遂辭。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

（家貧）郡縣欲以爲吏、歎曰、丈夫何能執鞭斗筲哉。乃辭母。

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「續漢書」

（郭泰字林宗、太原介休人。）泰少孤。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

少孤養母、年二十、爲縣小吏、喟然嘆曰、大丈夫焉能處斗筲之役。

乃言於母、欲就師問。母對之曰、無資奈何。林宗曰、無用資爲。遂

辭母而行、

#### 4) 「屈伯彥學」

就成阜屈伯彥學、三年業畢、

皇甫謐『高士傳』郭泰條

與同郡宗仲至京師、從屈伯原學春秋、（博洽無不通、又審於人物。由是名著。）

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「續漢書」

年二十、行學至成阜屈伯彥精廬。乏食、衣不蓋形、而處約味道、不改其樂。

『史略』卷二、後漢書、二

司馬彪史云、郭林宗處約味道、不改其樂。

『太平御覽』卷四八五貧下條所引「郭林宗別傳」

（林宗家貧、）初欲遊學無資、就姊夫貸五千錢。乃遠至成阜、從師受業。併日而食、衣不蔽形、常以蓋幅。自鄣出入、入則戶前、出則掩後。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

至成阜屈伯彥精廬。并日而食、衣不蓋形、人不堪其憂、林宗不改其樂。三年之後、藝兼游・夏。

#### 5) 「學問」

博通墳籍。善談論、

蔡邕「郭有道碑文」

遂考覽六經、探綜圖緯。

同上

禮樂是悅、詩書是敦。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

（與同郡宗仲至京師、從屈伯原學春秋、）博洽無不通、（又審於人物。由是名著。）

葛洪『抱朴子』正郭篇（嵇生以爲）

學無不涉、（名重於往代、加之以知人。）

同上（抱朴子答曰）

此人有機辯（風姿、）

同上（抱朴子答曰）

夫林宗學涉（知人、）

同上（諸葛恪亦曰）

街談巷議以爲辯、

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

學問淵深、

同上

家有書五千卷、率多圖緯星曆之事。

## 6) 「容貌①」

美音制。

『太平御覽』卷三八八聲條所引「郭林宗別傳」

(林宗儀兒魁梧、身長八尺、) 音聲如鍾、(當時以爲准的。)

葛洪『抱朴子』正郭篇(抱朴子答曰)

吐聲則餘音見法、

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

(泰身長八尺、儀貌魁岸、善談論、) 聲音如鍾、

## 7) 「見李膺」↓次頁

## 8) 「神仙」

後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯與李膺同舟而濟、衆賓望之、以爲神仙焉。

蔡邕「郭有道碑文」

于時纓綏之徒、紳佩之士、望形表而影附、聆嘉聲而響和者、猶百川之歸巨海、鱗介之宗龜龍也。

同上

洋洋搢紳、言觀其高。

『藝文類聚』卷七一舟條所引「郭林宗別傳」

(林宗遊洛陽、始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善。於是名震京師。) 後歸鄉曲、衣冠諸儒、送至河上、車數千兩。林宗唯與李膺同舟而濟、衆賓望之、以爲神仙焉。

『太平御覽』卷三八〇美丈夫下條所引「郭林宗別傳」

(林宗遊洛陽、見河南尹李膺。膺大奇之、於是名震京師。) 復歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯與膺同舟而濟、衆賓望之以爲神仙焉。

葛洪『抱朴子』正郭篇(抱朴子答曰)

遊步所經、則賢愚波蕩、謂龍鳳之集、奇瑞之出也。

同上(諸葛元遜亦曰)

時俗貴之歛然、猶郭解原涉見趨於曩時也。

同上(周恭遠亦曰)

(而身棲棲) 爲之雄伯、



## 7)〔見李膺〕

乃游於洛陽。始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善、於是名震京師。

蔡邕「郭有道碑文」

（周流華夏、）隨集帝學。收文武之將墜、拯微言之未絕。于時纓綏之徒、紳佩之士、望形表而影附、聆嘉聲而響和者、猶百川之歸巨海、鱗介之宗龜龍也。

同上

洋洋搢紳、言觀其高。

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「續漢書」

李元禮一見稱之曰、吾見士多矣、無如林宗者也。

『史略』卷二、後漢書、二

李元禮曰、吾見士多矣、無如林宗者也。

『藝文類聚』卷七一舟條所引「郭林宗別傳」

林宗遊洛陽、始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善。於是名震京師。

（後歸鄉曲、衣冠諸儒、送至河上、車數千兩。林宗唯與李膺同舟而濟、衆賓望之、以爲神仙焉。）

『太平御覽』卷三八〇美丈夫下條所引「郭林宗別傳」

林宗遊洛陽、見河南尹李膺。膺大奇之、於是名震京師。（復歸鄉里、

衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯與膺同舟而濟、衆賓望之以爲

神仙焉。）

葛洪『抱朴子』正郭篇（抱朴子答曰）

邀集京邑、交關貴游、

同上（抱朴子答曰）

林宗名振於朝廷、敬於一時、三・九肉食、莫不欽重。

同上（抱朴子答曰）

而但養疾京輦、招合賓客、

同上（諸葛元遜亦曰）

時俗貴之欽然、猶郭解原涉見趨於曩時也。

同上（殷伯緒亦曰）

林宗入交將相、（出游方國、崇私議以動衆、）關毀譽於朝廷。

同上（周恭遠亦曰）

（而身棲棲）爲之雄伯、（非救世之宜也。于時雖諸黃門、六畜自寓耳。）其陳蕃・竇武之徒、雖鼎司牧伯、皆貴重林宗、

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

泰、始至京師、（陳留人符融見而嘆曰、高雅奇偉、達見清理、行不苟合、言不夸毗、此異士也。言之於河南尹李膺、）與相見曰、吾見士多矣、未有如郭林宗者也。其聰識通朗、高雅密博、今之華夏鮮見其儔。友而親之。

## 9) 「辟不應」

司徒黃瓊辟、太常趙典舉有道。…(10)「吾觀乾象」…遂並不應。

蔡邕「郭有道碑文」

州郡聞德、虛己備禮、莫之能致。羣公休之、遂辟司徒掾、又舉有道、皆以疾辭。

同上

赫赫三事、幾行其招。委辭召貢、保此清妙。

皇甫謐『高士傳』

後辟司徒府、有道徵、皆不就。

『太平御覽』卷六一三教學條所引「郭林宗別傳」

泰以有道君子徵。(同邑宋子俊勸使往、)泰遂辭以疾、(闔門教授。)

葛洪『抱朴子』正郭篇(嵇生以爲)

太原郭林宗竟不恭三公之命、

同上(抱朴子答曰)

林宗名振於朝廷、敬於一時、三・九肉食、莫不欽重。…(中略)…

其距貢舉者、誠高操也。

同上(殷伯緒亦曰)

林宗入交將相、(出游方國、崇私議以動衆、)關毀譽於朝廷。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

遂辭王公之命、(闔門教授。)

## 10) 「吾觀乾象」

或勸林宗仕進者、對曰、吾夜觀乾象、晝察人事、天之所廢、不可支也。

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「續漢書」

初以有道君子徵。泰曰、吾觀乾象・人事、天之所廢、不可支也。遂辭以疾。

『太平御覽』卷六一三教學條所引「郭林宗別傳」

(泰以有道君子徵。)同邑宋子俊勸使往、(泰遂辭以疾、闔門教授。)

葛洪『抱朴子』正郭篇(抱朴子答曰)

或勸之以出仕進者。林宗對曰、吾晝察人事、夜看乾象、天之所廢、

不可支也。方今運在明夷之爻、值勿用之位、蓋盤桓潛居之時、非在

天利見之會也。雖在原陸、猶恐滄海橫流、吾其魚也。況可冒衝風而

乘奔波乎。未若巖岫頤神、娛心彭・老、優哉游哉、聊以卒歲。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

於是勸林宗仕、泰曰、不然也。吾夜觀乾象、晝察人事、天之所廢、

不可支也。方今卦在明夷爻、直勿用之象、潛居利貞之秋也。猶恐滄

海橫流、吾其魚也。吾將巖棲歸神、咀嚼元氣、以修伯陽・彭祖之術、

爲優哉游哉、聊以卒歲者。

## 11) 「知人①」

性明知人、好獎訓士類。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

(博洽無不通) 又審於人物。(由是名著。)

葛洪『抱朴子』正郭篇(嵇生以爲)

(學無不涉、名重於往代) 加之以知人。

同上(抱朴子答曰)

夫林宗(學涉)知人、(非無分也。)

同上(抱朴子答曰)

雖云知人、知人之明、乃唐・虞之所難、尼父之所病。

同上(抱朴子答曰)

徒能知人、(不肯薦舉、)

## 12) 「容貌②」

身長八尺、容貌魁偉、褰衣博帶、

皇甫謐『高士傳』郭泰條

(郭泰字林宗、太原人也。少事父母、以孝聞。) 身長八尺餘。

『太平御覽』卷三八八聲條所引「郭林宗別傳」

林宗儀兒魁梧、身長八尺、(音聲如鍾、當時以爲准的。)

『太平御覽』卷三八八色條所引「郭子別傳」

林宗秀立高時、儼然淵淳。(蔡伯喈告盧子幹・馬日磾曰、爲天下作

碑銘多矣。未嘗不有慙色、唯郭先生碑頌、無愧色耳。)

葛洪『抱朴子』正郭篇

林宗拔萃翹特、

同上(抱朴子答曰)

此人有(機辯)風姿、

同上(抱朴子答曰)

符采外發、

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

泰身長八尺、儀貌魁岸、善談論、(聲音如鍾、)

### 13) 〔周遊〕 周遊郡國。

蔡邕「郭有道碑文」

周流華夏、隨集帝學。

葛洪『抱朴子』正郭篇（嵇生以爲）

及在衰世、棲棲惶惶、席不暇溫、

同上（抱朴子答曰）

彰惶不定、

同上（抱朴子答曰）

而乃自西徂東、席不暇溫、

同上（殷伯緒亦曰）

出游方國、

同上（周恭遠亦曰）

而身棲棲（爲之雄伯、）

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

於是仰慕仲尼、俯則孟軻、周流華夏、採諸幽滯。

### 14) 〔林宗巾〕

嘗於陳梁閒行遇雨、巾一角墊、時人乃故折巾一角、以爲林宗巾。其見慕皆如此。

蔡邕「郭有道碑文」

（周流華夏、）隨集帝學。收文武之將墜、拯微言之未絕。于時纓綏

之徒、紳佩之士、望形表而影附、聆嘉聲而響和者、猶百川之歸巨海、鱗介之宗龜龍也。

同上

洋洋搢紳、言觀其高。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

於陳梁之間、步行遇雨、巾一角墊。衆人慕之、皆折巾角。士爭往從

之、載策盈車。

『太平御覽』卷六八七巾條所引「郭林宗別傳」

林宗嘗行陳梁閒、遇雨、故其巾一角沾而折。二國學士着巾、莫不折

其角、云作林宗巾。其見儀則如此。

『藝文類聚』卷六七巾帽條所引「郭林宗別傳」

林宗常行陳梁之間、遇雨。故其巾一角濡而折。二國學士著巾、莫不

折其角、云作林宗巾。其見儀則如此。

葛洪『抱朴子』正郭篇（抱朴子答曰）

故能挾之見（准）〔推〕慕於亂世、

同上（抱朴子答曰）

故遭雨巾壞、猶復見恟。

同上（諸葛元遜亦曰）

時俗貴之歛然、猶郭解原涉見趨於曩時也。

同上（周恭遠亦曰）

（而身棲棲）爲之雄伯、（非救世之宜也。）

### 15) 「范滂の評價」

或問汝南范滂曰、郭林宗何如人。滂曰、隱不違親、貞不絕俗、天子不得臣、諸侯不得友、吾不知其它。

### 16) 「母憂」

後遭母憂、有至孝稱。

蔡邕「郭有道碑文」

孝友溫恭、

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

遭母憂、歐血發病、歷年乃瘳。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

少事父母、以孝聞。

同上

以母喪歸。

『太平御覽』卷五六一弔條所引「續漢書」

(郭太字林宗、退身隱居、教授徒衆、甚盛。)喪母友人或千里來弔之。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

後遭母憂、喪過于哀。

### 17) 「不爲危言」

林宗雖善人倫、而不爲危言覈論、故宦官擅政而不能傷也。

(參考)

『三國志』吳志十二陸瑁傳

時尚書暨豔盛明臧否、差斷三署、頗揚人闇昧之失、以顯其譴。瑁與書曰、夫聖人嘉善矜愚、忘過記功、以成美化。加今王業始建、將一大統、此乃漢高棄瑕錄用之時也、若令善惡異流、貴汝潁月旦之評、誠可以厲俗明教、然恐未易行也。宜遠模仲尼之汎愛、中則郭泰之弘濟、近有益於大道也。豔不能行、卒以致敗。

『太平御覽』卷四四七品藻下條所引「姚信士緯」

平議之士、若季札・趙武逮于林宗、皆可盡爲則也。其洩治・伯宗及末世史雲・子將之屬、皆美而未善。聖人考功默陟、猶以三載。而子將月旦之處、史雲睚眦廢人。其觀進者或飾虛、其怠沮者皆離叛。識誠可謂妙矣、然非洙泗之風、三千之弘化。

### 18) 「黨事」

及黨事起、知名之士多被其害、唯林宗及汝南袁閎得免焉。



## 19) 〔閉門教授〕

遂閉門教授，弟子以千數。

蔡邕「郭有道碑文」

爾乃潛隱衡門、收朋勤誨、童蒙賴焉、用祛其蔽。

同上

棲遲泌丘、善誘能教。

『太平御覽』卷五六一弔條所引「續漢書」

郭太字林宗、退身隱居、教授徒衆、甚盛。（喪母友人或千里來弔之。）

『太平御覽』卷六一三教學條所引「郭林宗別傳」

（泰以有道君子徵。同邑宋子俊勸使往、泰遂辭以疾、闔門教授。

## 20) 〔野哭〕

建寧元年、太傅陳蕃・大將軍竇武爲閹人所害、林宗哭之於野、慟。既而歎曰、人之云亡、邦國殄瘁。瞻烏爰止、不知于誰之屋耳。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

三君八雋之死、郭泰私爲之慟曰、人之云亡、邦國殄瘁、漢室滅矣。未知、瞻烏爰止、于誰之屋。

## 21) 〔早卒〕

明年春、卒于家、時年四十二。四方之士千餘人、皆來會葬。

蔡邕「郭有道碑文」

稟命不融、享年四十有二、以建寧二年正月乙亥卒。（凡我四方同好之人、永懷哀悼、靡所實念。）

同上

降年不永、民斯悲悼。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

泰以建寧二年正月卒、自弘農函谷關以西、河內湯陰以北、二千里負笈荷擔彌路、柴車輦裝塞塗、蓋有萬數來赴。

『水經注』卷六汾水注

陳留蔡伯喈・范陽盧子幹・扶風馬日碑等、遠來奔喪、持朋友服。心喪期年者、如韓子助・宋子浚等二十四人。其餘門人、著錫衰者千數。

（其碑文故蔡伯喈謂盧子幹・馬日碑曰、吾爲天下碑文多矣、皆有慚容、惟郭有道無愧于色矣。）

## 22) 「蔡邕爲碑文」

同志者乃共刻石立碑、蔡邕爲其文、既而謂涿郡盧植曰、吾爲碑銘多矣、皆有慙德。唯郭有道無愧色耳。

蔡邕「郭有道碑文」

凡我四方同好之人、永懷哀悼、靡所寘念。乃相與惟先生之德、以謀不朽之事。僉以爲先民既沒、而德音猶存者、亦賴之於見述也。今其如何而闕斯禮。於是樹碑表墓、昭銘景行、俾芳烈奮于百世、令問顯於無窮。

同上

爰勒茲銘、擢其光耀。

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「續漢書」

及卒、蔡伯喈爲作碑、曰、吾爲人作銘、未嘗不有慙容、唯爲郭有道碑頌無愧耳。

※『太平廣記』卷一六九所引「世說」では「蔡伯喈告盧子幹・馬日磾曰、吾爲人作銘、……」

とあり、余嘉錫は「疑所引即是此注、其詳略不同者、今本已爲宋人所刊削故也。」と述べる。

『世說新語箋疏』五頁參照。

『史略』卷二、後漢書、二一

及卒、蔡伯喈爲作碑、曰、吾爲人作銘、未嘗不有慙容、唯爲郭有道碑頌無愧耳。

『太平御覽』卷三八八色條所引「郭子別傳」

林宗秀立高峙、詹然淵淳。蔡伯喈告盧子幹・馬日磾曰、爲天下作碑銘多矣。未嘗不有慙色、唯郭先生碑頌、無愧色耳。

『水經注』卷六汾水注

（陳留蔡伯喈・范陽盧子幹・扶風馬日磾等、遠來奔喪、持朋友服。

心喪期年者、如韓子助・宋子浚等二十四人。其餘門人、著錫衰者千數。）其碑文故蔡伯喈謂盧子幹・馬日磾曰、吾爲天下碑文多矣、皆有慙容、惟郭有道無愧于色矣。

## 23) 「知人②」

其獎拔士人、皆如所鑒。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

泰之所名、人品乃定、先言後驗、衆皆服之。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

（凡泰知之于無名之中、六十餘人。）皆先言後驗。

『世說新語』政事第三劉孝標注所引「泰別傳」

泰字林宗、有人倫鑒識。

葛洪『抱朴子』正郭篇（抱朴子答曰）

鑒識朗徹、

同上（抱朴子答曰）

見無不了、

## 24) 「附益増張・獎拔された士人の實例」

後之好事、或附益増張、故多華辭不經、又類卜相之書。今錄其章章效於事者、著之篇末。

葛洪『抱朴子』正郭篇（抱朴子答曰）

且好事者爲之羽翼、延其聲譽於四方。

同上（抱朴子答曰）

而爲過聽不覈實者所推策。

同上（抱朴子答曰）

然則名稱重於當世、美談盛於既沒、故其所得者、則世共傳聞。而所失者、則莫之有識爾。

同上（諸葛元遜亦曰）

後進慕聲者、未能考之於聖王之典、論之於先賢之行、徒或華名、咸競準的、學之者如不及、談之者則盈耳。

## A) 「左原」

左原者、陳留人也。爲郡學生、犯法見斥。林宗嘗遇諸路、爲設酒肴以慰之。謂曰、昔顏涿聚梁甫之巨盜、段干木晉國之大跽、卒爲齊之忠臣、魏之名賢。遽瑗・顏回尚不能無過、況其餘乎。慎勿恚恨、責躬而已。原納其言而去。或有譏林宗不絕惡人者。對曰、人而不仁、疾之以甚、亂也。原後忽更懷忿、結客欲報諸生。其日林宗在學、原愧負前言、因遂罷去。後事露、衆人咸謝服焉。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

初泰嘗止陳留學宮、學生左原犯事斥逐、泰具酒食勞原於路側、謂之曰、昔顏涿聚梁甫之大盜、段干木晉國之大跽、卒爲齊之忠臣、魏之名賢。且遽伯玉・顏子淵猶有過、誰能無乎。慎勿恨之、責躬而已。或曰、何爲禮慰小人。泰曰、諸君黜人、不託以藜蒸、無有掩惡含垢之義。人而不仁、疾之已甚、亂也。吾懼其致害、故訓之。後原結客謀構己者、至期曰、林宗在此、負其前言。於是去。後事發露、衆人咸自以蒙更生之賜於泰。

## B) 「茅容」

茅容字季偉、陳留人也。年四十餘、耕於野、時與等輩避雨樹下、衆皆夷踞相對、容獨危坐愈恭。林宗行見之而奇其異、遂與共言、因請寓宿。旦日、容殺雞爲饌、林宗謂爲已設、既而以供其母、自以草蔬與客同飯。林宗起拜之曰、卿賢乎哉。因勸令學、卒以成德。

『太平御覽』卷八四七食上條所引「謝承後漢書」

茅容字季偉、陳留人。與等輩避西樹下、衆皆箕踞相對、容危坐愈恭。

郭林宗見而奇之、共與言、因請寓宿。旦日容殺鷄爲黍、林宗謂爲已設、既而以供其母、自以菜蔬與林宗同飯。林宗起拜之曰、卿賢乎哉。因勸令學卒以成德也。

『初學記』卷十七恭敬條所引「謝承後漢書」

茅容字季偉、陳留人也。年四十餘、耕於野。時與等輩避雨樹下、衆皆箕踞相對、容危坐愈恭。郭林宗見而奇之。

※本文は「茅容危坐」

『北堂書鈔』卷一四三酒食部二惣篇一所引「謝承後漢書」

茅容避雨樹下、危坐逾恭。郭林宗見而奇之、因請宿。

※本文は「茅容菜蔬同飯」

『太平廣記』卷二三四茅容條所引「陳留耆舊傳」

後漢茅容、字季偉、郭林宗曾寓宿焉。及明旦、容殺鷄爲饌。林宗初以爲已設、既而容獨以供母、自以草蔬與客同飯。林宗因起拜之曰、卿賢乎哉。勸之就學、意以成德。

『太平御覽』卷四一四孝下條所引「郭林宗別傳」

茅容字季偉、陳留人。年四十餘、耕於野、時與等輩避雨樹下。衆皆

夷踞、容獨危坐。惟林宗見而奇異、與共言、因請寓宿。旦日、容煞雞爲饌。林宗爲已設、既而以供其母、自以菜蔬、與容同飯。林宗起拜之曰、卿賢乎哉。因勸令學、卒以成德。

『藝文類聚』卷二〇孝條所引「郭林宗別傳」

茅容耕於野、避雨樹下、衆皆夷踞相對、獨容危坐愈恭。林宗行、見而奇之、與言、因請寓宿。既而日夕、容殺雞爲饌、林宗謂爲已設。既而以供其母、自以菜蔬供客同飯。林宗起拜曰、卿賢乎我哉。

『太平御覽』卷四四四知人下條所引「郭林宗別傳」

（郭泰字林宗、入潁川則友李元禮、至陳留則結符偉明、之外黃則親韓子助、過蒲亭則師仇季智、止學舍則收魏德公、）觀耕者則拔茅季偉、皆爲名士。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

陳留茅容、年四十矣、親耕隴畝、避雨樹下。衆人悉踐蹲、容獨釐膝危坐。泰奇其異、請問舍所在、因寄宿。容明旦殺鷄作食、泰謂之爲己也。容分半食母、餘半度置、自與泰素餐。泰曰、卿賢哉遠矣。郭泰猶減三牲之具以供賓旅、而卿如此、乃我友也。起對之揖、勸令學問、卒成盛德。

## C) 〔孟敏〕

孟敏字叔達，鉅鹿楊氏人也。客居太原。荷甌墮地，不顧而去。林宗見而問其意。對曰，甌以破矣，視之何益。林宗以此異之，因勸令遊學。十年知名，三公俱辟，並不屈云。

『世說新語』黜免第二十八劉孝標注所引「郭林宗別傳」

鉅鹿孟敏字叔達，敦朴質直。客居太原，雜處凡俗，未有所名。嘗至市買甌，荷擔墮地壞之，徑去不顧。適遇林宗，見而異之，因問曰，壞甌可惜，何以不顧。客曰，甌既已破，視之何益。林宗賞其介決，因以知其德性，謂必爲美士，勸令讀書。遊學十年，遂知名，三府並辟，不就。東夏以爲美賢。

『太平御覽』卷七五七甌條所引「郭林宗別傳」

鉅鹿孟敏容居太原，林宗見而問之，對曰，甌已破矣，視之無益。林宗以其分決，勸使學，果爲美士。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

鉅鹿孟敏字叔達，客居太原，未有知名。叔達曾至市，買甌，荷擔墮地，徑去不顧。時適遇林宗，林宗異而問之，甌破可惜，何以不顧。叔達曰，甌既已破，視之無益。林宗以爲有分決，與之言，知其德性，謂必爲善士，勸使讀書。游學十年，知名當世。其宗人犯法，恐至大辟，父老令至縣請之。叔達曰，犯法當死，不應死自活。此明理也，何請之有。父老董敦之曰，儻其死者，此大事也，奈何以宜適而不受邪。叔達不得已，乃行見楊氏令，不言而退。令曰，孟徵君高雅絕世，雖其不言，吾爲原之矣。

『世說新語』黜免第二十八

鄧竟陵（即鄧遐）免官後赴山陵，過見大司馬桓公（即桓溫）。公問之曰，卿何以更瘦。鄧曰，有愧於叔達（即孟敏），不能不恨於破甌。

## D) 〔庾乘〕

庾乘字世遊，潁川鄆陵人也。少給事縣廷爲門士。林宗見而拔之，勸遊學官，遂爲諸生傭。後能講論，自以卑第，每處下坐，諸生博士皆就讎問，由是學中以下坐爲貴。後徵辟並不起，號曰徵君。

## E) 〔宋果〕

宋果字仲乙，扶風人也。性輕悍，意與人報讎，爲郡縣所疾。林宗乃訓之義方，懼以禍敗。果感悔，叩頭謝負，遂改節自勅。後以烈氣聞，辟公府、侍御史、并州刺史，所在能化。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

宋果字仲文。

※范書本文「宋果字仲乙，扶風人也。」李賢注「謝承書，乙作文。」



## F)〔賈淑〕

賈淑字子厚，林宗鄉人也。雖世有冠冕，而性險害，邑里患之。林宗遭母憂，淑來修弔，既而鉅鹿孫咸直亦至。咸直以林宗實而受惡人弔，心怪之，不進而去。林宗追而謝之曰：「賈子厚誠實凶德，然洗心向善。仲尼不逆互鄉，故吾許其進也。」淑聞之，改過自厲，終成善士。鄉里有憂患者，淑輒傾身營救，爲州閭所稱。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

（賈）淑爲舅宋瑗報讎於縣中，爲吏所捕，繫獄當死。泰與語，淑懇惻流涕。泰詣縣令應操，陳其報怨蹈義之士。被赦，縣不宥之，郡上言，乃得原。

『太平御覽』卷五六一弔條所引「郭太別傳」

賈淑字子厚，林亭鄉人。雖世有冠冕，而性險害，邑里患之。林宗遭母憂，淑來弔之。而鉅鹿孫咸直亦至。咸直以林宗實，而受惡人弔，心怪之，不進而去。林宗遽追而謝曰：「賈子厚誠凶德，然洗心同善，仲尼不逆互鄉，故許其進也。」淑聞之，改過自厲，終成善士。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

鉅鹿孫咸直來弔，既而介休賈子序亦來弔，林宗受之。咸直不辭而去，門人告之。林宗遣人追之曰：「何去之疾也。」咸直曰：「君天下名士，門無雜賓，而受惡人之唁，誠失其所望，是以去耳。」林宗曰：「宜先相問，何以便去邪。」鄉里賈子序者，實有徇險之行，爲國人所棄。聞我遭喪，而洗心來弔，此亦未被大道之訓，而有修善之志也，吾故受之。若其遂變化者，棄損物更爲貴用。如其不然，不保其往也。且仲尼不逆互鄉，奈何使我拒子序也。子序聞之，更自革修，終成善人。其善誘皆

此類也。

## G)〔史叔賓〕

史叔賓者，陳留人也。少有盛名。林宗見而告人曰：「牆高基下，雖得必失。後果以論議阿枉敗名云。」

## H)〔黃允〕

黃允字子文，濟陰人也。以儻才知名。林宗見而謂曰：「卿有絕人之才，足成偉器。然恐守道不篤，將失之矣。」後司徒袁隗欲爲從女求婚，見允而歎曰：「得婿如是足矣。」允聞而黜遣其妻夏侯氏。婦謂姑曰：「今當見弃，方與黃氏長辭，乞一會親屬，以展離訣之情。」於是大集賓客三百餘人，婦中坐，攘袂數允隱匿穢惡十五事，言畢，登車而去。允以此廢於時。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

泰謂濟陰黃元艾曰：「卿高才絕人，足爲偉器。然年過四十，名聲著矣。於此際當自匡持，不然將失之矣。」元艾笑曰：「但恐才力不然，至此年矣。若如所勸，敢自克保，庶不有累也。」林宗曰：「吾言方驗，卿其慎之。」元艾聲聞遂隆，後見司徒袁隗，隗歎其英異曰：「若索女壻，如此善矣。」有人以隗言告元艾，又自生意謂之曰：「袁公有女，得無欲嫁與卿乎？」元艾婦夏侯氏有三子，便遣歸家，將黜之，更索隗女也。夏侯氏父母曰：「婦人見去，當分釵斷帶，請還之。」遂還。元艾爲主人請親屬及賓客二十餘人，夏侯氏便於座中攘臂大呼，數元艾隱匿穢惡十五事。曰：「吾早欲棄卿去，而情所未忍耳，今反黜我。遂越席而去。」元艾諸事悉發露，由此之故廢棄當世。其弘明善惡，皆此類也。

## I)〔謝甄〕

謝甄字子微，汝南召陵人也。與陳留邊讓並善談論，俱有盛名。每共候林宗，未嘗不連日達夜。林宗謂門人曰：「二子英才有餘，而並不入道，惜乎。甄後不拘細行，爲時所毀。讓以輕侮曹操，操殺之。」

『世說新語』賞譽第八劉孝標注所引「汝南先賢傳」

謝甄字子微，汝南邵陵人。明識人倫，雖郭林宗不及甄之鑒也。

『太平御覽』卷四四知人下條所引「汝南先賢傳」

謝甄稟氣聰爽，明識達理。

『北堂書鈔』卷九八談講所引「汝南先賢傳」

謝眞，字子微，與陳邊讓並善談論，俱有名。

※本文、「謝甄邊讓並善談論」

## J)〔王柔〕

王柔字叔優，弟澤字季道，林宗同郡晉陽縣人也。兄弟總角共候林宗，以訪才行所宜。林宗曰：「叔優當以仕進顯，季道當以經術通，然違方改務，亦不能至也。後果如所言，柔爲護匈奴中郎將，澤爲代郡太守。」

陳壽『三國志』魏書二七王昶傳裴松之注所引「郭林宗傳」

叔優・季道幼少之時，聞林宗有知人之鑒，共往候之，請問才行所宜，以自處業。林宗笑曰：「卿二人皆二千石才也，雖然，叔優當以仕宦顯，季道宜以經術進，若違才易務，亦不至也。叔優等從其言。叔優至北中郎將，季道代郡太守。」

『太平御覽』卷二四一北中郎將條所引「郭泰別傳」

王叔優問才之所宜，泰曰：「當以武官顯，叔優後至北中郎將。」

## 25)〔六十人成名〕↓(iii)交友も参照

又識張孝仲芻牧之中，知范特祖郵置之役，召公子・許偉康並出屠酤，司馬子威拔自卒伍，及同郡郭長信・王長文・韓文布・李子政・曹子元・定襄周康子・西河王季然・雲中丘季智・郝禮眞等六十人，並以成名。

『太平御覽』卷八二八肆條所引「謝承後漢書」

郭泰拔申屠子龍於漆工之中，嘉許偉康於屠酤之肆。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

太原郭長信・王長文・長文弟子師・韓文布・李子政・曹子元・定襄周康子・西河王季然・雲中丘季智名靈舉。子師位至司徒，季然北地太守，其餘多典州郡者。

皇甫謐『高士傳』郭泰條

凡泰知之于無名之中，六十餘人。（皆先言後驗。）

『世說新語』政事第三劉孝標注所引「泰別傳」

泰字林宗，有人倫鑒識。題品海內之士，或在幼童，或在里肆，後皆成英彥六十餘人。自著書一卷，論取士之本，未行，遭亂亡失。

袁宏『後漢紀』卷二三孝靈皇帝紀上建寧二年條

其所提拔在無聞之中，若陳元龍・何伯求，終成秀異者六十餘人。其所臨官，若陳仲弓・夏子治者十餘人，皆名德也。

26)〔論曰〕

論曰、莊周有言、人情險於山川、以其動靜可識、而沈阻難徵。故深厚之性、詭於情貌。則哲之鑒、惟帝所難。而林宗雅俗無所失、將其明性特为主乎。然而遜言危行、終享時晦、恂恂善導、使士慕成名、雖墨・孟之徒、不能絕也。

葛洪『抱朴子』正郭篇（嵇生以爲）

知人則哲、蓋亞聖之器也。（及在衰世、棲棲惶惶、席不暇溫、志在乎匡亂行道、）與仲尼相似。

〔史料7〕 郭泰關連記事佚文對照一覽（二）——袁宏『後漢紀』關連部分

（エ）〔宋仲と郭泰〕

同邑宋仲、字雋、有高才、諷書日萬言。與相友善、閒居逍遙。泰謂仲曰、蓋昔之君子會友輔仁、夫周而不比、群而不黨、皆始於將順、終于匡救。濟俗變教、隆化之道也。

（才）Ⅰα〔見符融〕

泰、始至京師、（陳留人符融見而嘆曰、高雅奇偉、達見清理、行不苟合、言不夸毗、此異士也。言之於河南尹李膺、

『太平御覽』卷五〇二逸民二條所引「謝沈後漢書」

符融字偉明、少爲都官郎、耻之、委去。私事少府李膺、膺常貴融。

同上（抱朴子答曰）

（而乃自西徂東、席不暇溫、）欲慕孔・墨棲棲之事。

同上（抱朴子答曰）

（雖云知人、）知人之明、乃唐・虞之所難、尼父之所病。夫以明竝日月、原始見終、且猶有失、不能常中。況於林宗螢燭之明、得失半解、已爲不少矣。

同上（周恭遠亦曰）

昔四豪似周公而不能爲周公、今林宗似仲尼而不得爲仲尼也。

范曄『後漢書』列傳五八符融列傳

融幅巾褐衣、振袖清談、膺捧手高聽、歎息不暇。郭林宗始入京師、詣融、融一見、與定至交。海內服融高識。公府連徵不就。

郭林宗始入京師、時入莫識、（符）融一見嗟服、因以介於李膺、由是知名。

（才）Ⅰβ〔見韓卓〕

陳留人韓卓、有知人之鑒、融見卓、以己言告之。卓曰、此太原士也。他日又以泰言告之、卓曰、四海內士也。吾將見之。於是驟見泰、謂融曰、此子神氣冲和、言合規矩、高才妙識、罕見其倫。

〔キ〕〔見仇香〕

陳留蒲亭亭長仇香年已長矣、泰見香在而言之、明日起朝之、曰、君泰之師、非泰之友。

范曄『後漢書』列傳六六循吏列傳・仇覽傳

後（符）融以告郭林宗、林宗因與融齎刺就房謁之、遂請留宿。林宗嗟歎、下牀爲拜。

〔ケ〕〔童子魏昭〕

嘗止陳國、文孝童子魏昭求入其房供給灑掃、泰曰、年少當精義書、曷爲求近我乎。昭曰、蓋聞經師易遇、人師難遭、故欲以素絲之質附近朱藍耳。泰美其言、聽與共止。嘗不佳、夜後命昭作粥、粥成進泰、泰一呵之曰、爲長者作粥、不加意敬、使不可食。以杯擲地、昭更爲粥重進、泰復呵之。如此者三、昭姿無變容、顏色殊悅。泰曰、吾始見子之面、而今而後、知卿心耳。遂友而善之。

『事類賦注』卷十寶貨部二絲條所引「漢記」

童子魏昭求入事郭泰、供給灑掃。泰曰、當精義講書、何來相近。昭曰、經師易獲、人師難遭、欲以素絲之質附近朱藍。

※本文は「唯朱藍之是染」

『太平御覽』卷八五九糜粥條所引「郭林宗傳」

林宗嘗止陳國文學、見童子魏德公、知其有異。德公求近其房、止供給洒掃。林宗嘗不佳、夜中命作粥。德公爲之進焉。林宗一啜怒而呵之曰、高明爲長者作粥不如意、使沙不可食、以杯擲地。德公更爲粥三進、三呵。德公姿無變容、顏色殊悅。林宗乃曰、始見子之面、今乃知卿心。遂友善之、卒爲妙士。

〔サ〕「袁奉高と黄叔度」

初汝南袁閔盛名蓋世、泰見之不宿而退。汝南黄憲邦邑有聲、天下未重。泰見之、數日乃去。薛恭祖曰、聞足下見袁奉高、車不停軌、鑾不輟輓。從黄叔度乃彌日信宿、非其望也。林宗答曰、奉高之器、譬諸汎濫、雖清易挹。叔度汪汪如萬頃之波、澄之而不清、撓之而不濁、其器深廣、難測量也。雖住稽留、不亦可乎。由是憲名重於海內。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

初、太始至南州、過袁奉高、不宿而去。從叔度、累日不去。或以問太。太曰、奉高之器、譬之汎濫、雖清而易挹。叔度之器、汪汪若千頃之陂、澄之不清、擾之不濁、不可量也。已而果然、太以是名聞天下。

『藝文類聚』卷九陂條所引「續漢書」

郭泰入汝南、交黄叔度。至南州、先過袁奉高、不宿而去。從叔度累日。或以問泰、泰曰、袁奉高之器、譬諸軌濫、雖清而易挹也。叔度之器、汪汪若萬頃之陂、澄之而不清、混之而不濁、不可量也。

『太平御覽』卷七二陂條所引「續漢書」

郭林宗交汝南黄叔度。過袁奉高、不宿而去。泰曰、叔度之器、汪汪若萬頃之陂、澄之而不清、撓之而不濁、不可量也。

『世說新語』卷一德行篇劉孝標注所引「泰別傳」

薛恭祖問之、泰曰、奉高之器、譬諸汎濫、雖清易挹也。

范曄『後漢書』列傳四三黄憲列傳李賢注所引「郭泰別傳」

時林宗過薛恭祖、恭祖問曰、聞足不見袁奉高、車不停軌、鑾不輟輓、從叔度乃彌信宿也。

『太平御覽』卷四四四知人下條所引「郭林宗別傳」

至汝南見袁閔、不宿而去。從黄憲、三日乃去。過新蔡、薛勲問之曰、足下見袁奉高、不宿而去。從黄叔度、乃彌日。何也。泰曰、奉高之流、雖清而易挹。叔度汪汪若千畝之陂、澄之不清、撓之而不濁、難測量也。

『太平御覽』卷四四六品藻中條所引「郭泰別傳」

泰字林宗、少遊汝南、先過袁閔、不宿而退。往從黄憲、累日方還。或問林宗、林宗曰、奉高之器譬諸汎濫、雖清而易挹。叔度汪汪君子、若千頃陂。澄之不清、撓之不濁、不可量也。

『藝文類聚』卷二二品藻條所引「郭泰別傳」

泰字林宗、少遊汝南。先過袁閔、不宿而退。遂往從黄憲、累日方還。或問林宗、林宗曰、奉高之器、譬諸汎濫、雖清而易挹。叔度汪汪君子、若千萬頃陂。澄之不清、混之不濁、不可量也。

『世說新語』德行第一

郭林宗至汝南造袁奉高、車不停軌、鑾不輟輓。詣黄叔度、乃彌日信宿。人問其故。林宗曰、叔度汪汪如萬頃之陂。澄之不清、擾之不濁、其器深廣、難測量也。

范曄『後漢書』列傳四三黄憲列傳

郭林宗少游汝南、先過袁閔、不宿而退。進往從（黄）憲、累日方還。或以問林宗。林宗曰、奉高之器、譬諸汎濫、雖清而易挹。叔度汪汪若千頃陂、澄之不清、淆之而不濁、不可量也。



## (シ) 「生芻一束」

徐孺子荷擔來弔、以生芻一束頓廬前、既唁而退。或問、此誰也。林宗曰、南州高士徐孺子者、其人諸生、吾不堪其喻也。

皇甫謐『高士傳』郭泰條 \*綱鑑・カツコ内 注記については〔史料3〕参照。

徐稚來弔（弔）、以生芻一束、頓泰廬前、而去。泰曰、（此必）南州高士徐孺子也。詩曰（不云乎）、生芻一束、其人如玉。吾不堪此喻耳。

『太平御覽』卷五六一弔條所引「郭太別傳」

又林宗有母喪、徐稚往弔、置生芻一束於廬前、而去。林宗曰、此必南州徐孺子也。詩不云乎、生芻一束、其人如玉。吾無德以堪之。

范曄『後漢書』列傳四三徐穉列傳

及（郭）林宗有母憂、穉往弔之、置生芻一束於廬前而去。衆怪、不知其故。林宗曰、此必南州高士徐孺子也。詩不云乎、生芻一束、其人如玉。吾無德以堪之。

## (ツ) 「石雲考と宋子俊」

石雲考從容謂宋子俊曰、吾與子不及郭生、譬諸由・賜不敢望回也。今卿言稱宋・郭、此河西之人疑卜商於夫子者也。若遇曾參之詰、何辭以對乎。子俊曰、魯人謂仲尼東家丘、蕩蕩體大、民不能名、子所明也。陳子禽以子貢賢於仲尼、淺見之言、故然有定邪。吾嘗與杜周甫論林宗之德也、清高明雅、英達瓌璋、學問淵深、妙有俊才。然其慍悌玄澹、格量高俊、含弘博恕、忠粹篤誠、非今之人、三代士也。漢元以來未見其匹也。周甫深以爲然。此乃宋仲之師表也、子何言哉。

## (ト) 「平生のふるまい」

（泰身長八尺、儀貌魁岸、善談論、聲音如鍾、）宵行幽闇、必正其衣服。（家有書五千卷、率多圖緯星曆之事。）與其等類行、晨則在前、暮則在後。所歷亭傳不處正堂、恆止逆旅之下、先加糞除而後處焉。及宿止、冬讓溫厚、夏讓清涼。如鄉里或有爾者、父母諺曰、欲作郭林宗邪。

葛洪『抱朴子』正郭篇（抱朴子答曰）

（吐聲則餘音見法、）移足則遺迹見擬。

## 〔史料8〕 郭泰關連記事佚文對照一覽（三）

## その他

### （i）〔許・郭〕

『太平御覽』卷四四二知人上條所引「謝承後漢書」

許邵字子將、汝南平輿人。清論風行、高唱草偃、多所賞識、拔樊子昭於未聞。天下咸稱許・郭。

### （ii）〔鄉人拜〕

『太平御覽』卷五四二拜條所引「郭太別傳」

鄉人見太、皆於牀下拜。

### （iii）〔交友〕↓〔史料6〕25六十人成名も參照

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「謝承書」

故適陳留則友符偉明、遊太學則師仇季智、之陳國則親魏德公、入汝南則交黃叔度。

『太平御覽』卷四〇九交友四條所引「郭林宗別傳」

郭泰字林宗、入潁川則友李元禮、至陳留則結符偉明、之外黃則親韓子助、過蒲亭則師仇季智也。

『太平御覽』卷四四四知人下條所引「郭林宗別傳」

郭泰字林宗、入潁川則友李元禮、至陳留則結符偉明、之外黃則親韓子助、過蒲亭則師仇季智、止學舍則收魏德公、觀耕者則拔茅季偉、皆爲名士。

### （iv）〔刺盈車〕

皇甫謐『高士傳』郭泰條

士爭往從之、載策盈車。

范曄『後漢書』列傳五八郭太列傳李賢注所引「泰別傳」

泰名顯、士爭歸之、載刺常盈車。

『太平御覽』卷六〇六刺條所引「郭林宗別傳」

林宗名益顯、士爭歸之、載刺常盈車。

葛洪『抱朴子』正郭篇（抱朴子答曰）

巷結朱輪之軌、堂列赤紱之客、輶車盈街、載（奏）〔刺〕連車。

### （v）〔衛茲〕

陳壽『三國志』魏書二二衛臻傳裴松之注所引「郭林宗傳」

（衛）茲弱冠與同郡圈文生俱稱盛德。林宗與二人共至市、子許買物、隨價讎直、文生訾呵、減價乃取。林宗曰、子許少欲、文生多情、此二人非徒兄弟、乃父子也。後文生以穢貨見損、茲以烈節垂名。

### （vi）〔苑康〕

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳・苑康傳

苑康字仲眞、勃海重合人也。少受業太學、與郭林宗親善。

## (vii) [王允]

『三國志』魏志第六董卓傳裴松之注所引「張璠漢紀」

允字子師、太原祁人也。少有大節、郭泰見而奇之、曰、王生一日千里、王佐才也。泰雖先達、遂與定交。

『藝文類聚』卷二二品藻條所引「袁山松後漢書」

王允字子師、世仕州郡、爲冠蓋。同郡郭林宗見而奇之、曰、王生一日千里、王佐才也。遂與之友善。允仕至司徒。

『太平御覽』卷四四五品藻上條所引「袁山松後漢書」

王允字子師、太原人。世仕州郡。郭林宗嘗見允而奇之、曰、王生一日千里、王佐才也。遂與之友善。允至司徒。

范曄『後漢書』列傳五六王允列傳

王允字子師、太原祁人也。世仕州郡爲冠蓋。同郡郭林宗嘗見允而奇之、曰、王生一日千里、王佐才也。遂與定交。

## (viii) [何顥] ↓ (ix) [賈彪] も参照

『三國志』魏志第十荀攸傳裴松之注所引「張璠漢紀」

(何) 顥字伯求。少與郭泰・賈彪等遊學洛陽、泰等與同風好。顥顯名太學、於是中朝名臣太傅陳蕃・司隸李膺等咸深接之。

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳・何顥傳

何顥字伯求、南陽襄鄉人也。少遊學洛陽。顥雖後進、而郭林宗・賈偉節等與之相好、顯名太學。

## (參考)

『三國志』魏志第十荀攸傳裴松之注所引「漢末名士錄」

(袁) 術常於衆坐數顥三罪、曰、王德彌先覺雋老、名德高亮、而伯求疎之、是一罪也。許子遠凶淫之人、性行不純、而伯求親之、是二罪也。郭・賈寒襁、無他資業、而伯求肥馬輕裘、光耀道路、是三罪也。陶丘洪曰、王德彌大賢而短於濟時、許子遠雖不純而赴難不憚濡足。伯求舉善則以德彌爲首、濟難則以子遠爲宗。且伯求嘗爲虞偉高手刃復仇、義名奮發。其怨家積財巨萬、文馬百駟、而欲使伯求羸牛疲馬、頓伏道路、此爲披其胸而假仇敵之刃也。術意猶不平。

## (ix) [賈彪] ↓ (viii) [何顥] も参照

『藝文類聚』卷五二所引「袁崧後漢書」

賈彪、字偉節。遊京師、與郭林宗等爲談論之首。一言一行、天下以爲準的。黨事起、彪謂同志曰、吾不西行、大難不解。即入關、設方略。天子爲之大赦。

『初學記』卷二〇赦條所引「袁山松後漢書」

賈彪遊京師、郭林宗・李元禮等爲談論之首。一言一行、天下以爲準的。黨錮事起、彪謂同志曰、吾不西行、大難不解矣。即入關、乃設方略。天子爲之大赦。

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳序

因此流言轉入太學、諸生三萬餘人、郭林宗・賈偉節爲其冠、竝與李膺・陳蕃・王暢更相褒重。

范曄『後漢書』列傳七一獨行列傳・范冉傳

(范冉) 與漢中李固・河內王奐親善、而鄙賈偉節・郭林宗焉。

(x) [宿仲琰]

『太平御覽』卷七十六當條所引「郭林宗別傳」

宿仲琰爲部從事、嘗柴車駕牛、編荊爲當。

(xi) [徐穉]

①

現行本『風俗通』卷三愆禮篇

公車徵士豫章徐孺子、比爲太尉黃瓊所辟、禮文有加。孺子隱者、初不答命。瓊薨、既葬、負~~陶~~<sup>陶</sup>~~弄~~涉、齋一盤、醊哭於墳前。孫子琰故五官郎將、以長孫制杖、聞有哭者、不知其誰、亦於倚廬、哀泣而已。孺子無有謁刺、事訖便去、子琰大怪其故、遣瓊門生茅季瑋追請辭謝、終不肯還。

②

『藝文類聚』卷七〇鏡條所引「海內玉品子」

徐孺子常事江夏黃公。公卒、孺子往會葬、無資自以致、齋摩鏡具自隨、每所在、賃摩鏡取資、然後得前。既至、祭畢而退。

『太平御覽』卷七一七鏡條所引「海內士品」

徐孺子嘗事江夏黃公。黃公薨、往會其葬、家貧無以自致、齋<sup>口</sup>磨鏡具自隨、賃磨取資、然後得前。既至、祭而退。

③

范曄『後漢書』列傳四三徐穉列傳李賢注所引「謝承書」

穉諸公所辟不就、有死喪負笈赴弔。常於家豫炙雞一隻、以一兩縣絮漬酒中、暴乾以裹雞、徑到所起冢塚外、以水漬縣使有酒氣、斗米飯、白茅爲藉、以雞置前、醊酒畢、留謁則去、不見喪主。

『世說新語』德行篇劉孝標注所引「謝承後漢書」

徐穉字孺子、豫章南昌人。清妙高峙、超世絕俗。前後爲諸公所辟、雖不就、及其死、萬里赴弔。常豫炙雞一隻、以綿漬酒中、暴乾以裹雞、徑到所赴冢塚外、以水漬綿、斗米飯、白茅爲藉、以雞置前。醊酒畢、留謁即去、不見喪主。

『文選』卷五五廣絕交論李善注所引「謝承後漢書」

徐穉、字孺子、前後州郡選舉、諸公所辟、雖不就、有死喪負笈赴弔。常於家預炙雞一隻、一兩綿漬酒、日中曝乾以裹雞、徑到所赴冢塚外、以水漬之、使有酒氣。升米飯、白茅藉、以雞置前。醊酒畢、留謁即去、不見喪主。

『太平御覽』卷五六一弔條所引「謝承後漢書」

徐孺子不就諸公之辟、及有喪者萬里赴弔。常於家預炙雞一隻、以一兩綿絮浸酒中、暴乾以裹雞、徑到所赴冢塚、以水漬綿使有酒氣、以雞置前、祭畢便去。

『太平御覽』卷八一九綿條所引「謝承後漢書」

徐稚不就諸公之辟、及有喪者萬里赴弔。常於家預炙雞一隻、以一兩綿絮漬酒中、曝乾至門以綿絮置水中候使有酒氣、以雞置前、祭畢便去。

『北堂書鈔』卷一四五炙條所引「謝承後漢書」

徐穉常於家預炙雞一隻、以一兩綿絮漬酒、裹之。

④

『北堂書鈔』卷八九祭祀惣下條所引「謝承後漢書」

徐孺子嘗爲太尉黃瓊所辟、不就。及瓊卒歸葬、穉乃負糧徒步、到瓊所赴之、設鷄酒脯祭、卒哭而去。不告姓名。

④『太平御覽』卷四〇三道德條所引「海內先賢行狀」

徐孺子徵聘未嘗出門，赴喪不遠萬里。常事江夏黃公、薨，往會其葬，家貧，無以自供，齋磨鏡具自隨，每至所在，賃磨取資，然後得前。既至設祭，哭畢而返。

⑤『太平御覽』卷五〇八逸民八條所引「皇甫士安高士傳」

徐稚字孺子，豫章南昌人也。少以經行高於南州。桓帝時，汝南陳蕃爲豫章太守，因惟薦稚於朝廷。由是三舉孝廉，賢良，皆不就。連辟公府，不詣。未嘗答命，公薨，輒身自赴弔。太守黃瓊亦嘗辟稚，至瓊薨，歸葬江夏，稚既聞，即負笈徒步豫章三十餘里，夏瓊墓前致辭而哭之。後公車三徵，不就，以壽終。

⑥袁宏『後漢紀』卷二二孝桓皇帝紀下延熹四年八月條

諸公所辟雖不就，其有死喪者，負笈徒步千里赴弔，斗酒隻雞，藉以白茅，酌畢便退，喪主不得知也。初，稚少時遊國學中，江夏黃瓊教授於家，故稚從之，諮訪大義。瓊後仕進位至三司，稚絕不復交。及瓊薨，當葬，稚乃往赴弔進爵，哀哭而去，人莫知者。時天下名士，四方遠近無不會者，各言，聞豫章徐孺子來，何不相見。推問喪卒曰，頃寧有書生來邪。對曰，先時有一書生來，衣羸薄而哭之哀，不記姓字。僉曰，必孺子也。於是推選能言語者陳留茅季偉候與相見，酤酒市肉，稚爲飲食。季偉請國家之事，稚不答。更問稼穡之事，稚乃答之。季偉還爲諸君說之。或曰，孔子云，可與言而不與言，失人。稚其失人乎。郭林宗曰，不如君言也。孺子之爲人也，清潔高廉，飢不

可得食，寒不可得衣，而爲季偉飲酒食肉，此爲已知季偉之賢故也。所以不答國事者，是其智可及其愚不可及也。何不知之乎。是時宦豎專政，漢室侵亂，林宗周旋京師，誨誘不息。稚以書誡之曰，大木將顛，非一繩所維。何爲棲棲，不遑寧處。林宗感悟曰，謹拜斯言。以爲師表。

⑦范曄『後漢書』列傳四三徐穉列傳

穉嘗爲太尉黃瓊所辟，不就。及瓊卒歸葬，穉乃負糧徒步到江夏赴之，設雞酒薄祭，哭畢而去，不告姓名。時會者四方名士郭林宗等數十人，聞之，疑其穉也，乃選能言語生茅容輕騎追之。及於塗，容爲設飯，共言稼穡之事。臨訣去，謂容曰，爲我謝郭林宗，大樹將顛，非一繩所維，何爲栖栖不遑寧處。

（Ⅻ）〔岑晊〕

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳·岑晊傳

（岑）晊有高才，郭林宗·朱公叔等皆爲友，李膺·王暢稱其有幹國器，雖在閭里，慨然有董正天下之志。

（Ⅻ）〔盛仲明〕

『文選』卷四七袁彥伯「三國名臣序贊」李善注所引「袁崧後漢書」

郭林宗與陳留盛仲明書曰，足下諸人，爲時棟梁。



(xiv) [蘇不韋]

范曄『後漢書』列傳二一蘇不韋列傳

(蘇)不韋後遇赦還家，乃始改葬，行喪。士大夫多譏其發掘冢墓，歸罪枯骨，不合古義，唯任城何休方之伍員。太原郭林宗聞而論之曰，子胥雖云逃命，而見用強吳，憑闔廬之威，因輕悍之衆，雪怨舊郢，曾不終朝，而但鞭墓戮屍，以舒其憤，竟無手刃後主之報。豈如蘇子單特子立，靡因靡資，強讎豪援，據位九卿，城闕天阻，宮府幽絕，埃塵所不能過，霧露所不能沾。不韋毀身焦慮，出於百死，冒觸嚴禁，陷族禍門，雖不獲逞，爲報已深。況復分骸斷首，以毒生者，使(李)嵩懷忿結，不得其命，猶假手神靈以斃之也。力唯匹夫，功隆千乘，比之於(伍)員，不以優乎。議者於是貴之。

(xv) [陳元方／傳信 (其母以錦被蒙)]

『太平御覽』卷八一五錦條所引「語林」

陳元方遭父喪，骨立，其母慙之，以錦被蒙其上。郭林宗往弔見而責之，賓客絕百許日。

『太平御覽』卷七〇七被條所引「語林」

傳信字子思，遭父喪，哀慙骨立，母憐之，竊以錦被蒙其上。林宗往弔之，見被，謂之曰，卿海內之雋，四方是則，如何當喪錦被蒙上。郭奮衣而去。自後賓客絕百許日。

『太平御覽』卷五六一弔條所引「語林」

陳元方遭父喪，形體骨立，其母哀之，以錦蒙其上。郭林宗往弔，見錦被，而責之，賓客絕百許日。

『太平御覽』卷五一父母條所引「世說」

陳元方遭父憂，哭泣哀慙，容體骨立，其母慙之，竊以錦被蒙之。

郭林宗吊而見之，謂曰，卿海內之俊，四方是則。如何當喪以錦被焉。孔子曰，衣夫錦□，食夫稻□，於汝安乎。吾不取也。因奮衣而去。自後賓客絕數百日。

『世說新語』規箴第十

陳元方遭父喪，哭泣哀慙，軀體骨立。其母慙之，竊以錦被蒙上。郭林宗弔而見之，謂曰，卿海內之雋才，四方是則。如何當喪，錦被蒙上。孔子曰，衣夫錦也，食夫稻也，於汝安乎。吾不取也。奮衣而去。自後賓客絕百所日。

(xvi) [陳寔]

『太平御覽』卷一八一舍條所引「謝承後漢書」

陳寔字仲弓，詣太學，郭林宗・陳仲舉爲親友。歸家，立精舍，講授諸生數百人。

(xvii) [田盛]

范曄『後漢書』列傳五八符融列傳

(符)融同郡田盛，字仲嚮，與郭林宗同好，亦名知人，優遊不仕，竝以壽終。

(Ⅷ)〔范滂と陳蕃〕

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳・范滂傳

(范滂) 遷光祿勳主事。時陳蕃爲光祿勳、滂執公儀詣蕃、蕃不止之、滂懷恨、投版弃官而去。郭林宗聞而讓蕃曰、若范孟博者、豈宜以公禮格之。今成其去就之名、得無自取不優之議也。蕃乃謝焉。

(Ⅷ)〔劉儒〕

『太平御覽』卷四六四訥條所引「晉書」

郭林宗謂劉儒、口訥心辯、有珪璋之質。

※引用書名誤りの可能性あり

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳・劉儒傳李賢注所引「謝承書」

林宗歎儒有珪璋之質、終必爲令德之士。

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳・劉儒傳

郭林宗常謂(劉)儒口訥心辯、有珪璋之質。

(Ⅷ)〔八顧〕

范曄『後漢書』列傳五七黨錮列傳・序

郭林宗・宗慈・巴肅・夏馥・范滂・尹勳・蔡衍・羊陟爲八顧。顧者、言能以德行引人者也。

(參考)

傳陶潛『聖賢羣輔錄』所引「三君八俊錄」

有道太原介休郭泰字林宗天下和雍郭林宗、太常陳留圍夏馥字子治天下慕

特夏子治、尚書令河南鞏尹勳字伯元天下英藩尹伯元、河南尹太山平陽羊

陟字嗣祖天下清苦羊嗣祖、議郎東郡發劉儒字叔林天下瑤金劉叔林、冀州刺

史陳國項蔡衍字孟喜天下雅志蔡孟喜、潁川太守渤海東城巴肅字恭祖天下

臥虎巴恭祖、議郎南陽安衆宗慈字孝初天下通儒宗孝初。右八顧。

傳陶潛『聖賢羣輔錄』所引「甄表狀」

有道太原郭泰字林宗。狀、泰器量弘深、孝友貞固、名布華夏、學冠群儒、州郡

禮命、曾不旋軌、辟司徒、徵有道、竝不屈。

※「番付」(「八顧」)に關わる史料については、「拙稿二〇〇二」を、  
参照賜りたい。